

# FDreport

## 2025.3 vol.18

Doshisha Women's College of Liberal Arts, Founded in 1876.

同志社女子大学

### CONTENTS

◆ 巻頭言 ◆

「「倜儻不羈なる書生」へいざなわれ」 学長 小崎 真 ◆01

◆ 2024年度FD Session ◆

講演「主体的な学びを導く Problem Based Learning」  
東京都市大学 教育開発機構 副機構長 伊藤 通子氏 ◆03

◆ 2024年度大学院FD講習会 ◆

講演「大学院に来る意味をどのように創造するか」  
文学研究科情報文化専攻 川田 隆雄氏 ◆45

◆ 教育開発実践報告 ◆

◇ 学部

「学芸学部FD活動報告」 学芸学部長 椎名 亮輔 ◆58

「<学部の多様性を力に変える>～現代社会学部のFD活動～」  
現代社会学部長 日下 菜穂子 ◆60

「薬学教育における医療プロフェッショナルリズムを考える」 薬学部長 芝田 信人 ◆62

「看護学部FD報告」 看護学部 高城 智圭 ◆65

「表象文化学部FD報告」 表象文化学部長 鈴木 健司 ◆67

「生活科学部合同特別セミナー「サステナブルな衣食住を考える」を開催」  
人間生活学科主任 藤本 純子 ◆69  
食物栄養科学科主任 杉浦 実 ◆69

◆ 教育開発実践報告 ◆

◇ 研究科

「大学院文学研究科FD報告」 文学研究科長 椎名 亮輔 ◆71

「国際社会システム研究科のFD活動」 国際社会システム研究科長 日下 菜穂子 ◆73

「大学院FD・大学院教育への取り組み・研究室紹介：病態分子制御学研究室」  
薬学研究科長 芝田 信人 ◆74

「FD活動報告」 看護学部看護学科主任 小松 光代 ◆79

「2024年 生活科学部・生活科学研究科FD研修」 生活科学研究科長 山本 寿 ◆80

◆ 2024年度春学期 授業に関するアンケート 総評 ◆ 教育開発支援センター長 奥田 紫乃 ◆81

◆ ラーニング・commons 利用報告 ◆ ◆90

◆ FD活動報告(2024年度) ◆ ◆102



## ◆巻頭言◆

## 「倜儻不羈なる書生」へいざなわれ

学長 小崎 眞

FD レポート第 18 号の刊行にあたり、今年度の FD 活動にご尽力並びにご貢献いただきました皆さまに感謝申し上げます。

21 世紀社会に入り、様々な教育現場において“ダイバーシティ”、“インクルージョン”との言葉表現が散見されるようになりました。大学においても、「ダイバーシティ研究環境実現」との旗印の下、多様性を尊重する教育・研究活動が期待されています。一方、多種多様な価値観の中で、若者たちは将来へ向けての目標や希望を築き難い状況があるのかもしれませんが、結果、将来不安や自信喪失といった思いへ縛られた若者が増加している現実も否めません。

このような現実に対峙しつつ、大学での教育・研究を活性化させる意味においても FD 活動は必須な事柄であると言えます。内田樹氏は教育提供者（教授側）の責務を以下のごとく明言します。

「女子大は何の役に立つのか?」という問いを立てる人に似たタイプの方はきっと明治の初めにもいたはずである。(略)「そんな学校を作って何の役にたつのか?いったい誰が入学すると思っているのか?」と冷笑した人はきっといただろうと思う。そう問われたときに、建学者たちはたぶんにこやかに微笑み返して「何の役に立つのか、私にはわかりません。でも、待っていれば、『ここで学びたい』という子どもたちが必ず現れるはずです」と答えたのではないかと私は想像する。(中略)教育は学びを起動することであって、商品を提供することではない。

(内田 樹「教育機関の多様性について」『大学の教育力を発信する』第 22 回 FD フォーラム、2017. 3. 5)

本学の創立者新島襄も明治期にあって、当時の多くの知識人が抱いていたであろう近代的価値基準に根差した合目的な教育観とは異なる視座を有していたようです。それゆえ、遺言の中で、「倜儻不羈なる書生」を大切に育むことを、後世へ託しています。ご存じのごとく「倜儻不羈なる書生」とは、「粗削りでも才気にあふれ、志をもって大きな目的に向かって行動する『龍蛇（りゅうだ：再生した命）』のような人物」を表します。

今日的時代状況下で、新島の遺言への解釈を加えることをお許し頂ければ、いわゆる「教員や既存の社会がつくりあげる価値基準・世界観」に縛られない（不羈な）人物の育成を願っていたように思われます。自分自身を棚上げすることなく新島の遺言に向き合ってみると、「教員」は「先生」と呼ばれ、先を生きた存在ゆえか、「自己の正しさ」を語ろうとする姿勢に陥りやすい存在であるのかも知れません。加えて、「指導」という関係の中で、自身の価値基準の正当性や絶対性を後に続く者たちに対して提供（強要）し、その世界観へ閉じ

込めようとする傾向があるのかもしれませんが。このように、いわゆる教師が陥りやすい「自己世界の絶対化」や「自己陶醉」に対して、新島は危惧したのではないのでしょうか。ゆえに教師や先生の「手綱」に収まらない人物の育成(学びの起動)を望んだのだと考えられます。

さらに、「書生」との響きは「生徒・学生」に対してのみならず、教師側への助言であったとも考えられます。教師自身が、自らを縛る価値基準に対して疑義を抱き、「書生を圧束せず」と語り、真の自由へと目覚めることを示唆したように思われます。狭い教師観や教育観から解放された「書生」として歩むことの豊かさを期待したのかも知れません。

この激動の21世紀社会に生命を与えられている学生たちと向き合う際、今一度、教師自身を「拘束する／圧束する」価値基準からの解放へと呼び出されていきたいものです。150年に及ぶ歴史のその先へ向け、「倜儻不羈」なる眼差しに連なりたく思います。学生教職員共々、各人を縛る価値基準を再考し、「学び続ける書生：人物」としての歩みを築き始めたく思います。そこに、同志社女子大学独自のFD活動への源泉があり、新しい希望が噴出することを確信したいと思います。

◆2024年度 FD Session◆

日時：2025年2月18日（火）13：30～  
視聴方法：マナビーのFD関連 info.(2024)Zoom より視聴  
テーマ：「主体的な学びを導く Problem Based Learning」  
講師：東京都市大学 教育開発機構 副機構長 伊藤 通子先生

「主体的な学びを導く Problem Based Learning」

東京都市大学 教育開発機構 副機構長 伊藤 通子先生

はじめに

本日の内容

1. 自己紹介と、東京都市大学の全学的PBL教育
2. あらためてPBLとは？  
Problem/Project Based Learning
3. PBL科目の実践例
4. PBL 授業の作り方
5. 展望 -これからの日本のPBLがめざすこと-

先ほどご紹介いただきました、東京都市大学教育開発機構の伊藤と申します。  
よろしく願いいたします。

本日の内容ですが、このような内容でお話ししてまいりたいと思います。

1. 自己紹介と、東京都市大学の全学的 PBL 教育

3

## 自己紹介

---

■ 職歴：富山高専 35年 → 東京大学 2年 → ESD-J 1.5年 → **東京都市大学 7年+α**



■ 専門：工学 → 工学教育 → +学習科学 (ESD, PBL, AL)

■ 行動原理：フィロソフィー／デモクラシー／イノベーション

創 立	1929年
種 類	私立大学 (旧 武蔵工業大学)
学 部 等	2大学院研究科、共通教育部 8学部、18学科
学 生 数	8,217名 (2024.5)

職 務

副学長補佐  
FD推進センター長  
大学院 電気・化学専攻 を経て  
現在 教育開発機構 副機構長

他大学の  
PBLカリキュラム  
アドバイザーも

創立100周年(2029)に向け  
全学の教育改革・FDを担当

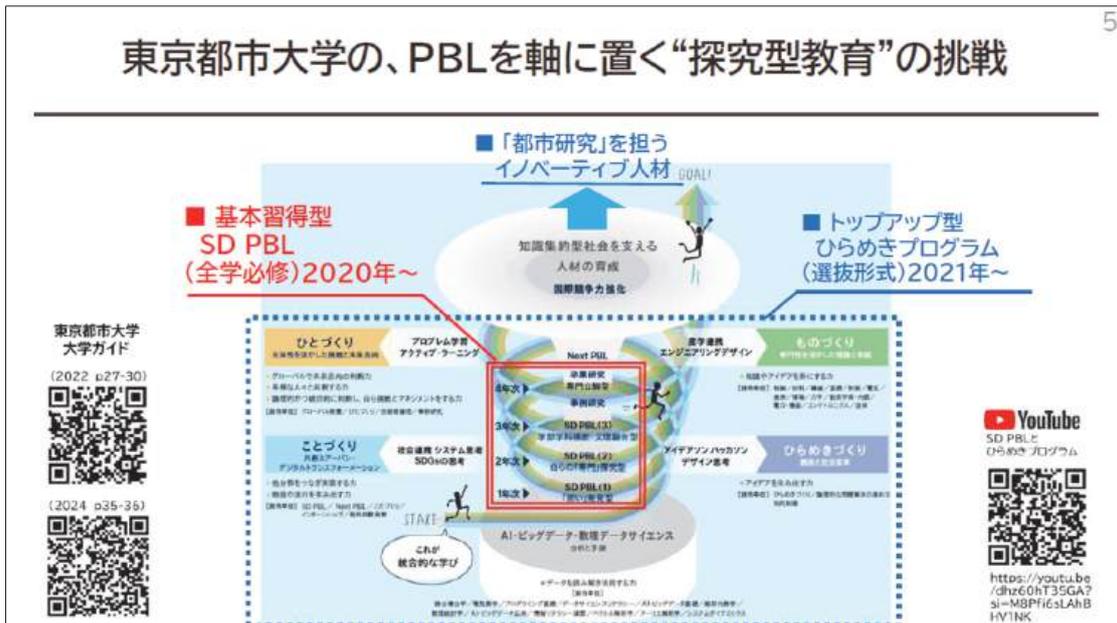
自己紹介ですが、奥田先生よりご紹介がありましたような経緯で、今は教育開発機構の副機構長を務めております。主な仕事というのは全学の教育改革やFDの担当です。

4



## 全学部・全学年で実施する 都市大のPBL教育とは

まず最初に、今日のテーマにも即して、本学ではPBLというものを探究教育の中心に置いたカリキュラムを2020年頃から実施しておりますので、そのことについてご紹介させていただきます。



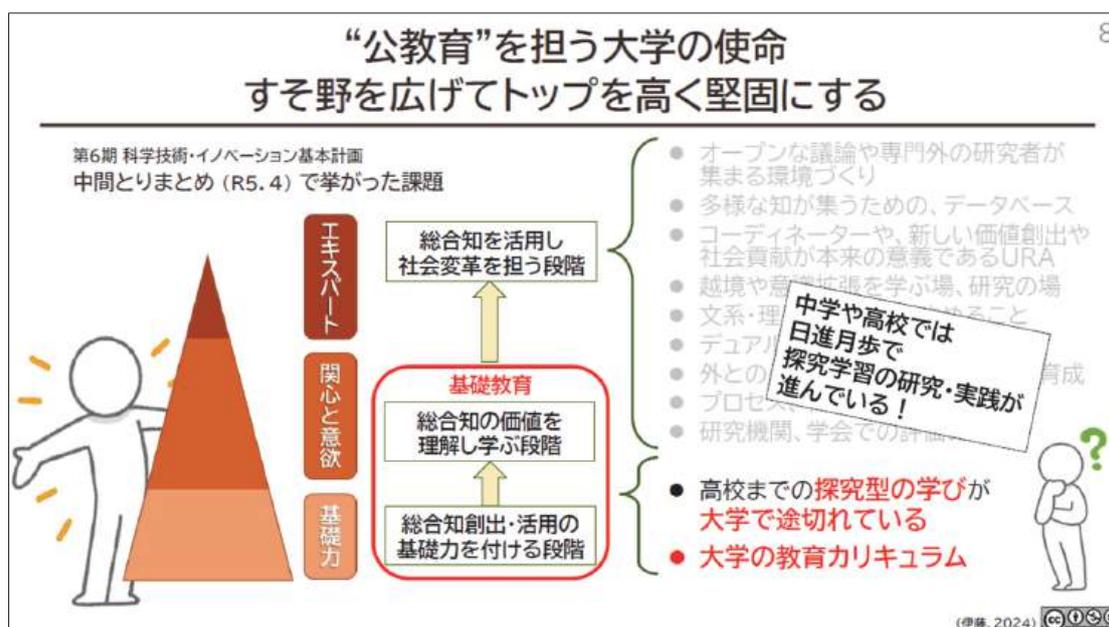
これが東京都市大学のPBLを軸に置く探究型教育の挑戦です。2020年度から始めましたが、まだまだ毎年改善をしながら完成形に向けて挑戦中です。まずは赤字で示したSDPBLという新しい科目を作ったのですが、これは全学部・全学年に必修科目として配置したPBL科目になります。さらに、意欲の高い学生には、青字と青点線で示したひらめきプログラムというものを用意しておりまして、それらで学んだことを統合して最終的には研究活動を行って卒業してほしいというのが全体的な構造です。

本学では2024年度から学長が代わり、野城先生のご専門がイノベーションということもあり、今はSDGsの時代なのですけれども、その合い言葉である「社会を変革する」というところと、あとはそもそも都市大の教育目標がSDGs以前に持続可能な社会の発

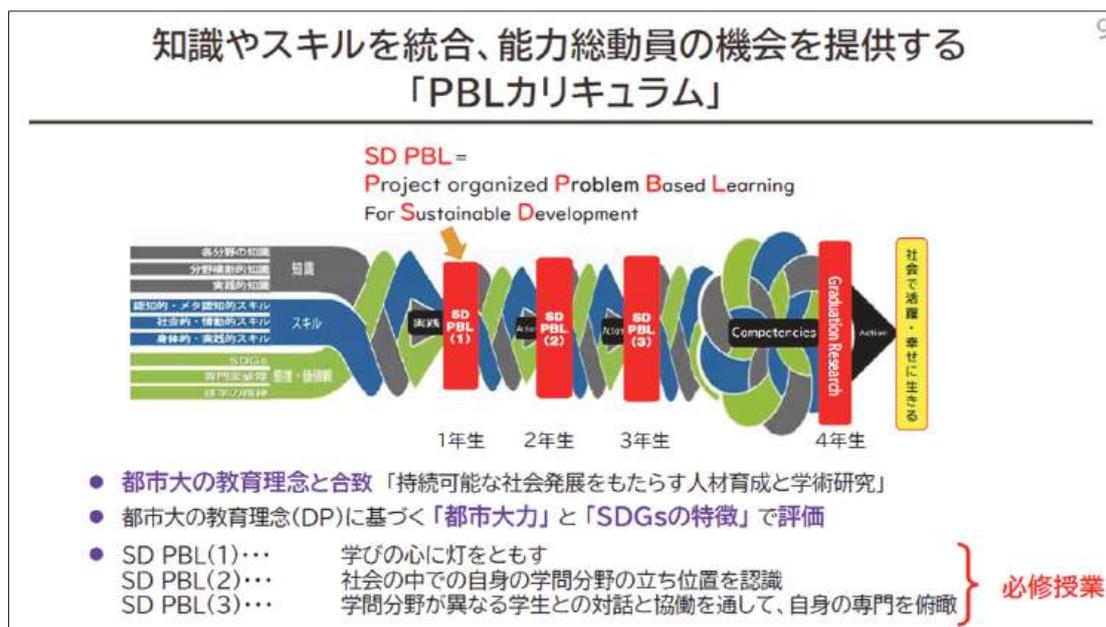
展に貢献できる人材を育成するというものがありましたので、このあたりを総合して、より目的が明確化してきました。



考慮した社会情勢というのはこれで、我が国は2000年頃には世界競争力の総合順位が1位・2位ぐらいだったのですけれども、どんどん落ちてきて今や35位、去年は確か38位か39位までまた落ちました。それはまた産業界で話題になっていましたけれども。そして、その落ちた内容を分析したレーダーチャートの教育のところが極端にへこんでいます。赤線が日本なのですけれども、教育にとってはこのようなショッキングなデータとなっています。このようなことから、今は日本を挙げてイノベティブな人材を輩出しなければならないという社会情勢がバックにあるということです。あとのスライドで触れますが、この日本より上にある国々の中には、結構、私はこの色々な国々に教育視察に行っているのですけれども、50～60年前は日本と同じだったのが国をあげた教育改革の効果が出てきて、今や競争力でトップレベルにあるという国々も含まれております。もちろん教育だけが原因だとは限らないのですが、世界にはそのような国々もあります。



これが我が国の科学技術イノベーション基本計画であがった課題ですが、上のグレーになっているところは割と研究分野や博士課程の課題があるわけですが、下のところに高校までの探究型の学びが大学で切れているなど、大学の教育カリキュラムそのものがなかなかイノベーターを生むようなカリキュラムになっていないということが問題としてあげられています。すなわち、この基礎教育の部分です。日本の場合は、エキスパートの部分は大学・産業界・行政が一体となって力を入れ始めているのですが、基礎教育の部分というのは、やはり私たち教育現場が担うものではないかと思っています。特に、中学校・高校は、かなりこれが進んでいます。附属の中学や高校を持っている大学はよくご存じだと思いますのですけれども。4～5年前、私がアドバイザーに行ったりしていた学校では、探究学習のレベルはまだまだで、あくまでも受験対策の一環という内容だったのですが、探究の時間が指導要領に入ってから一気に研究・実践が進んだようで、この3～4年ですごく中学も高校もレベルを上げてきています。そのような人たちが我々の大学に入学してきたときに、それをさらに伸ばすようなプログラムを私たちは用意しているのかということが、もしかすると将来的には高校生に選ばれる大学であるかということに影響してくるのかもしれない。



これが東京都市大学のSD PBLという科目を新設したカリキュラムの考え方です。左側には既存の今までの授業群があります。様々な授業で知識・スキル・態度・価値観などを育てているわけですが、1年生、2年生、3年生にこのSD PBLという科目を置くことによって、既存科目で学んできた知識やスキルを統合し能力を総動員して使う機会を提供する。そのときに、決して認知能力だけではなく非認知能力も総動員して使ってみる。そして失敗したり成功したりしていくという学びの機会を作ったのがこのSD PBLのカリキュラムです。科目の趣旨は都市大の教育理念と合致させ、その教育理念に基づく評価の枠組みというものを整備しループリックに表して、先ほど奥田先生も少し紹介していただきましたが、教育開発機構として作りまして、それは「都市大力」と呼んでいるのですが、その都市大力とSDGsの特徴で評価するというようにしております。

1年生から3年生まで(1)(2)(3)とあるのですが、(1)は入学してすぐですので、自分が入った学科の学問分野に対して興味・関心を持つということで「学びの心に火を灯す」、2年生になると、「社会の中で自身の学問分野の立ち位置を認識」、3年生では学科・学部を全部一緒に混成のクラス分けをして、その中でチームを作って、学問分野が異なる学生との対話と協働を通して自身の専門を俯瞰していくということを2020年度からやっているわけです。



11

## 設計時の参考：イノベーション人材育成に関する先行研究

---

- 学問の体系的修得を目的とした伝統的なカリキュラムが、イノベーション人材輩出の抑制要因
- 21世紀のテーマである「環境的、社会的、技術的課題を総合的に扱う新しいカリキュラム構成」と、「学生中心の教育方略」とが統合された一貫的教育プログラムの先行事例
- イノベーションは、もはや個人の知識や、単分野の知見のみでは起こせない => グループ・ジーニアス の起こし方
- 組織の中で活躍する シリアル・イノベーター の育成

(伊藤, 2022)

Ruth Graham (2018)  
The global state of the art in engineering education, MIT

Graaff, E. de & Kolmos, A. (2007).  
Process of Changing to PBL, Graaff, E. de & Kolmos, A. , Management of Change: implementation of problem-based and project-based learning. Sense Publishers (Rotterdam).

Torp, L. & Sage, S. (2002).  
Problems as possibilities: Problem-based learning for K-16 education. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development.

Keith Sawyer (2018) Group Genius: The Creative Power of Collaboration , Basic Books

Abbie Griffin , Raymond L. Price (2012) Serial Innovators: How Individuals Create and Deliver Breakthrough Innovations in Mature Firms, Stanford Business Books

そのような観点で海外ではすでにいろいろ研究されているのですが、そちらの先行研究を参考にして、先ほど紹介したようなカリキュラムを作ったわけです。

12

## 設計時の参考： デンマークの学習観と、オルボーPBLモデル（～1974）

---

- 学校は教える場ではなく、一人ひとりが可能性を見つけるところ
- 知識は使えてこそ
- 合言葉は、イノベーション&フィロソフィー
- 競争ではなく 協力と合意形成のスキルや能力
- 持続可能性のための知恵を生み出すため
- PISAの結果より、社会に出て成果を出す

… ➤ **オルボー大学のねらい：イノベーション**

- イノベーションの基礎となるものはもはや個人の知識ではない
- イノベーションの基礎となるものは
  - ・チームで共有できる知識
  - ・専門分野横断型の知識
  - ・異文化間の知識 : Keith Sawyer(2007)

…では、これらの達成に必要な学びとは？  
Kolmos(2013)



**小学校からのPBL教育が、  
福祉とグリーンイノベーション成長戦略の 国づくりの根幹 となっている**

デンマーク大使館 中島健祐(2012)「環境先進国デンマークのグリーン成長戦略～デンマークの知恵から学ぶ日本と世界の未来～」『技術と経済』10月号P14-24

(伊藤, 2022)

ここではデンマーク、先ほどの競争力ランキングでトップの国の教育事情を紹介します。実は、私個人はランキングは好きではないのですけれども、わかりやすいので利用します。デンマークは、イノベーション力などでも常にトップレベルで、7枚目のスライドの通り2023年度は1位でした。今は2位か3位になったかもしれませんが。いろいろな国の教育を調査してきたのですが、この国の公教育が一番心が打たれました。学校は教える場ではない、一人ひとりの可能性を見つけるところなのだ。これを各学校種が一貫して実施している態勢は、すごくインパクトがありました。これは別に大学の話だけではありません。

大学でなぜこのような教育が上手くいくのだろうかということ、それから中学に行き、小学校に行き、全部の学校を見てきたのですが、まるで金太郎飴を切ったように先生方が、人はみんな何らかの可能性を持っているのだと、その可能性を拓いてあげて、学習者自身がその可能性をどんどん伸ばしていける力をつけてあげるところが学校なのだと切り切るわけです。そのあたりが建前ではそうであっても日本式受験勉強を強いている日本とはかなり違います。今日の講演はオンラインなので聞けませんけれども、よく会場の方に、「学校とは何をするとところと聞かれたら何と答えますか」と尋ねると、やはり皆さん「何かを教わるところだ」、少し気の利いた答えだと「一生涯の友達を見つけるところだ」、「一生涯の師を見つけるところ」など、いろいろな意見があるわけですが、デンマークの場合はこうなのです。教育に対するそういう理念やシステムが大学でイノベーションに特化した高レベルの教育ができるという理由です。基本的なことが小中高でできているので、言い換えるとPBLの基本ができていますので、もう大学ではそれを基本にしながら非常に専門性の高いことができるのです。これならばイノベーション立国にもなるだろうと納得できる教育が1960年代の国をあげた教育改革からされていて、この大学は1974年にできた大学ですけれども、そういう国々が世界にはあるということです。

**都市大のSD PBLの特徴的な「ねらい」** 13

	一般的な(日本の)PBL	問題	SD PBL(3)	ねらい
カリキュラム	科目間の関連性を 持たせずに、バラバラに 実施	PBL疲れ 大学教育界に、 模造PBLが増加	既存科目との調和	知識やスキルを 持っているだけでは 不足な時代に対応
問題	与える	問題ではなく課題から 始め、解決に注力	学生が定義する	自らの価値観に基づく 「問い」にこだわる
Pの意味	Project	効率的なProject推進 に重点	Problem	「問い」を定義するとい う一般的な日本人の弱 い点を鍛える
指導者	得意な教員が自身の 授業枠内で実施	公教育としての広がり 期待できない	(1)(2)を加えると 多数の教員が担当	他の科目との相乗効果、 一貫性が期待できる
受講者	一部(関心高い層)	苦手学生は取り残し	全学生	公教育としての役割
目的	学生個々の資質向上	大学のDPと必ずしも 対応せず大学ブランド化 には貢献しない	大学の教育理念に 基づくESDの要素 (ESD=Education for Sustainable Development)	今日の社会課題 (SDGsなど)への 教育からのアプローチ ⇒ブランド化しうる

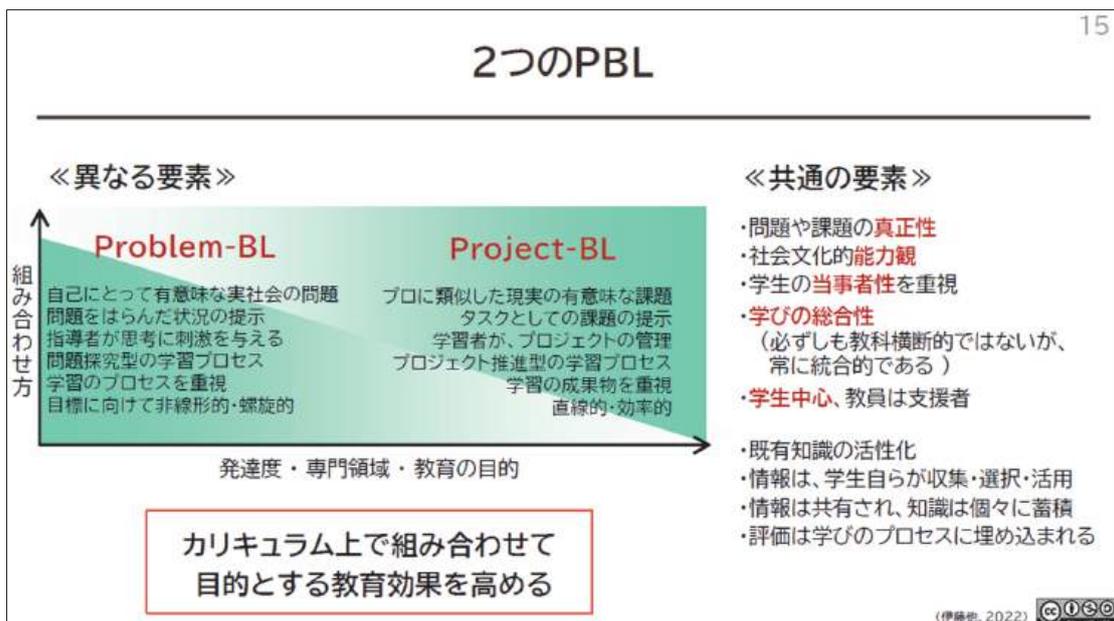
これが都市大の特徴的な狙いです。例えば、カリキュラムは、普通は割と科目間の連携を持たせずに配置・実施しているのですが、都市大ではPBL科目と既存科目の調和を考慮したということです。あとはプロジェクト。これは後ほど説明しますが、PBLのPはプロジェクトとプロブレムがありますが、どちらかという都市大は問いを定義するという一般的な日本人の弱い点を鍛えるという意味であえてプロブレムというのを、特に、全学的な科目SD PBLでは、と限定したほうがいいかもしれません。各学科の中でも学科の目的に即したPBLをやっていますので、そちらは、例えば工学部などはプロジェクト

に主眼を置いてやっているところもあります。SD PBLとしてはプロブレムだということです。それから、全学でやっているものですから、多数の教員が担当するということが他の科目との相乗効果や一貫性が期待できるということ。もう一つは、先ほども申し上げましたが、学生個々の資質向上に止まらず学校の教育理念、さらには日本の課題、さらには世界・人類の課題のようなことへもコミットできるということがあげられると思います。

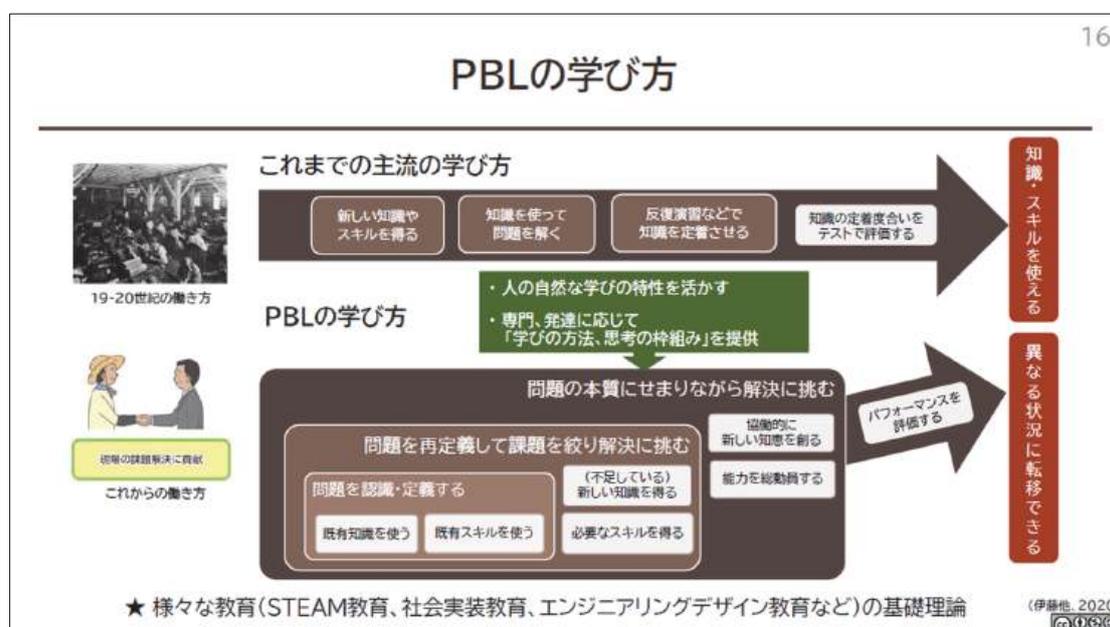
## 2. あらためてPBLとは？ Problem/Project Based Learning



釈迦に説法のような話になるかもしれないのですが、改めてここでPBLについて少し整理してお話したいと思います。



PBLは、主にプロブレム・ベースド・ラーニング。ほかにもプレイス・ベースドやプログラム・ベースドなど、いろいろなものがありますが、いちばん話題にのぼるプロブレムとプロジェクトを説明します。一番異なるのはここ、自己にとって有意義な問題です。プロジェクトのほうは、プロに類似した有意義な課題。問題と課題の定義も含めていろいろな違いがあります。しかしながら共通の要素もたくさんあります。例えば、問題や課題が真正性を持っている、能力感が社会文化的な能力観。これもあとで説明します。それから、本日のタイトルにもなっています学生の当事者性を重視している。それと学びの統合性。必ずしも教科横断的ではないとしても常に統合的であるということ。このあたりが共通の要素といわれまして、カリキュラム上ではこのプロブレムとプロジェクトを上手く組み合わせながら、その学問分野や発達段階に合ったように組み合わせるということややり方がとられているということです。



上が従来の主流の学び方です。まずは新しい知識を得て、テストをして、最後には知識やスキルを社会に出て使えるということが期待されるわけですが、PBLの学び方というのは、問題を最初に定義します。これは先生が与える場合もあれば学生自身が定義する場合もあります。そのときには既有知識や既有スキルをしっかり使います。問題を再定義しながら課題を絞り解決に挑む過程で、学生は、知識が不足しているということを必ず実感するわけです。そこで新しい知識や必要なスキルを、このときに主体的な学びが生まれてくるわけですが、自己主導的に学んでいく。そして、最終的には問題の本質に迫りながら解決に挑むわけですが、そのときには必ず一人ではもう無理、限界があるということに気づき、協働的に新しい知恵を作ったり自分自身の能力を総動員したり、そして最終的には、社会に出てからということになります。異なる状況にPBLのプロセスで学んで得たことを転移できるということが期待されるわけです。特に、PBLは、人の自然な学びの特性

を活かしているというところが特徴ですし、もう一つは、ただ問題を定義して解いていくだけではなく、やはり学びの方法や思考の枠組みなどを指導者側からしっかりと提示しながらやっていくということもかなり必要になってきます。このPBLの考え方というのはSTEAM教育や社会実装教育、その他いろいろあるのですが、そのような様々な、いわゆる問題解決型といわれる学び方の基本的な理論になっています。

17

## PBLは、3つ目の学習理論を実現する学び方

都市大では、3つの学習理論を組み合わせて、教育効果を高める  
知識基盤型・情報化・多様性の現代、状況主義が重要になってきている

	学び	方法	能力観	
<b>行動主義</b>	新しい知識や概念を「知る」、「記憶する」	講義やテストで反復によって	本質主義的	学校で通用する有能さ 個々の中に蓄積されている知識の量や質で有能さが決まり、テストで推定可能
<b>認知主義 構成主義</b>	新しい概念や認識を 既有知識と結びつけて 自ら構成して 「理解する」	実験・演習や 視覚教材による演示で 体験的に	本質主義的	伝統的な 講義や実習
<b>状況主義 (社会構築主義)</b>	他者と自己の知識を 共有・活用して 複雑な問題に取り組む 創造のプロセスで 「わかる」「できる」	プロジェクト学習や プロブレム学習で コミュニティの一員として 能動的に参画して	社会文化的 (関係性的)	社会で通用する有能さ 何が知的かは 状況や文化によって異なり 社会文化的に可視化される 能力で評価される PBLなど

参考: 永野重史(2001)

一つ、これもご存知の方はたくさんいらっしゃると思うのですがPBLの学習理論についてです。特に学生は、なぜこのような学び方をしなければいけないのかとよくいうのです。やはり、教室で座ったままで講義を聴くだけのほうが学生にとっては楽であり慣れているのです。ですから、それが勉強だと思いついて入っているのです。実は、今、この時代においてそれだけでは不足だから三つめの学習理論が出てきたのだということも併せて紹介しています。特に能力観のところでは。

PBLの能力観についてここで少し説明しましょう。行動主義というのは、知る、記憶するが学びの中心。構成主義というのは、元々学習者は何らかの知識を持っていて、それに新しい知識や情報を得ることによって自分の中に自ら構成し直して理解するというのがこの構成主義、認知主義です。それから状況主義というのは、さらに、知識は自分の頭の中だけにあるのではない、他者の中、または今ですとネットの中にもありますし、いろいろなところに情報というのは分散している。それを上手く自分の中に取り込みながら活用して、創造していくプロセスの中でわかる、わかることがどういうことがわかる、できるということになるという学びです。能力観が大きく違うのが特徴でして、行動主義や認知主義は本質主義的です。ですから、その学生自身の中に知識を持っているという仮定で、それはテストなどで測ることが可能で評価できるとしていますが、状況主義というのは社会・文化的といわれまして、何が知的であるか、何が有能であるかというのは状況や文化によっ

て変わるといふ考え方です。

例えば、わかりやすい例でいいますと、Aさんという上司と仕事をしたときは自分の能力がすごく活かされてすごくいい仕事のできたのに、Bさんと仕事したら何かどうもやりにくい、なかなか自分のいいところを活かせないなどということは私たちでもよくあります。それは自分の能力が変わったわけではなく、関係性の中で能力が発揮されるかされないかということになるわけです。

またさらに他の例でいうと、これは昔の小説で恐縮なのですが、私の時代の人は知っているかもしれないが『盲人国』という外国の小説の例です。普通の社会にいた人が、あるとき盲人ばかりがいらっしゃる国に行くことになりました。ですから非常に張り切って、盲人の方々は何もできないだろう、目が見えなくてご不自由だろうから自分が力を発揮してその社会で役に立とうと思って行くわけです。ところが、盲人の国へ行ってみると光がない、光がないのに、誰もが自然にいろいろなことができる。夜でもみんな自由に動き回って非常に高い能力を発揮しているのに、その人は何もできない。そうすると、その盲人の国の人たちから「あなたは能力ないですね」と言われるというSF小説です。このように状況や文化によって、または相手によって変わっていくという能力観です。それがPBLの能力観に近いということです。

18

## PBLのカリキュラムタイプ

### 統合型

グループ	事前学習		第1期			第2期			第3期			報告会
	1	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
1~13												報告会 実習報告会
14~20	オリエンテーション		施設実習									
21~30			施設実習									
31~40			施設実習									
41~50			施設実習									
51~100			施設実習									
101~110												

昭和大学コースサイト「初年度体験実習とPBL」チュートリアルより

### ハイブリッド型

サンマーク国際大学 学業月刊 (2012)より

東京大学 初年度教育「PBL」設計図より

PBLというのは、教授法と共にカリキュラムがとても大事だといわれています。右下のカリキュラムのように、日本ではそれぞれの科目の中でPBLをやっていることが多いのですが、一方でハイブリッド型といって、このコースモジュールに講義科目を集中させ、並行してプロジェクトモジュールをやる、セメスタ、半年間のカリキュラムです。ということによって、コースモジュールで学んだ知識をこのプロジェクトモジュールで活かさないプロジェクトが成功しないという、カリキュラム自身をそういう仕組みにして

あるわけです。そして最後に2週間も試験週間がとってありまして、じっくりとここで日本の卒業研究でやるような試験をするということなのです。そうすると学生たちは必死になりますね。講義を聞いて理解しないとプロジェクトが上手くいかないわけですから、または基礎実験や演習などもきちんとしておかないとプロジェクトで使えないわけですから、必死になってやるということになるわけです。先ほど、スライド16でPBLの説明をしたときに人間の自然な特性を活かすといいましたけれども、要するにこのようなカリキュラムを組むと、講義を聞けといわなくても、寝るなどいわなくても真剣に聞くということがおこる。実際、このような学生の姿をデンマークで見て驚いたのですけれども、そのようなハイブリッド型というカリキュラムをとられています。

また統合型といまして、すべてをPBLでやってしまいます。例えば、今、ある大学の設計のお手伝いをしているのですが、これは、1年生次に1年間かけてPBL科目を実施し、その中で完結する、その中で知識も与えるいろいろな方法論も与えながら4クォーターまで一貫性をもたせてPBLを行うという統合型のPBLカリキュラムです。このように、大きく分けると二つの形があります。そして、都市大はどちらかというとハイブリッド型に近いほうをとったということです。

19

## 2つの発生源

- ◆ **カナダ・マクマスター大学、医学教育から広がったPBL**
  - ① 専門が高度化、細分化する学問分野から、大量の知識を効率よく取り込み、再構成して応用する力の育成が目的
  - ② 専門職業人としての知的、感情的、社会的な体験ができる  
⇒近年はチーム医療へ
- ◆ **デンマーク・オルボー大学、工学教育からのPBL**
  - ① イノベーションのための、チームによる知の創出が目的
  - ② グローバル・リーダーの育成
  - ③ 専門分野の学問的たこつば化からの脱却  
社会的文脈を重視すべき(技術・社会)開発などに不可欠な学際的視点

▶ 「学習権」を「人類の生存に不可欠な手段」かつ「基本的人権の一つ」とする  
ユネスコにより、オルボーPBLモデルはユネスコチェア (UNESCO Chairs) として認定  
Keyword: イノベーション、哲学的、競争より協力、チームで新しい知を生み出す  
使える知識、プロセス重視、一人ひとりの可能性を引き出す

伊藤(2018)

個

↑↓

(個)  
チーム  
社会

効率・結果重視  
資質・能力論型教育  
を志向

持続可能社会  
構築型教育  
を志向

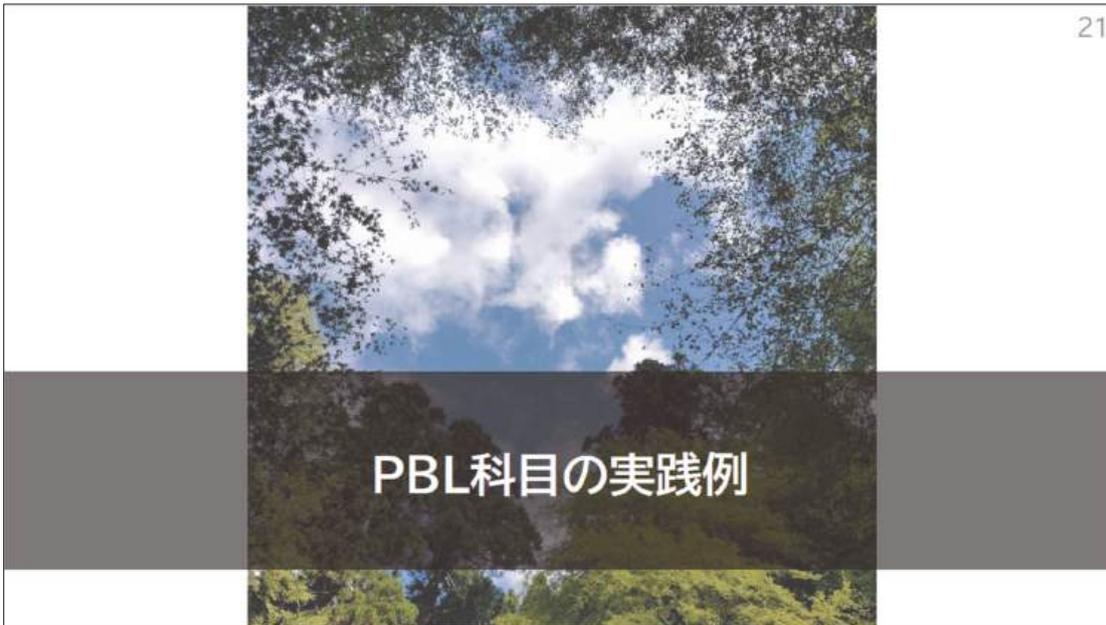
それから発生源も二つあります。一つはカナダのマクマスター大学で1960年代に医学教育から始まったPBLです。専門が特に医学の分野は非常に高度化・細分化していく。そのような学問分野では大量な知識を効率よく取り込んで、そして臨床で活かさなければならない。そのようなことから生まれたPBLというものもあれば、一方でデンマークのオルボー大学からで、これは工学教育からのPBLなのですが、そもそもイノベーションを起こそうと。資源もないデンマークという国では人が財産だから個々の可能性を最大限引き出す目的で独自に始まったPBL。これは1970年代に始まったPBLです。このように

二つの発生源が世界にはあります。こちらのデンマークのほうは、ユネスコでユネスコチャアとして認定されて、長い間、この30~40年間、世界のいろいろな国々の、最初は工学分野からでしたがほかの分野にもどんどん広がっていったという経緯があります。マクマスター大学のこのPBLですが、これも、この前、医学系の先生方に話したところ、もう違うんだと、今はチーム医療になっているから、かなり1960年代のこの考え方ではなくなっているということをおっしゃったので、その後の経緯については変わっていったことをお伝えしておきたいと思います。主にこのような二つの発生源があるということです。

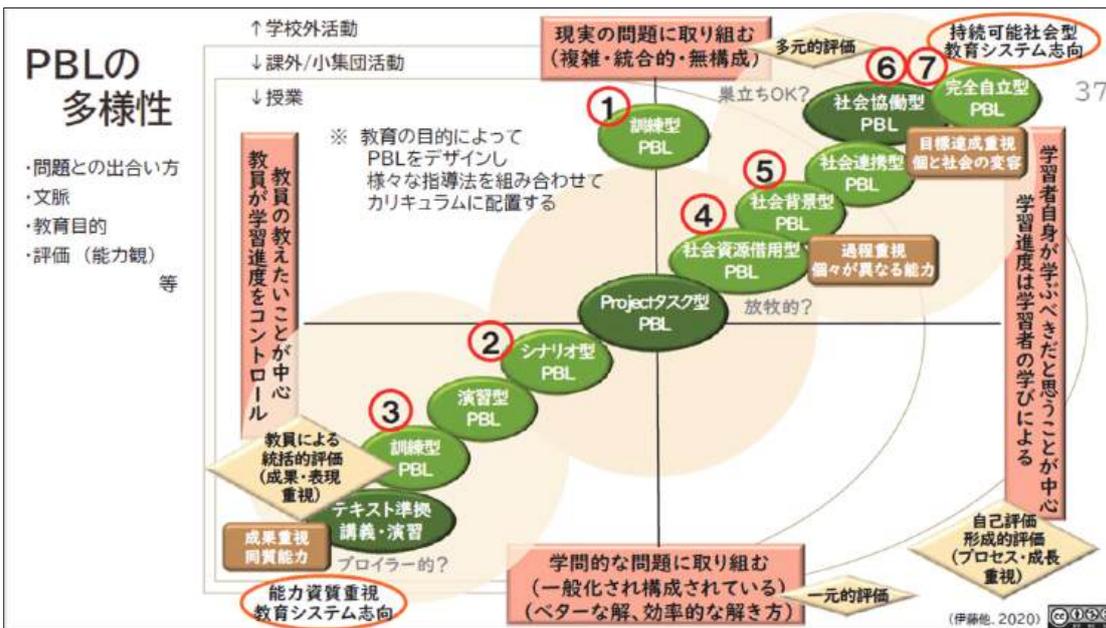
教授法	指導者	学習者	認識の焦点	問題	情報	20
講義	・専門家 ・学習者を評価	・受け手 ・個人的な経験外のことを学ぶ	・知識を受け取り複製し試験で応用する	・十分に構造化 ・記憶力をつける対象として与えられる	・全てを指導者が準備し構成し与えられる	知識伝達型の教えと学び方
直接指導	・指導者 ・学習者を評価する	・弟子として ・指導者の指示を待つ	・受け取った知識を再現し練習し、試験という場に応用する	・十分に構造化 ・記憶力や技能を身につける対象として与えられる	・ほとんど指導者が準備し構成し与えられる	ゼミ(師弟関係の学び)
ケーススタディ	・相談役 ・学習者を評価	・ゲスト ・個人的な経験外のことを学ぶ	・受け取った知識と自分の経験を応用する	・十分に構造化 ・応用力や分析力を育成する対象として与えられる	・ほとんど指導者が準備し構成し与えられる	事例をなぞる応用的学び
発見学習	・ミステリー作者 ・学習者を評価	・探偵	・発見した真実を応用	・十分に構造化 ・知識の構成のための情報として与えられる	・ほとんど指導者が準備し構成し与えられる	答えを導き出す応用的学び
課題中心学習	・情報源 ・学習者を評価	・課題解決者 ・個人的な経験外のことを学ぶ	・受け取った知識を統合し課題の枠内で問題解決に使う	・適度に構造化 ・効果的な学習のため与えられる	・ほとんど指導者が準備し構成し与えられる	卒業研究のような成果が求められる学び
シミュレーション学習	・舞台監督 ・報告を聞く	・役者	・モデル化した現実を学ぶ	・適度に構造化 ・自分自身の力や学ぶべきことを理解するために与えられる	・ほとんど指導者が準備し構成し与えられる	テキストに沿った実験実習
ロールプレイ	・旅行社理店 ・報告を聞く	・旅行者	・概念的・個人的・社会的レベルの学びの論理体系を創る	・焦点は絞られているがあまり構造化されていない ・社会システムとの相互作用を必要とする状況として提示される	・ほとんど指導者が準備し構成し与えられる	インターンシップ など
PBL	・コーチ ・コーディネーター ・スーパーバイザー ・利益関係者と学習者と共同に取り組む ・学びを評価	・当事者 ・調査し、他の利益関係者と全範囲一緒に問題を初期から解決(社会的役割と責任をもって取り組む)	・自身が決めた条件に適合する問題の解決に向けて知識を統合し構築する(多様な知識や情報を統合し、新たな価値に基づいた知識を構築する)	・構造化されていない ・問題が不確かな状況として提示 ・社会システムとの相互作用が必要な状況として提示される	・ほぼ全てが学生によって収集、分析、発信される	<p style="text-align: center;">↓ 統合して 実践する科目</p> <p style="text-align: center;">プロブレム学習 プロジェクト学習</p> <p style="text-align: right;">(伊藤他, 2020)</p>

これは今まで私が話をしたことをまとめてみたのですが、いろいろな教授法があります。どちらかというとPBLというのはそれと並行してあるというよりも、他の教授法で得たことを統合して実践する科目という位置付けであることが世界では多いということです。細かいことはここでは説明しませんので、後ほど資料を見ていただければと思います。

### 3. PBL 科目の実践例



それでは、後半は実践例を少しお話ししたいと思います。



PBLというのは非常に多様で、いろいろな形がとれます。だからこそ、わかりにくい、何ちゃってPBLになってしまっているということが多々あります。これは私が整理整頓したものです。横軸には教員が教えたことを中心に学習進度をコントロールするやり方から、学習者自身が学ぶべきだと思うことを中心に学習進度も学習者による場合。それから縦軸は、現実の問題に取り組むというものから学問的な問題に取り組むというものもあり、この中に大体のPBLが配置されるのではないかと考えています。これは、決して左下が低レベルで右上が高レベルという意味ではないです。あくまでも、その科目の目的に応じて、どれをどの学年のどの科目に配置するかというのを自由に組み合わせることが重要ということです。例えば、韓国などは、安全教育をPBLでやっているのですが、小学

校の低学年で社会協働型のPBLをやっています。具体的には、校庭にあるジャングルジムを題材に、どのような事故が起こりそうか、どのような事故が起こったらどうなるのか、ではジャングルジムはどうあるべきかということをしてジャングルジムを作っている企業と一緒に協働開発するというのもやっています。それは完全に社会協働型、この図の右上に位置するのです。そのように、本当にいろいろなPBLがあり得るということです。



これは一つ具体例なのですが、本学で、環境学部ということがありまして、そこでセメスタ、14回か15回の授業をしました。で自分たちは何をすべきかというフィールドワーク系のPBLです。都筑区役所の方にまずは説明をしていただきます。このとき、都筑区の課題を提示してもらおうという方法がよくあるのですが、それはやめて、先ほどご説明したように、「問い」というものを大事にしたいので、都筑区の未来計画を話してもらい課

題そのものには触れないでくださいと、学生に見つけさせてくださいということで始めるわけです。そして必要な講義を行ったり、区役所に訪問してヒヤリングをしたり、そしてそれを元に自分たちは何に取り組むのかという自分たちの問題を明確化して、その過程ではプレ調査をしたり議論をしたり、そして、これは様々な、さきほど、思考の枠組みといいましたけれども、いろいろな思考方法を教えながら、そこで自分たちの問題を絞り込んだ過程などを整理整頓して中間発表をします。そのときには外部の方も来ていただきました。都筑区の方など、このときは、例えば農業の問題をやりたいと学生たちがいったのでJAさんなどにも来ていただきました。そしてアクションプランを作って提案する。最終発表会にももちろん来ていただきました。そしてなんらかのアクションにつなげる。例えば、一つのチームは、そもそも農業問題において自分たちが取り組むべき問題は何かというと、若者が知らないことだ。自分が通う大学がある都筑区というところが大都市、横浜なので大都市にもかかわらず農業がすごく盛んだということを自分たちは知らなかった。ですから、自分たちが知ることが自分たちの問題だというふうに問題をしっかり定義しました。そこから、ではどういう解決策をするかというところで、最終的には横浜キャンパスの食堂に都筑野菜のサラダというものを一つ増やしてもらって、もちろん期間限定でしたけれども、1皿80円でしたでしょうか、それでのぼり旗などを立てて、みんなで知ろうというようなキャンペーンをしたり、またオープンキャンパスで自分たちがどのような取り組みをやったかということを発表したりというようなことに結びつきました。この食堂のメニューやオープンキャンパスで発表するなどというのは、私たちがルールを敷いたわけではなくて、授業外に、プラスアルファで学生たちが自主的にやったことです。

24

## The Effects of Interdisciplinary Team Teaching on PBL

Four teachers from different disciplines  
(physics, mechanical engineering, literary studies, and pedagogy)



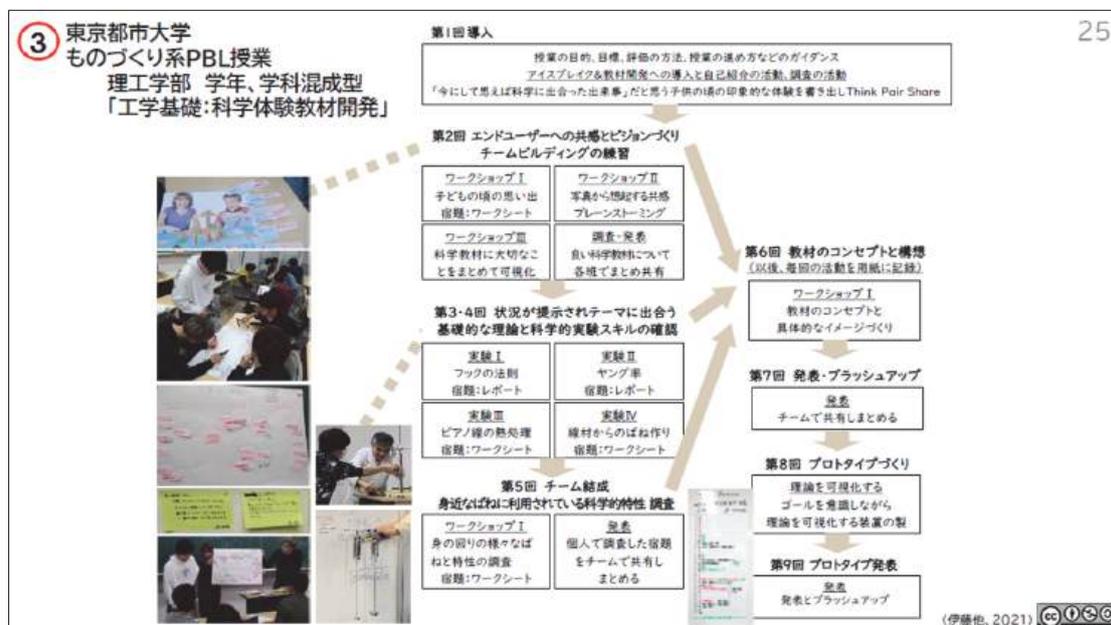
**PBL2021**  
INTERNATIONAL CONFERENCE  
TRANSFORMING THE WORLD  
THROUGH LEARNING MODELS  
BARCELONA, AUGUST 11-14, 2021

(1) From the perspective of educational effectiveness for students…  
 (2) From the perspective of faculty development…

(伊藤他, 2021) 

もう一つ面白い事例は、四つの学問分野が違う教員で一つのPBLをやるということです。工学と物理と外国語文学の先生と私で設計・実施しデンマークの学会で発表してきた

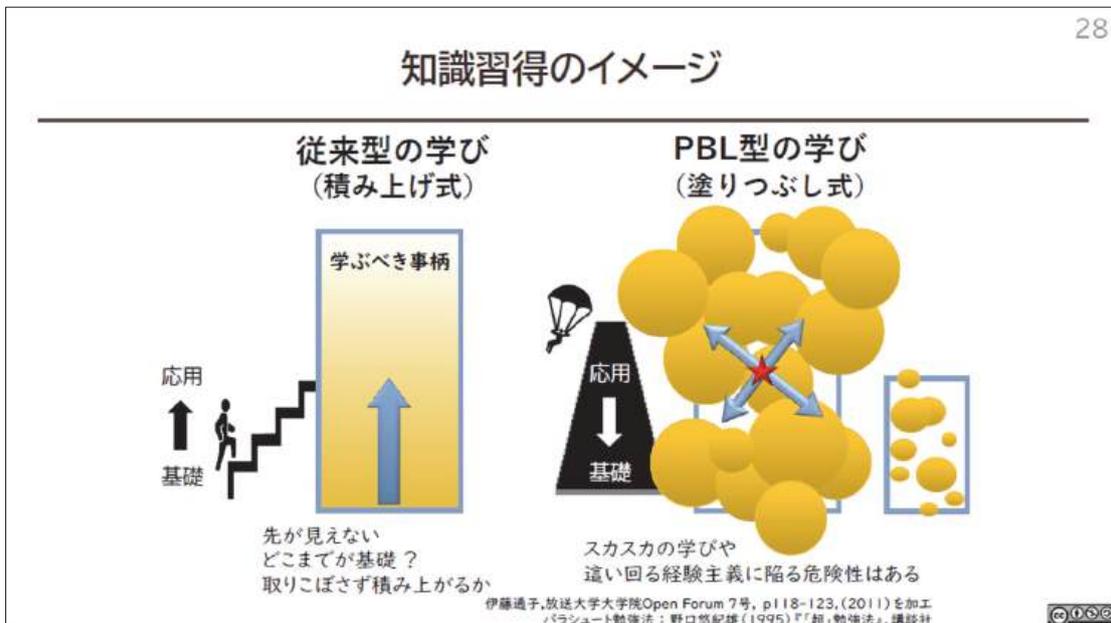
ものです。しかし、科目自体はものづくり系のPBLで工学の基礎専門に当たるものなのです。何をしたかという、近くの小学校の子どもたちに科学に目覚めるような面白い知育おもちゃを提供しようというのがテーマです。それもバネの仕組みを使ったおもちゃを作るというのが課題です。



それで学生は工学部なのですけれども、いろいろな学科、学年の学生がチームを組み組みました。バネの原理というのは中学校のときにフックの法則を習っていますね。ですから、どの学科でもできるはずなのだけれども、公式や法則はいえるのだけれども、それから科学の面白さを伝えるおもちゃを作るなどというのはすごく彼らにとっては高いハードルになってしまうのです。要するに、知っている知識がある目的のために活用できないのです。そのようなことをこの授業では目的にしました。最後には小学校に行って、意

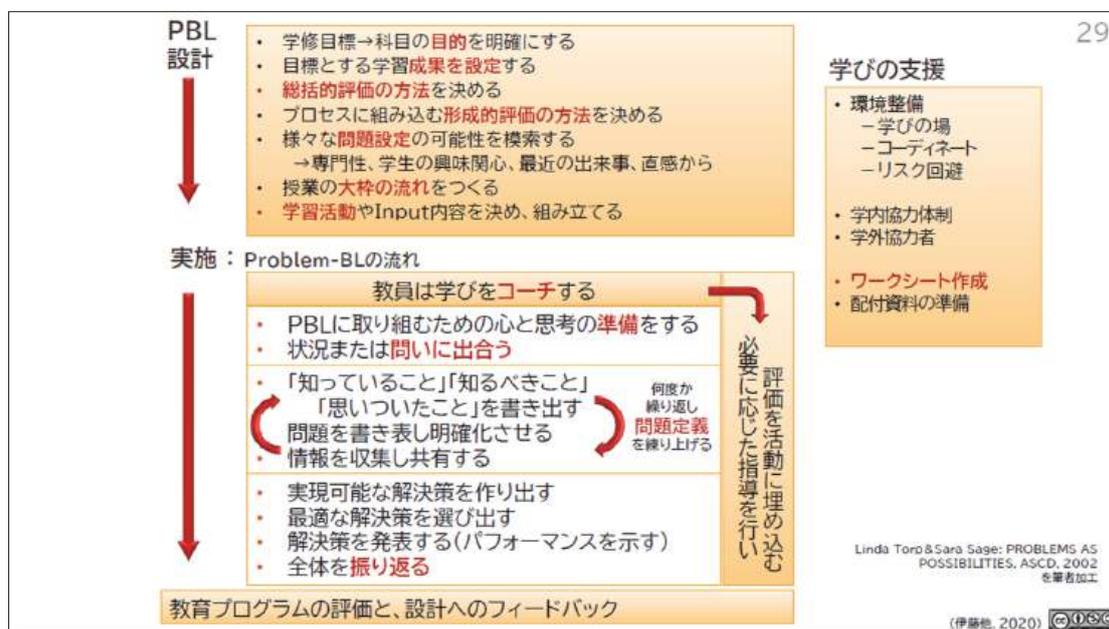
気揚々と、学生たちは本当に生き生きと、普通の講義で寝ているような学生でもこういうところに行くとすごく生き生きしますね、それでやってきたという授業です。

#### 4. PBL 授業の作り方



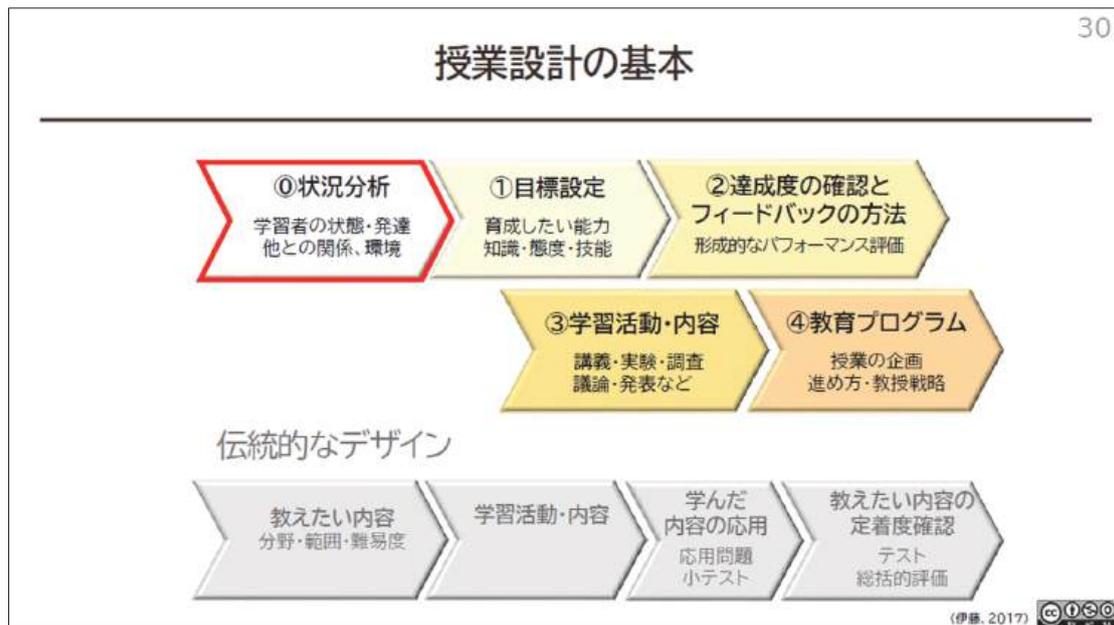
PBL授業の作り方、これについてはそれほど深くご説明するようなことでもないと思うのですが、一つだけとても大事なことは、従来の学び方というのは簡単なところから徐々に積み上げていくという学び方なのですが、PBLの場合は、私のイメージでは塗りつぶし型です。教えなければならないことというのは学校である限りは必ず決まっていますね。スライド●のこの青い四角の部分です。この教えなければならないことの中にその

学生、A君ならA君、B君ならB君がどこか興味あることは必ずあるわけなのです。それを探してそこから個々が学びを広げていく。そして、それに必要な知識をどんどん得ていくというのが塗りつぶし型の学び方で、それがPBLの特徴ではないかと思います。下手するとこのようにスカスカになってしまうということがあります。従来型の学び方にしても、私たちは積み上げていると信じてはいますが、本当に学生たちが積み上がっているかどうかというのはたまに疑問になりますね。ということで、良いところと悪いところがあるのですが、イメージがこのように違うということです。



これを詳しく説明すると、とても時間がない、これだけで3回ぐらいの講演になってしまうので、とりあえず書いておきました。ぜひ、皆さん、見ておいてください。

## 授業設計の基本



大事なのはこの設計の流れです。伝統的なデザインは、まずは教えなければならない内容が私たちにあって、例えば教科書などが決まっています、それを元に学習活動やテストをして定着させるというものです。PBLについてはといたしますか、最近のアクティブラーニングは全部そうなのですが、まずは学生の状態、発達度合い、ほかとの関係、環境をしっかりと分析します。ですから、極端に言えば、例えば、体育祭のあとの日の学生の状態と長い休みが終わったあとの学生の状態とは全然違うわけです。そんなときにどのような授業をするかというところは、体育祭のあとの授業で寝ていた学生を叩くのではなく、こちらが何か考えなければならないということです。そして、目標を設定します。どのような能力をこの授業ではつきたいのか。次にやることが達成度の確認とフィードバックの方法です。この能力はどのように最後に測るのかということです。そして、それに応じてどのような学習活動を入れて、それをどのような順序で組み立てて流れを作るかという、この流れがPBLの設計の基本になります。一つ一つ、①②③④とあるのですが、これについては詳しく資料を載せておきましたので、これも見ておいていただければと思います。

## ① 目的・目標をどこに置くか？



例えば①の目標設定ですが、記憶させたいのか創造させたいのかによって全然目標は違います。どれかとどれかを組み合わせてもいいのですが、このように、この矢印というのは思考の深さを示す矢印なのです。これは科目によって決まり、どれが良い悪いではないです。目的は科目ごと、教員ごとに必ず異なります。

## ② 到達度を測る

※ 複数の評価方法を選んで組み合わせる

◎適している ○適しているが工夫が必要

	知識・理解	思考・判断	技能	関心・意欲	態度
筆記試験	◎	○			
論述課題	○	◎			
論文課題 (レポート)	○	◎	○	○	◎
観察法	○	○	◎	◎	○
口述(面接)試験	◎	◎		◎	○
実技・実演		○	◎	○	○
ポートフォリオ			○	○	○
自己評価				◎	○

出典：中島英博、学習評価、玉川大学出版部  
(伊藤, 2024)

それから、その目的が異なるとしたら、到達度の測り方も異なるということです。知識や理解を測りたいのか、思考判断力を測りたいのか、技能を測りたいのかということについて適している方法は全部違うわけです。

先ほどのオルボー大学のPBLの例でいうと、卒研のような口述試験をやるわけです。口述試験とレポートをやっています。ですから、この表の中のいろいろな能力を測るのに適しています。そして、レポートを提出させるわけですからこの力も測ることができる。

態度や意欲も測定可能ということで、ほぼOKですね。技能は、観察法、実技・実演とありますから、これは授業での取り組み方を観察すれば先生たちはわかるということで。そのように何を到達度とするかによって測る媒体が違ってくるといことです。

※ 到達度の測り方は、習得目標によって大きく異なる

都市大力 と ディプロマポリシー	都市大で卒業までに身につける力	評価項目	評価	都市大力 と ディプロマポリシー	都市大で卒業までに身につける力	評価	都市大力 と ディプロマポリシー	都市大で卒業までに身につける力	評価
自立の力 主体的・自律的に学び、自己研鑽できる。	A. 主体的に学ぶ力	① 自らの学びの情熱を燃やしているか ② 学習活動と他者との関わりを積極的に進められているか ③ 進捗まで行っているか	自らの学びの情熱を燃やしているか ① 自らの学びの情熱を燃やしているか ② 学習活動と他者との関わりを積極的に進められているか ③ 進捗まで行っているか	「都市大」に属する力	D. 主体的に学ぶ力	① 主体的に学ぶ力 ② 主体的に学ぶ力 ③ 主体的に学ぶ力	「都市大」に属する力	D. 主体的に学ぶ力	① 主体的に学ぶ力 ② 主体的に学ぶ力 ③ 主体的に学ぶ力
	B. 自らを律する力	① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力	自らを律する力 ① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力	「都市大」に属する力	E. 自らを律する力	① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力	「都市大」に属する力	E. 自らを律する力	① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力
	C. 自らを律する力	① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力	自らを律する力 ① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力	「都市大」に属する力	F. 自らを律する力	① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力	「都市大」に属する力	F. 自らを律する力	① 自らを律する力 ② 自らを律する力 ③ 自らを律する力

これはうちの大学の例ですけれども、先ほどいった都市大です。DP、ディプロマ・ポリシーから起こした都市大力が、五つあります。例えば自立の力を測るためのこのやり方と、こちらのピンクの列と、問いの力というものを測る水色の列は全然違います。当たり前ですね。同じ方法では測れません。簡単にいうとそういうことです。

34

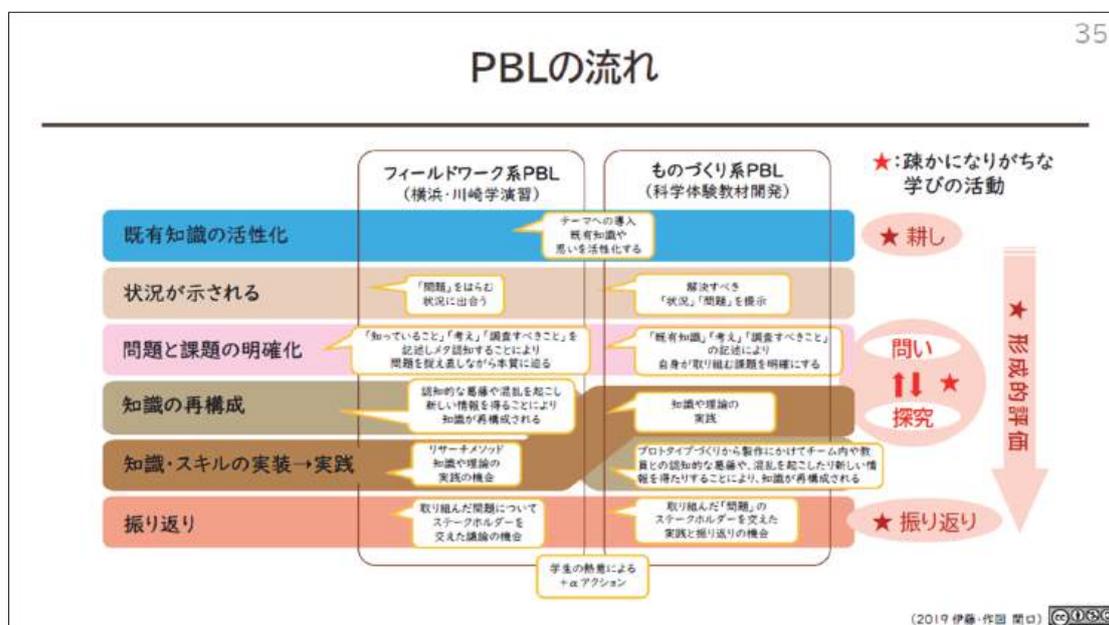
### ③ 適切な学習活動をPBLの流れに埋め込む

講義	直接指導	ロールプレイ	自己評価	ブレインストーミング	反転学習
課題解決型学習 (PBL)	ピアレビュー	ピアインストラクション	ケーススタディ	Think-Pair-Share	ジグソー法
				ポスターツアー	シミュレーション学習

(伊藤, 2024)

では、どのような活動を組み込むかという、やはり講義が必要だという場合は講義を

組み込むべきであるし、その中にいろいろなケーススタディ、ジグソー法などいろいろあるのですが、このような中から適した学習方法を組み込みながら学習活動の流れを作っていきます。



これが先ほどご紹介したフィールドワーク系とものづくり系なのですが、PBLの流れというのは、最初に活性化し、状況を示し、問題と課題を明確化する、そして知識の再考、ここを何度も繰り返して問いを定義し直すわけです。最初に与えた問いや最初に学生たちが見つけた問いというのは非常に粗いもので、調べたりしていくうちにどんどん本質に向かっていきます。これが非常に大事なプロセスなのです。そして実践して振り返る。この★をつけたところがなかなか忘れがちな学びの活動です。特に、この耕すというところがほとんどのPBLの場合はされていません。先生がどのような力をつけたいのかということに対して、学生が持っているものをしっかりと耕したうえでやらないと学びが深まりません。学生は自分ではなかなかこれができないので、ここをしっかりとやるということが日本のPBLに欠けているところではないでしょうか。このあたりは、デンマークなどは、悔しいのですが、小中高でしっかりとやっています。ですから、大学では高いレベルにポンと持っていても大丈夫ということになっています。

科目の目的によってPBLをデザインする			
内容	教科型 ↔	問題解決型	
課題	事例 ↔	プロジェクト	
学びの範囲	学術的な学び ↔	現実的な背景をもつ学び	
学びの駆動者	教員 ↔	学生	
形式	個別学習 ↔	ピア学習 ↔	協働学習
分野	科目別 ↔	科目横断型 ↔	科目超類型
修得目標	知識 ↔	スキル ↔	能力
教材	教科書 ↔	社会	
学びの重点	理論 ↔	実践	
アセスメントと評価	個人単位の評価 総括的評価	↔	チームの評価 形成的評価

(伊藤, 2024)

あとは科目の目的によってPBLをデザインする。例えば、今いったようなことですが、教材なども教科書を使うのか何らかの社会資源を使うのかによって幅がありますから、その中のどこなのかということです。理論なのか実践なのかですね。評価は個人単位なのか、チームで評価するのかなど、いろいろな幅があるわけで、この中からご自身の目的や科目の特性、または学生の発達度合いによって選んで設計していくという形です。

### クラス・デザインシート

(2) 科学活動教材開発 (工学系) クラスデザインシート

日	授業の概要	内容	学習の観点	教材・資料・準備物	評価・検出物
4/13	ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡
4/14	ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡
4/15	ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡	13:00 ばねの弾性力 心の豊穡

(伊藤他, 2019)

これがそのようなものを設計するときに作ったデザインシートです。これは、先ほどのバネの話で英語の先生が作ってくださったデザインシートの例です。

39

## コース・デザインシート

---

設計用シート

研修会の目的：受講生はどんな力をつけるのか、何ができるようになるのか	
開講の期間：	
受講生	人数：
	特徴：
	状況：
指導者	担当者数：
	大切にしたいこと：
目標	学んでほしいこと：
	それは、なぜか：
	他の研修とのつながり：
内容	テーマ：
活動	成果は？ 道具(教材・方法)は？ ルールは？ 共同体(チームづくり)をどうする？ 分業か協働か？
評価	合格の要件：
	習得能力の測定方法：

伊藤(2017)

それから、科目そのもののデザインシートもあります。先ほどの授業のデザインをする前にすべきですね。これは、どちらかというとシラバスによく似ています。私たちはシラバスにこのようなことを書いていますので、すでに先生方は科目のデザインはできているはずなので、授業のデザインが必要ではないでしょうか。

## 5. 展望 —これからの日本のPBLがめざすこと—



最後に、これは私の私見になりますがこれからの日本のPBLに目指してほしいことということをお話しさせていただきます。



ニーが必要なのだということを、これは私の場合はロジックツリーという方法を使うのですけれども、このような思考の方法をバックキャストで、未来から今を見たらうえてどういう行動を起こそうかという仕組みにしています。

**上手なグル~~X~~ープワーク** 42

**「対話」と「協働」でチーム内の貢献ポジションを獲得する**

**対話** とは、

お互いの立場や意見の違いを理解し  
そのずれをすりあわせることを目的に行う

対話は発散から「創造」へ向かう話し合いで  
共感をベースに相手を受容して新しい可能性を探究



**協働** とは、

**Co-llaboration・・・協働と創発**

問題に対し、それぞれの立場、視角から  
意見やアイデアを出し合う中で  
生成されたものを最終成果とする

**Co-operation・・・分業と連携**

問題を各部に切り分け、分担と分業によって  
為された個別の成果を合わせて、最終成果とする

★自らを高める学びのコミュニティデザイン力  
(取り巻く“活動システム:エンゲストーム活動理論”  
を変化させる能力)

次にグループワークです。日本の先生たちは上手なグループワークが大好きなのです。しかし、そうではないと私はいつもいっています。けんかしてもいいのだ。本当をいったら失敗させたいのです。失敗して修復するところまでさせると本当に理想的なのですけれども。上手なグループワークではなく対話と協働ということをしつかりとここで理解させようということです。そして、チーム内でどのようなチームを組もうが自分の貢献ポジション、自分はどのような力でチームに貢献していけるのかというメタ的な能力を持つということが本当の目的であって、先生が見える前でのチームでとても上手くやっているというのは全くもう目的ではないわけです。

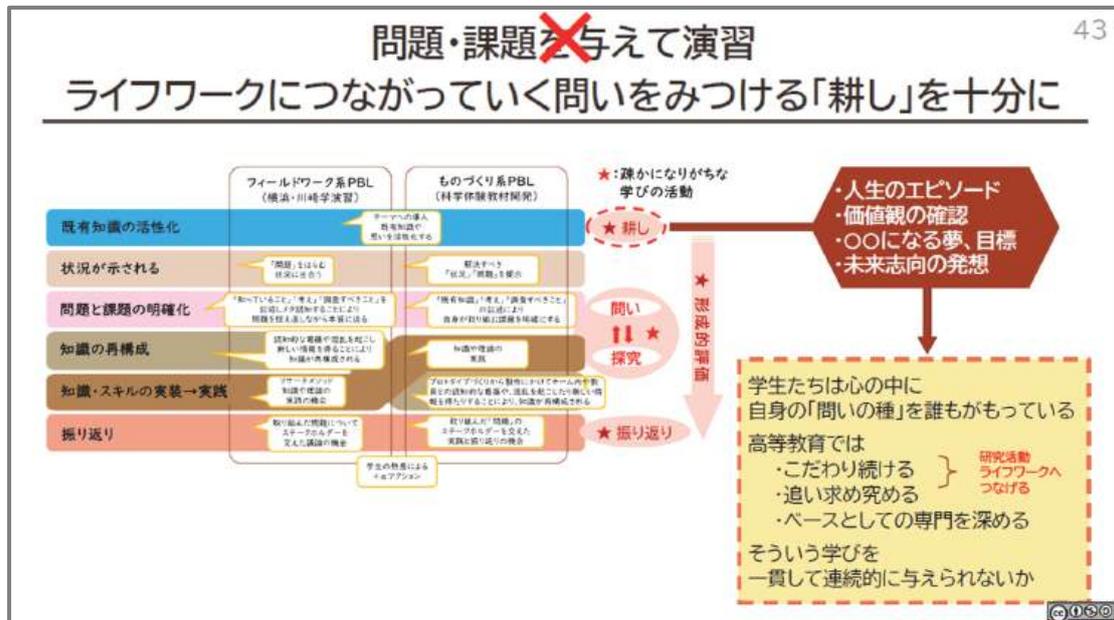
対話も学生はわかっていません。これも、実は学生に提示する資料から持ってきたのですけれども。会話と議論との区別がついていない学生が多いのです。僕はアルバイトでコミュニケーション力がとても上手いです。しかし、それは専門で使えないコミュニケーション力だからと私はいうのです。コミュニケーション力といっても、いろいろな場面で大事なコミュニケーション力があって、大学で教えるべきは、自分の専門の中でのほかの専門の人たちとのコミュニケーション力なので、そこはやはり対話ではないですかということで、このような図を示して説明します。

また、もう一つ議論との違いもあります。例えば、部活の中でどの人をキャプテンにしようかというときは議論ですね。一つの答えを出さなければならないので議論なのですけれども、議論というのは、どちらにするかという決断を迫られる時の話し合いに多いです。対話というのはそうではなくて、お互いの意見や立場をすり合わせながら創造的にや

っていくものだという事を学生には意識させるようにしています。ですから、部活でいえば、明日の練習メニューをどうするかというのは対話ですね。対話でないとおそらく成り立ちません。もし議論だとしたら、Aという方法とBという方法、どちらがいいか多数決で決めてしまおうというのが議論になってしまうわけです。対話することによって思っていたよりもっと良い練習メニューができてきたりするというのが、対話だということを学生には説明しています。

協働というのも、日本人はこれがすごく苦手なのです。教員の私たちも苦手です。分業は得意なのです。これはあなたの担当ねといって、あとでまとめるだけというのはすごく得意なのです。特に、私は工学ベースなので、実験などは分業でやることが多いです。しかし、協働というのは全く違います。分業してしまうのではなく、対話をしながら、そこで何かを生成するという作業が協働になってきます。そこをPBLでは強調したいということです。

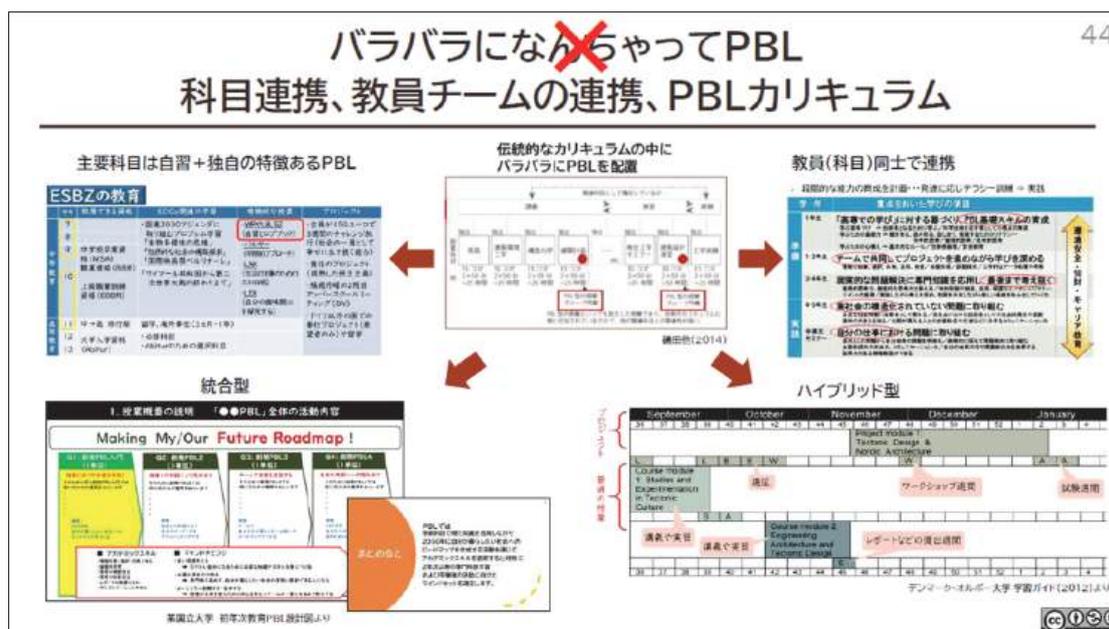
以前、中学校のPBLを拝見しに行ったりすると、みんなで議論をして何かが決まっていのですが、よく見ると結局、A君が最初から知っていることをA君が発表するだけになっていることがあります。あとでよく聞いてみたら、A君はすごく成績の良い子なのです。ですから、ほかの4人の子たちはもうA君に任せておけばいいということで全然参加していません。ただ賑やかにしているのだけれども、よく見るとこれは全然チームワークになっていませんねといって、中学校の先生に驚かれることもあるのです。そのような感じで対話と協働は非常に大切だということです。



それから、これも問題・課題を与えて演習する。このようなPBLも基本的なところではもちろん大事です。決してこれを否定するわけではないのですが、できれば大学生になったら自分のライフワークに繋がっていくような、一生持てるような問いを見つけてほし

と思うわけです。その問いを自己実現していくために、では、自分はこの会社に入ってみよう、このような研究をやってみよう、そのようなことが4年間で見つけれたら、その学生さんの人生はすごく良くなるのではないのでしょうか。

また、高大連携が今重要になってきていますけれども、この図のようなことで連携してはどうかと私は思っています。学習内容で連携するというのは多いのですが、そうではなくて、高校のときはしっかりと耕してもらう、この図のように、夢や理想とする世界観、自身が大切にする価値観などをきちんと。しかし、大学に行ったらそれをベースにした問いの種を見出してこだわり続けたり、追い求めたり極めたりする、それを実現するために例えば機械工学や人間科学など、それぞれの専門を深めていくという学びを一貫して連続的に与える。さらにいえば評価で繋ぐ。同じ評価。つまり、社会に出て役に立つものを最初から評価軸に置いておいて、例えばコミュニケーションでも中学校のときのコミュニケーションと高校のコミュニケーションと大学のコミュニケーションは全然違うと思うのです。それぞれのコミュニケーションでどのような力をつけているのかという評価軸を一緒にする。そのようなことによって連携できるのではないかと思っています。



あとは、バラバラのなんちゃってPBLはもうやめよう。これは先ほどいいましたね。例えば、ハイブリッド型もありますし統合型もあります。

また、これはドイツのある学校の例ですけれども、どちらでもないPBLカリキュラムもあります。ここでは主要科目は全部自習なのです。学生の能力、学び方の特性、学習のペースに合わせて学生が学びたい媒体で、学びたいときに学ぶ。ただし、この時間にこの先生のところに行けば何でも質問に答えてもらえるという自習時間があります。そして、一人で学びたい人は一人で学ぶけれども、チームで学んだほうが学びが深まるという人はチームで学ぶ。とにかく、その学習者の学習のパターンに合わせて主要科目、数学、英語、国語などを学ぶ。ところが、PBLは、その学校に独自のユニークなPBLを置いてあり、

学校の独自性を担保しつつ基礎学力を上げていくという戦略をとっているという学校の例です。

もう一つ、カリキュラムなど触る立場にないという人。これは私が若いときにやってきたことなのですが、仲のいい先生方と連携を組み、1年生の私の授業の中ではこれをやると、2年生の先生のところに行ったらこれをやると、3年生になったらこれをやって、4年生になったらこれをやると仲のいい先生で連携してしまうのです。学科全部を変えなくてもこれはできるわけです。このようなやり方を私は最初の頃やっていました。このようなやり方もおすすめだと思います。このときは、まだディプロマ・ポリシーという言葉や概念があまり一般的ではなかったので社会人基礎力を使いました。このような感じで社会人基礎力に賛同する先生方と連携したということです。

45

### SD PBLと各授業科目の達成目標の関係

- 最終的に、学位プログラムで示した学修成果を獲得することを目指して、学生が、4年間の学修成果を主体的・儉約的に累積できるカリキュラムと評価の仕組みを提供する。
- 学生の主体的な学修を支援するためには、各科目のカリキュラム配置の意図がわかり、各科目の学修成果を測定・フィードバックするための、基準が明確な評価を設計・実施する

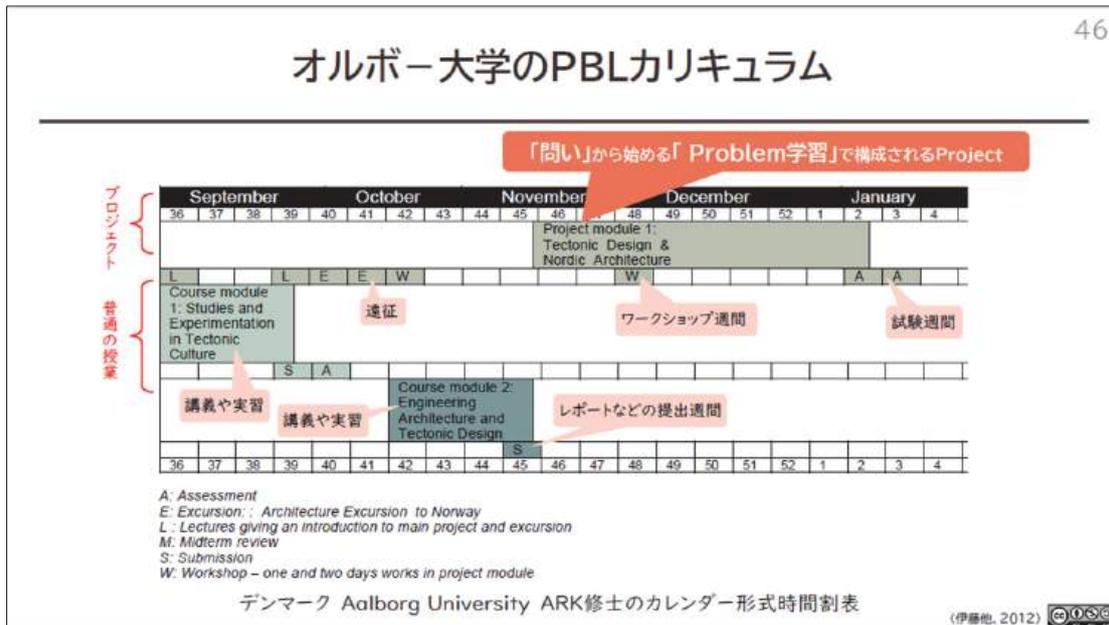
項目	1学年		2学年		3学年		4学年
	PBL(1) 学習目標	既存科目 学習目標	PBL(2) 学習目標	既存科目 学習目標	PBL(3) 学習目標	既存科目 学習目標	卒研 学習目標
学修目標1 (e.g.理論)	1~30		↑ 具体的で測定可能な目標明示が求められる				
学修目標2 (e.g.汎用能力)	1~10	11~20	21~30				
学修目標3 (e.g.高度研究スキル)						1~15	16~30
学修目標4 (e.g.チームワーク)	1~6		7~13		14~20	21~25	26~30
学修目標5 (e.g.質問力)	1~4	5~8	9~12	13~16	17~20	21~25	26~30
...							

※30が卒業認定レベルと見られる

参考: 深堀(2018)

PBLだけですべての力は絶対につきませんから、既存の科目との間でどの学習目標をどれくらいどこで得ていくのか。最終的に、卒業レベルですべてを学科や大学のDPに応じたものになっていくように設計するというのが大事なのではないかと思います。

## オルボー大学のPBLカリキュラム



最後になりますが、オルボー大学のPBLカリキュラムです。先ほどご説明しました、ここが普通のコースモジュールというものです。そして、こちらがプロジェクトモジュールというものです。お題は学期の初めに示されますので、学生たちは真剣に講義も実験・実習もやります。遠征も行います。そして、試験週間でしっかりとこのプロジェクトを評価されるという仕組みです。

## コースと、プロジェクトが連動するカリキュラム



左側是我们がよく見る学び方で、これを統合するところにこういうプロジェクトがあって、学生たちは全部自分たちで半年間のプロジェクトの計画を立てながら、そしてプロジェクトルームというものを与えられて、その24時間使えるプロジェクトルームの中で、最初はもちろん会話なのかもしれませんが対話をしていく訓練がなされるというカリキュラムです。私がショックだったのは、このような学び方を小学校からかの国はやっている

わけです。大学で5年間これを繰り返すのです。修士まで習得するために5年間となりますので、セメスタで1回PBLを体験するとして10回のPBLを、つまり卒研のような学びを繰り返すわけです。このようなことをされたら本当に力がつくだろうというのが私の正直な感想です。だからこそイノベーション立国になっていくのでしょうか。このあたりを見たときに、私は、厳しい言い方ではありますが、日本の若者を丸腰で国際社会に放り出していませんか、と言いたいです。社会人になって創造性を発揮せよとどれだけお尻を叩いても出るわけがないので、このような例を参考に、各大学の公教育の中でしっかりと彼らに力をつけていく教育の仕組みを構築することが大事なのではないかというのが私の提言です。以上です。ありがとうございました。

48



**ご清聴、ありがとうございました！**

人びとが恐れる指導者もあれば、  
人びとが憎む指導者もあり、  
人びとに愛される指導者もある。

しかし、だれにもまして最良の指導者とは、  
その仕事を終えたとき、  
人びとが、「これは私たち自身でやったのだ」  
と言えるような指導者である。

老子

49

## 文献

---

- ・ 伊藤通子・皆川勝・岩尾徹・京相雅樹・関口和真・門多頭司・濱田努・小池慶一・高橋博・島山祥吾 (2020).「PBL必修科目の全学部1～3年生への導入に伴うカリキュラムデザインと教育評価」第26回大学教育研究フォーラム, 京都大学.
- ・ 伊藤通子 (2024).『学部から大学院まで一貫性のあるイノベーション教育と総合知ー1年生から卒業研究までをつなぐ必修科目「SD PBL」ーSD PBLと総合知』, 内閣府 総合知ワークショップ講演資料
- ・ 伊藤通子・松下佳代・斎藤有吾・中島英博 (2022).「理工系総合大学での統合的科目「SD PBL」におけるPEPA」『大学教育学会誌』44(1).
- ・ 磯田節子・下田貞幸・内山忠 (2014).「学生の主体的な学びを育む Aalborg PBL model と建築教育ー本校への導入の可能性と課題ー」『熊本高等専門学校研究紀要第5号』
- ・ Anette Kolmos (2013)「Project Organised Problem Based Learning」, 第31回開発教育全国研究集会基調講演資料
- ・ 伊藤通子・本江哲行・丁子哲治 (2008)「高専教育へのPBL導入における可能性と課題」『論文集高専教育』, 31, pp283-288.
- ・ Xiangyun Du, Erik de Graaff & Anette Kolmos (2009). :Reserch on PBL Practice in Engineering Education <論文集>, Sense Publishers (Rotterdam).
- ・ Linda Torp&Sara Sage(2002)「PROBLEMS AS POSSIBILITIES」, ASCD
- ・ 伊藤通子 (2022).「高専の工学教育におけるPBL教育プログラムの有効性」, 放送大学博論
- ・ 伊藤通子 (2017-2024).各種講演資料

## -----質疑応答-----

**奥田** お聞きしてきてなるほどと思うところとそんなに上手くいくのだろうかと思うところが正直に申し上げてあります。私も手探りでアクティブラーニングや、学生さんに考えさせる課題を何とか見つけてプロブレム、解決までいっているかはわからないのですけれども、場合によってはこちらから課題を与えたり、あるいは考えてもらったりして何か取り組んでもらうということは何度かしている経験があるのです。そのときに、やはり先生もご講演の中でおっしゃっていた、解決まで導くからこそその基礎知識というものが本来必要で、オルボー大学の学生さんはそれがあるから授業も必死で聞いているとおっしゃっていたのですけれども。私が上手くできていないからだとは思いますが、それを実践しようとする、その基礎知識をきちんとやってきた学生さんとその部分はサボりながらやってきた学生さんとでもものすごく取り組み方に差が出てしまいます。そこが非常に、もちろん授業もやりにくいですし、学生さんにそういう差が出てしまったときにどのようにしていったらいいのかというのが、今、私が手探りでやっていく中での悩み事なのです。先生のほうでもし何か解決策やご助言等がありましたらお願いできればと思っています。

**伊藤** ありがとうございます。このご質問は、洋の東西を問わず先生方が悩まれる大きな質問のうちの一つです。

例えば、チームでやったときに、もうどうしてもフリーライダーが出てしまうというのが今の奥田先生のご質問と似た話だと思います。私が昔からよく言っているのは、そのようなときに先生方はフリーライダーを呼んでどうしてやる気がないのだ、どうして勉強しないのだというのだけれども、それはやめましょうということです。一人フリーライダーがいると、大体はほかの4人が文句をいいに来るのです。先生、どうかしてください、あいつとチームを組むのは嫌です、作業が遅くなるから嫌ですというのだけれども、あなたたち4人はこの一人に対してどういう働きかけをしたのかと尋ねると大体何もしていないのです。せいぜい無視することぐらいしかやっていないのです。無視したとしてもあなたたちの学びにとってどのような得になるの。このPBLだからこそ、やってくれない一人をどうにかしてやる気にさせる努力をあなたたちがしたとしたら、または理解が浅い人に教えてあげる努力をしたとしたら、もしそれが失敗したとしても、上手くいったとしても、その力は将来絶対役に立つ。世の中、誰と組むかなどと、とても自分と気の合う人と組ませてもらって、とても物わがりのいい上司が来てお金がふんだんにあるなどという仕事は一切ないです。そのような中で、それこそ自分たちでこれが問題だということを定義して、自分のチームがきちんと上手くやっていくことさえできない人が地域社会や何かほかの問題に取り組めるのですかという少し厳しめのことをいって学生たちに発破を掛けます。

それから、これはイギリスだったかデンマークだったかは忘れたのですけれども、数学

でやっている先生がいらっしやいました。数学などは、特にできる子とできない子の差が激しいので、できる子から非常に文句が出るそうです。数学なんていうのは一人で勉強させてくれ。このような勉強のさせ方はやめてほしい。どんどん進みたいのに全然できないではないかと文句が出るらしいのですけれども、その先生は君にこそPBLは必要だというらしいのです。一人だけわかっていることが役に立つことはない。自分の隣にいる人が自分と同じぐらいわかっているのに一緒に仕事などできないのだ。君につけなければならない力は、まわりのわからない人がどうやったらわかるようになるかを考えることだと先生は指導するとおっしゃっていました。そのとき、私は頭を殴られたような気がしたのです。そのようなできる子や進んでいる子につけなければならない力と、できない子につけなければならない力が違うのです。講義はみんな同じ力をつけてほしいと思うのですが、PBLのような授業だと違うということ意識します。ですから、TAさんにも私は必ずそれを説明してTAの声掛けもそのようにしてもらっています。大体、学生たちは、私にいう前に、「先輩、あいつ全然やんないんですけど」と必ず文句が行くのはTAのところなのです。TAさんには、そういうときにはこうやって励ましてあげてというところ「ああ、そうか」と。「俺も将来仕事に入ったらそうだな」といってTAもそれで学んでくれるというところもあります。知識の差があることがOK、経験の差があることがOK、考え方に差があることがOK、多様性があるチームがOKというふうに考えるということがPBLの基本になっています。先ほど申し上げた能力観の違いというのはそういう面からもいえるわけです。ただ、それを目的にしない授業でわざわざそのようなことをしなくていいのです。一人ひとりに力をつけたいのであれば、PBLではなくて、むしろ一人ひとりに従来の伝統的の教育をすればいいのです。私は、決してそれを否定してはおりません。チームでさせる場合のお悩みということに対してはそのように答えています。

**奥田** ありがとうございます。私も多様性を意識しているつもりでしたけれども、今の先生のご助言をお聞きしていると、もっと深く、それぞれの個人に合わせて目標なども考えて、絶対こういうふうに最後できあがるのがいいことだということを思い込み過ぎずに、学生さんお一人お一人に目標を作っても良いということなのかなと感じました。

**伊藤** そうですね。ですから、私のやるPBLは、最初に、シラバスの目標以外に個々にも目標を立てさせています。自分はこの授業の中でどこを伸ばしたいのかということ必ず立てさせて、終わったあとで振り返るということを必ずやっています。それが、一人ひとりが違っていいということになります。

**奥田** ありがとうございます。今、お手を挙げていただきました福島先生。お先に質問をしましてすみません。よろしくお願いいたします。

**福島** いいえ、大丈夫です。話を聞きながら質問が出てきたということもありますので、ありがとうございました。今日は、本当に貴重な話をありがとうございました。僕もグループワークなどはしているのですけれども、そのような進め方をきちんと理解して、学んでできてやってきているわけではなかったところもあるので、今のグループワークのできる学生とできない学生の差をどのように埋めるかというときのフィードバックの仕方も大変参考になりました。ありがとうございました。

今日、お話は、多分、これが、伊藤先生がお勤めの大学が都市大学ということもありますし、先生はこれまで工学系のところでやられてきたかと思うので、そのようなことで理系に寄っているということが多分あるのだろうと思うのです。本学も含めて、僕の専門がアメリカ文学なので文系の学生を対象にして教えているのですけれども、文系の学生を対象に教えているときに、PBLをやるときに難しさを感じるのは、例えば社会との繋がりがあったり、あるいは実際に何かを作っていく、あるいは社会に貢献できるというような、あるいは地域と協働して何かを作るといことはPBLが非常にやりやすいのではないかと素人ながら考えるのですけれども、いわゆるそのような、例えば文学を読むというようなものに関しては、先ほどの一人でやらせてくれというような学生も多くなります。実際に自分自身が突き詰めていきたい部分があたりするときに、ディスカッションが非常にやりにくくなるというところと、それから文学ですので、どちらかという内面的な部分であたり自分自身を掘り下げていくというところもあるので、そのようなところに触れてほしくないというようなことも起こり得るのです。実際にそういうこともありました。

今回の話と直接関係がないかもしれないのですけれども、文系の学生に対してこのようなPBLを導入していったり、あるいはこういったことをベースにしながらグループワークを考えていく際に、先生でしたらどういった点について注意をされたり、あるいはこういった点がポイントになるのではないかとということがありましたら教えていただければ大変ありがたく思います。よろしくをお願いします。

**伊藤** ありがとうございます。私がよく、例えば、本当に純粋な文系の学生さんがやる時はどうすればいいのかという問いにお答えとすれば、今持ち合わせている答えとしては、ほかの専門分野の人と一緒にやるということです。社会がそうですから。文学をやっている人も、文学をやっている人だけで社会を作っているわけではなく、いろいろな人たちとやっているわけなので、その社会の疑似体験のようなことを大学の中でやるというのは一つお勧めしています。先ほど紹介した違う専門分野の教員で一つの授業をやるというものも、学生にとってはすごく面白いようです。先ほども少しいいましたけれども、英文学の先生ですから。文学の先生なのです。アメリカ文学の先生なのです。そうすると、やはり表現する、言葉を豊かにするというにすごくこだわられるわけです。そうすると、私たち理系の者が見ていたレポートでは「これはだめよ」というのです、先生は。もっと豊

かな言葉、心の中から出てくる思いなどが全然表れていない。こんなものは、例えば社会に出たときに上司の心を打たないという言い方をします。それから、例えば地域住民の方と話をする、または美術館を作るスタッフの人たちと話をするといったときにこれでは無理でしょうという視点も得られるわけです。

ですから、作る、授業をデザインする側も、学生側も、できればインターディシプリナリーで、もう本当に学問分野をやったところに文学の学生の立ち位置と、それから工学の学生の立ち位置が全然違うのだ。しかし、こんなに協力したらいいものができるのだという体験ができると思うので、私は、もしPBLをやるとしたらそういうものをお勧めしたいと思います。

ただ、先生がおっしゃる目的がそこにはない、もっと文学的な何らかの、私は文学のことがわからないのですけれども、素養を極めたいということであれば決してPBLでなくてもいいのではないかと思います。PBLよりももっと適したアクティブラーニングがたくさんあります。例えば、しっかりと自分の中で内省を積み重ねるというアクティブラーニングもあるでしょう。その内省を深いものにするためにほかの人と話すということもありますね。ですから、話すことが目的ではなくて手段であるという学び方もあるわけです。ですから、決してPBLでチームを組んで一緒に何かをとというのがベストかどうかということから検討すべきではないかと思います。

**福島** ありがとうございます。今、インターディシプリナリーで他分野とやるというような発想はそこまでなかったもので、本当に参考になりました。ありがとうございました。

**伊藤** あともう一つ。特に、文章化するということの文化が違います。西洋と日本との違いなのですけれども、向こうはとにかく書かせます。プロブレム・ステートメントというものがある、どんどん書かせるわけです。そのときには、決して自分がいる学問分野の話だけではないわけです。そのようなことから、特に大学は文章化する、文字にする、表現をどうするという、そこをもっと豊かにすべきだと思うので、そこも文学の先生には力を発揮してほしいと思っています。

**福島** そうですね。より課題を精選して、さらに面白くやりたいと思います。ありがとうございます。

**奥田** 福島先生、ありがとうございました。それでは山本先生、お願いいたします。

**山本** 英文の山本です。伊藤先生のお話は、この間、PEP Conferenceでもお聞きして質問したいと思っていました。ものづくり系PBLの内容について具体的に2点おうかがいしたいのです。1点めは問いの立て方です。学生たちは問いを作るのがすごく苦手です。ゼ

ミ生に問いを立ててといっても結構抽象的なものを持ってきます。ゼミなので1対1で卒論のために話し合っただけでブラッシュアップしていくのですけれども、この場合だと、どこまで与えてこの範囲でやりなさいということを提示したりするのかというのは、どんな感じなのでしょうかとというのが1点です。

もう一つは、このPBLの授業では最後に子どもたちに向けて授業といいますか実践するところがあると思うのですけれども、これは先生方が先に小学校と話を付けて、学生たちに最後は小学校に行くということを伝えてやっているのか、それともPBLの授業をやっていく中でそのようなことをやりたいというのが出てきてそういうことになっているのかをお聞かせいただきたいです。

**伊藤** まずは問いの話なのですけれども、問いを学生たちの中から、それも授業の範囲で解けるような問いを持たせるというのは本当に難しいです。問いの導き出し方というのはいろいろな本がありますね。ビジネス書など、いろいろな本があるのを、私は、結構、参考になるところをつまみ食いしながらやっているのです。では、この授業ではどうやったかということは、最初にアイスブレイク、耕しの部分を結構十分にやりました。これは一緒にやった工学の先生がこんなに時間をかけるのかと驚かされたくらいです。

要するに、今から教材開発を行うのだから、そこに向けてどんな教材にしようかといきなりいうのではなく、今にして思えば科学に出会った出来事だと思う子どもの頃の印象的な体験をまずは思い起こさせるわけです。それをいろいろな人と対話しながら、科学について感動したのは小学校3年のあときだ、いろいろな個人的なエピソードを思い出させます。これが子どもの頃の思い出ということなのです。そのあとに今度は、では科学教材に大切なことを抜き出してみようとするのです。これもいきなりここに行くのではなく、写真を見せて、そこから共感を引き出すのです。ここに写真があります。このように、子どもたちが教材を見て感動している写真を、これはネットから引っ張ってきた写真ですが、これを見てどう思うということで、まずは感情を動かすのです。この子の表情はいいなど、いろいろな感情が学生たちに湧き上がってきます。ふせんにそれが書き出させチームでシェアします。そのように感情を動かしながら、チームの中で共有しながら、昔、自分が出会ったエピソードも思い出しつつ、では、それを教材にするときにはどのようなことを大事にしていくのだろうということをまとめて可視化します。この写真はその作業をやっている様子です。自分たちの教材だったらこんなことを大事にしたい、ああしたい、こうしたいという、ここで大まかな枠ができてくるわけです。その枠ができたところで、今度は少し調査させます。どんな教材があるかなど、いろいろな調査をさせて、そしてだんだんまん中の問いのところに近づけていきます。では、自分たちは、こういう問い、すなわち問題意識に基づいてやってみようかと合意するところに近づけていくような問いの立て方をこのときはさせました。

**山本** その第2回の90分でいいですか。

**伊藤** はい。

**山本** 90分の中で、ここに書いてある第2回のところが全部いける感じなのですね。

**伊藤** そうですね。はい。ワークシートは宿題になっていますし、やるのは2と3です。そして、これは調査・発表なので、これもおそらく宿題にしていたのではないのでしょうか。宿題と上手く組み合わせながら90分でこれだけやります。

それが終わったら、今度は先ほどの先生の質問にも関わりますけれども、実は今回はバネを使った教材を作ってほしいということを初めて3・4回でいうわけです。これは最初に使っていたのでしょうか。忘れました。そして、そのときにバネとは何かというところからフックの法則をやってみたり、ヤング率の実験もやってみてレポートを書かせました。これです、これは物理の先生の出番なのです。それから、ピアノ線の熱処理といって、バネを作るところ、要するに物理から工学の違いというのもやるのですけれども、そのときに熱処理をしてやるというのはこの工学の先生の出番なのです。そのようなことをしながら1回自分でバネを作ってみようとバネを思い出させます。

ですから、本当に彼らが、では自分たちの問題・課題をこれにしようというのは第6回、教材のコンセプトと構想、このあたりでようやくここまでやってきたことが固まってきて、では自分たちはこれを作ろうというような、自分たちの問題意識から導いた課題が固まってきます。そしてブラッシュアップして行って、プロトタイプを作ってみて、本当に理論を可視化できているかということを確認しながらという順序でやってくるので、問いといっても最初から「さあ、何を作る」ではなくて、これだけの耕しをしたうえで「はい、何を作る」というふうに持って行っているということです。

二つめの質問が最後のこれがどうだったかという話なのですけれども、これは、最初から先生方で決めていました。このときは15回だったのです。15回目は小学校でやりますということを学生にも行ってありました。教員の中に地域貢献として、小学校に評議員か何かで関わっている先生がいたのです。校長先生にお話をしたら、校長先生も地域の大学と協働で教育するというのを希望されていて、本学の科学体験教室のようなイベントにも理解がある先生たちもいらして、「いいですね、うちの小学校だけでやらせてもらえるんですか」というような感じで、安全等は小学校さんのほうにお任せし、父母の了解など、今はいろいろなことがあるので、そういうことは小学校さんにお任せし、こちらは学生の教育をきちんとしていくということをやりました。

**山本** わかりました。すごく準備の段階で丁寧にされているというのが鍵ではないかと思いました。ありがとうございます。これはずっと気になっていました。聞き逃していたと

ころもあるかもしれないのですが、ありがとうございました。

**伊藤** それから、このPBLの場合は、オープン課題やオープンクエスションから始めるのではなく、このような枠組みを、もう教材開発、小学校でやる教材開発という枠組みがあって、それもバネということが決まったうえで、では、自分たちはそのバネ、いろいろな特性があるので、その特性のどこに注目して、それがわかるどんなおもちゃを作って、そのおもちゃを使った子どもたちが使う前と使ったあとでどう変わるかまでを設計させてからおもちゃづくりをするというやり方をしたので、かなり限られた条件でやったPBLです。

最初に紹介した3年生でやっている本学のSD PBL (3) という授業は全くのオープン課題です。14回の中で、あなたたちのやりたいことをやりましょうという。機械工学の理系の学生と、都市生活などの社会科学系の学生と、人間科学の人文系の学生と、というようなもう全然違う分野の学生たちがチームを組んで、オープン課題であなたたちは何をやるかというのをしています。それは大学3年生なので結構自分の専門もできてきているということもあって、より社会に近いやり方でやっています。

**山本** わかりました。ありがとうございました。

**奥田** 山本先生、ありがとうございました。ほかにもご質問があるかと思うのですが、お時間もございますので、本日のご講演はこれにて終了したいと思います。

では、最後のご挨拶を小崎学長にお願いしたいと思います。小崎先生、どうぞよろしくお願いたします。

**小崎** ありがとうございました。目からうろこといいますか、本当に貴重なお話を聞くことが許され、この年度末の業務のお忙しいところではあったと思いますが、この会を準備いただきましてありがとうございます。

多分、先生方、103名ぐらいお聞きなのですけれども、いろいろなことを刺激を与えられ、採点の疲れが少し癒されたかと思います。ぜひ、新しい教育に挑戦いただければと思っています。特に、本学は6学部11学科あるので、この財産をもっと活かす知恵を先生方と作っていかれることが大事なのではないかとも思いましたし、学生一人ひとりの中にある可能性に対して本当に責務を負っていること、皆さん自覚はいただいているのですけれども、多分、ディプロマや講義のそれぞれの先生方の責任感が強すぎるあまり、自分たちの設計した授業の中だけで完結しようとするという姿勢が強くなってしまっている中であって、本日の伊藤通子先生の経験に満ちあふれた中での言葉は本当に多くの力を与えられたのではないかと思います。

ぜひ、大学教育自体が問い直しの時期になっておりますので、ある種、塗りつぶし型と

というような形や、あるいは様々な学部や学科を越えた混成の、そのような学生、あるいは教員も含めてそういう活動が活性化できたらということを祈って先生に感謝を込めて最後の挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。引き続き、またいろいろとご支援いただければと思います。ありがとうございました。

**奥田** 小崎学長、どうもありがとうございました。伊藤先生、本当に今日は貴重なお話をいただきましてありがとうございました。改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

◆2024年度 大学院FD講習会◆

日時：2024年7月17日（水）17：30～18：30

開催：Zoom ミーティングにてオンライン開催

司会：川田 隆雄 文学研究科情報文化専攻

1 講演 「大学院に来る意味を来る意味をどのように創造するか」  
文学研究科情報文化専攻 川田 隆雄 先生

2 質疑応答

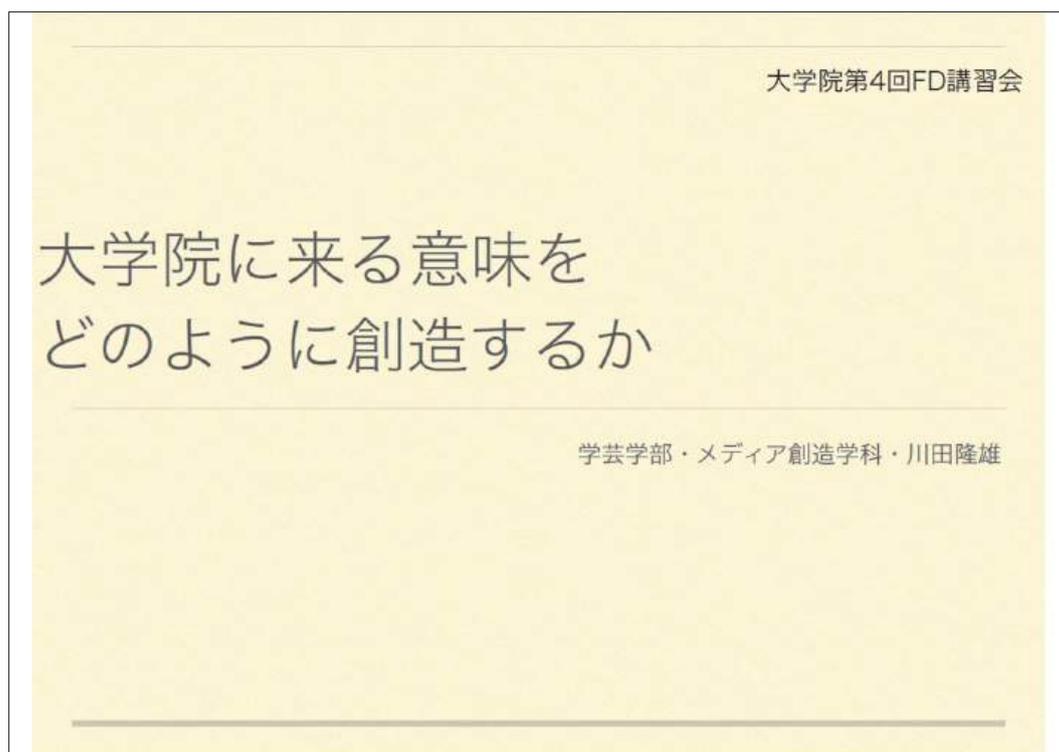
3 閉会挨拶 真部 真里子 教務部長

小崎 眞 学長

講演「大学院に来る意味を来る意味をどのように創造するか」

文学研究科情報文化専攻 川田 隆雄

● はじめに

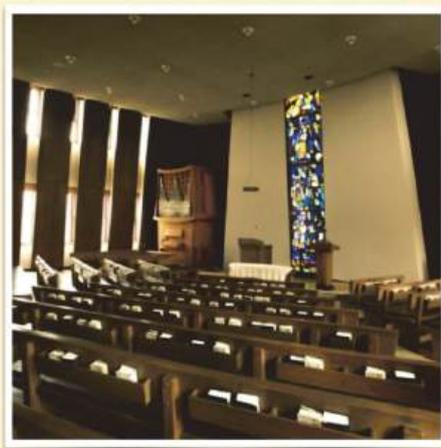


## 本日の内容

- 自分自身の大学院での経験
- 教員になってから大学院生とどう関わってきたか
- 大学院の意味・価値をどのように創造するか

### ● 自分自身の大学院での経験

## 同志社大学神学部入学



- 野本先生の「神学部に来るとこの世の何でもが分かるようになる」という言葉で神学部に入った
- そんなに勉強が出来るタイプではない
- 大学の授業が好きでいろいろな授業に出て一番前に座っていた→定額料金で面白い話を聞けるテーマパークと感じた！
- 当初から大学院には絶対行きたかった

## 4年生・卒論ゼミを選択



- 神学部では卒論を書くか否かは選択だった。→やる気のある学生が選んだ気がする
- 卒論テーマとして「フランスの5月革命」（学生運動）を選んだ→ジーン・シャープの弟子（2014年同女に招聘）
- 論文の指導体制はゆるやかだったが、自由に書かせてくれた。なんじゃかんじゃ先生達はコメントしてくれた

## 大学院に行く準備



- ドイツ語が出来ないので、神学部の院に残ることができなかった
- 当時大学院には第2外国語の試験がある場合が多く仕方が無いので、フランス語を勉強した→フランス語と相性がよかった
- 世界の文化について勉強したかったので、国際基督教大、大阪大学の大学院を受けた

## 大阪大学大学院言語文化研究科に行くことになった



- 家から車で5分の小学校のように近い大学院を選んだ
- 出来たてほやほやの大学院だった→先生も事務も多くが手探りの感じだった
- 学部を持たない大学院で、いろいろな専門家がいた→学部生がいないので先生達と密度のある関係ができた
- 文化、語学、言語学、生成文法、西洋の言葉、日本語（文学部の授業も取ることができた）

## 修士論文は「ベルギーの言語紛争」

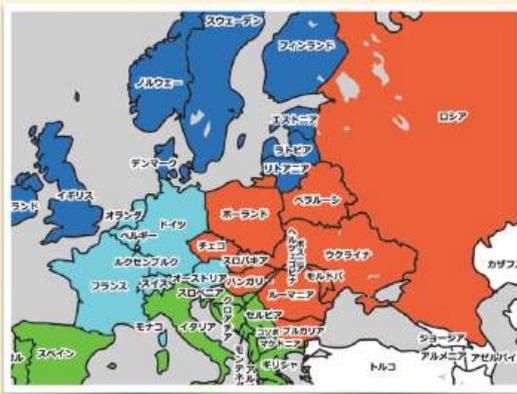


- オランダ語とフランス語圏の言語紛争を卒論のテーマとした→ヨーロッパの電車の中で人と話して決めた
- 現地ベルギーに行って情報収集をして書いた
- 紛争地ではみんなが熱くいると語ってくれて面白かった→マリーヌ・ルベンみたいな人が次々と現れた
- 「川田くんの文章は学問らしくない」、「参考文献の記載方法が伝統にのっとっていない」、「そもそも論文に方法論がない」散々言われた
- 批判は一杯うけたがなんとか合格した

## 修士課程で学んだこと

- 深く入り込んだ専門性の高い学問の世界はとても面白い
- 研究結果の表現方法は自分で見つけるべき→津田葵先生
- テーマが大事→新規性と時代性とセンス→平田先生
- 「が」だけして「苦悶」がのこる→奥田先生（研究科長）
- 発表すれば、いろいろとごちゃごちゃ言われる→気にしない方が良い
  - 研究という行為をするには時間と忍耐力がいる→「つっこまれる」

## 博士・後期課程が始まる



- 指導教授の平田先生についてフィールドワークに頻りにいった、ロシア、ポーランド、ウクライナ、ドイツ、オーストリア、フランス、パリ、ハンガリー、チェコ、オランダ、ラトビア、デンマーク→墓探し、アウシュビッツ、先生のウイーンの友人
- 圧倒的な知識を持つ指導教授からいろいろなことを学んだ→歴史、文化、ものの見方、学者がすべきこと、社会科学の姿勢、方法論→内弟子は悪くないかも

## なまけものでも少しずつ論文を書いた



- 修士を出て博士に入ってから論文を書くようになった。院でメンター制度があって指導してくれた。→同女にもあれば
- 阪大の外では初めて関西大学で論文を書いた。→担当の事務の人に少し意地悪をされたが、勉強になった
- 大学院の友人達と協力して書くようになった。みんな見よう見まねで書いていることが分かった
- ジャーナルに関係なくいろいろと研究に参加した→サツサ-先生
- 一生懸命書いた時は意外と評価してくれることも分かった

## 大学の先生になる



- 多くの先生方のおかげでいろいろな機会をもらった
- それぞれの機会が有機的に私のキャリアとして形成されていった
- 最終的に大谷女子短期大学（大阪）、大谷大学（京都）そして、同志社女子大学の専任教員に就職することになった

● 教員になってから大学院生とどう関わってきたか

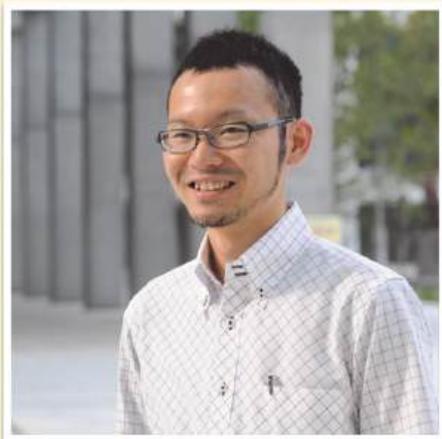
## 大学院が好きだったので学生に大学院に行くことを勧めた



2023 ラオス国立大学 名誉教授：ホーラヌパーブ先生

- 大谷大学時代の学生は関西大学の友人の研究室に所属して実質私が指導することとなった
- 同女に来てからも、同女の院以外に大阪大学、神戸大学、同志社大学、慶応大学、一橋大学等の大学院に合格した
- 現在、私の指導学生は8人にいる

## 大学院生の例 1 (S君)



- 大谷大で出会い関大で育ててもらった
- マルチメディア勃興期にいろいろな研究を共同でした。私の好きな民族舞踊のデジタル化、LMSシステムの研究
- 自発的に岐阜の情報科学芸術大学院大学に行き直した
- メディア創造学科立ち上げ期もアルバイトに来て手伝ってくれた。強力なアシスタントでもあった
- その後、関東の工学系の大学に就職し教授になった
- 私にも学びが大きかった→義理堅い、誠実

## 大学院生の例（Fさん）



- 川田ゼミ出身、同志社女子大学の学部生で、大学院は私の研究室、博士過程は同志社大学
- 学部・大学院在学中は様々なフィールドワークをした。修論テーマは「プロデューサーを生み出す組織」企業向けセミナーも多数共同で開講した
- 現在は同志社女子大学の嘱託講師と韓国芸能系学校法人の役員

## 大学院生の例（Iさん）



たまに開かれる院生リユニオン

- 川田ゼミ出身、慶応大学・関西大学大学院に合格したが同女院に進学
- プロデューサー型人材の教育に関する研究（構成主義のパラドックス）、フィールドワークなど他の院生とともにいった。私が大学でしていたのと同じ方法で授業をしていた
- 梅花中高の教員、その後京大のイノベーションセンターの職員

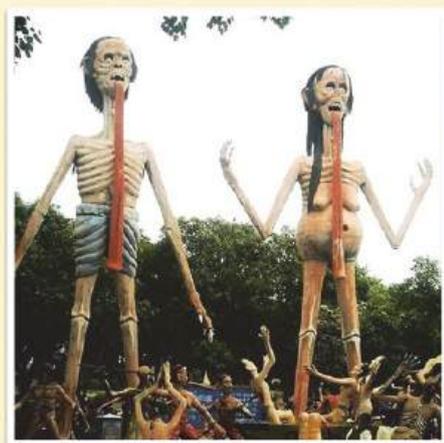
## 大学院生の例（Kさん）



たまに開かれる院生リユニオン

- 余田ゼミ出身、同女院では川田ゼミに進学
- Xジェンダーの研究、同志社大学で彼女のテーマを専門とする先生にも指導してもらった。学会発表を共同でした
- 修論は250ページを超える大論文で難儀した。修論の内容の一部のドラマ化の権利をもらった。先日もNHKのLGBTQ専門のプロデューサーと打合せをした。

## 現在の院生指導（Tさんの例）



タイのお化け:ピープレート

- 川田ゼミ出身、現在大学院ではホラー映画と東南アジアの亡霊・妖怪を研究、特にタイに注目
- テーンさん→ガラボン先生→ピア先生→片岡樹先生（文化人類学）→坂川直也先生（東南アジアの怪奇映画）→インドネシアで修行した魔術師
- いろいろな研究者から話を聞き、2年生になって研究のおもしろさに気付いてきたかも？

## 現在の院生指導（Cさんの例）



6月25日ライブルームプロジェクトNGE

- 川田ゼミ出身、K-popのファンダムの研究がテーマ。自分自身、プロダクションの起業を目指している
- 学部時代から様々なk-popライブに連れて行った。200を超えている。ローム館でk-popライブを全て任している
- 自律的になんでも出来るようになってきている。自分でプロダクションからの受注を受け始めた。リスクと冒険を天秤にかけるようになってきている

## 大学院生に言うこと

- 大学院でこの世の謎を探索するのは面白い→野本先生
- 自分のやりたいテーマを自分で見つける
- 現場にいて情報を収集する
- 損得では考えない方が良く→スティーブジョブズ
- 表現方法は自分で考える→津田葵先生
- 「新規性は必要」と言う

## 院生に言っていないこと

- 手続き論は大事
- 着手容易性、完成容易性は最後まで言わない
- 研究は努力が必要
- 格違いに気を付ける
- 礼儀正しく、奉仕する
- 多くの先生のおかげでここまで来れたこと

### ● 大学院の意味・価値をどのように創造するか

## 大学院は変化する社会に適応する必要がある

- 過去の大学では言葉の意味を説明したが、今の学生の心にささらなくなった。学問がもっている歴史的な伝統にあまり興味がない。そして、言葉や手続き論は分野が違えば説明が通じない
- むしろ、普遍的な意味や原理の解釈の説明に意味がある
- 院は形がない物を作る場であることを意識する
- 競争相手は世界に設定する

## 大学院に来る意味の創出、少し ニューワンスを変えては？



- 大学院は楽しい場であることは必須！それを学部生に言う必要がある。→アメリカのように軽やかな場所
- 大学院で学ぶ内容は学部とは違い、テーマ、コンテンツ、方法論いずれも新しい！
- 2年、5年余分の学びが発生しても、就職のステップとして役立つ

## 最後に私自身も大学院に戻りたい



- タイ語でもう一度大学院に行きたい
- しかも、もう一度出身大学院の大阪大学言語文化研究科の修士課程に戻りたいと思っている
- テーマは「末子音」と決めている。สวัสดีครับ、ภูมิใจ

人生は短し、この世は謎で一杯！  
大学院は究極のテーマパーク??



※誠に申し訳ございません。

教務課での機材トラブルにより、音声データが残らず、資料のみの掲載となりました。

## ◆学部 FD◆

### 学芸学部 FD 報告

学芸学部長 椎名 亮輔

学芸学部では、2024 年度も前年度に引き続き、「10min.FD/Labo.」と題して、各月に担当を決めてそのタイトルに相応しい動画を製作・提出してもらい、その配信を各教員が視聴し、感想・質問を書くという形で FD 活動を行った。2024 年度の担当は以下のとおりであった。

- 5 月 音楽学科 山本裕樹教授 (FD)
- 6 月 メディア創造学科 影山貴彦教授 (FD)
- 7 月 国際教養学科 潟山健一教授 (FD)
- 10 月 メディア創造学科 村木美紀准教授 (FD)
- 11 月 国際教養学科 Maria L. Correa 准教授 (Labo.)
- 2025 年 1 月 国際教養学科 沖キャサリン准教授 (Labo.)

昨年同様、「10min.FD」が FD 活動についての発表になっているが、「10min.Labo.」であっても、担当者それぞれの教育・研究の内容が、他教員にとっての新たな教育・研究への気づきにつながる可能性があり、その意味で FD 活動であるという点についても従前の通りである。

それぞれの内容について述べると、5 月の山本教授は、「音楽を放つ！ アコースティック・パフォーマンスのために」と題して、自らの担当であるヴァイオリン専門実技において、学生たちにいかに楽器の音を響かせる技術を習得させるかについて発表した。6 月の影山教授は、「アナログの大切さ」と題して、メディア創造学科のゼミ選考過程において、手書きのエッセーを書かせたり、学生たちが研究上必要な人物たちとアポをとるときに手書きの手紙を送るように指導し、人と人とのコミュニケーションにおけるアナログ的手段が重要であることを説いた。7 月の潟山教授は、「大学における講義科目」と題して、自らが担当する講義科目においていかに学生たちのモチベーションを維持していくのかについて、1 年次生から 3 年次生の科目について、それぞれの授業運営上の工夫点について「期末試験を行わない、反転授業、応用力」という特徴について述べた。10 月の村木准教授は、「本学司書課程の特徴と取り組み」と題して、自らが担当する司書課程の特徴として「メディア創造学科に所属すること」、「1 年次生から履修可能であること」、「卒業単位に含まれること」、「費用がかからないこと」を挙げ、さらに実務家教員の多さや、履修の特性、卒業後の進路についても述べた。11 月の Correa 准教授と 1 月の沖准教授は「Labo.」の枠組みとして、それぞれの研究活動内容について発表した。Correa 准教授は「共同研究プロジェクト」としての「言語をテーマとする女性研究」で、自らは近現代日本文学研究、

メディア創造学科の高木教授のティポグラフィー、国際教養学科の Fassbender ファスベンダー助教の社会学という三つの異なった視点からのアプローチについて語った。沖准教授は、京田辺市三山木幼稚園での園児に対する英語教育プロジェクトについて、特にその課題の「どのように教育学専門でない大学生が園児たちに対して英語教育支援を行うことが可能か」について発表した。そして、2025年2月には音楽学科の松下悦子教授が発表を行う予定であり、3月には学部教員会議の折に対面のFDとして、国際教養学科からの発表が行われる予定である。

以上のように、今年度も非常に多種多様な発表が行われ、また毎回、視聴者によるコメントがフィードバックされているので、これからの学芸学部FDへの大きな刺激になることは間違いない。

## ◆学部 FD◆

現代社会学部 FD 報告：〈学部の多様性を力に変える〉～現代社会学部の FD 活動

現代社会学部長 日下 菜穂子

現代社会学部では、「チョコっと FD」という名称で、学部教員会議の開始直前の FD 研修が 2017 年度から行われている。開始から 7 年以上を経た 2024 年度には、約 10 分間の研修を 5 回にわたり実施した。毎回の研修は学部教員 1 名ずつが、授業についての報告を約 10 分間で行う。この活動のコンセプトは、互いの授業の特徴を知り、自分の授業に活かせるものを取り入れるとともに、授業間の相互関連性を見出していこうというものである。開始当初は対面で行っていたが、現在は Microsoft Teams の「共有」画面を通して発表が行われ、聞き手の教員が発表者に対してチャットで数行のコメントを送る形式となっている。発表者にはささやかなご褒美として、会議後にメールボックスに応援メッセージ付きのチョコが届く仕組みである。会議前の「ちょっと」した短い時間に行い、応援の「チョコレート」を味わうことから、「チョコっと FD」という名称がつけられた。

2024 年度には、社会システム学科と現代こども学科の教員 3 人から、「これまでの研究及び教育について」や、参加型学習の工夫として「Reflection（省察）の質を高めることへの挑戦」がテーマとして取り上げられ、講義科目だけでなく演習系の授業の諸課題や新しい対応策についての報告があった。これらの報告から、演習系の授業では次のような指導が重要であることが認識できた。(1) 子どもから高齢者、障がい者を含む多様な人と、その人々を取り巻く人たちが協同して学び合う仕組みが必要であること。(2) 講義や演習を通じた学びを実際の社会課題解決につなげるうえで、プログラムを適切に評価し継続的な活動へと展開する方法を検討する必要があること。(3) 演習系の授業や大人数の講義科目において、履修者の個別のゴール設定と成果をフィードバックする仕組みの整備が大切になること。

また 2024 年度には、新たに現代社会学部に着任された新任教員による FD 研修を行い、授業運営の工夫や重視していることについて、2 人の新人教員に話していただいた。その中では、学生の意欲を高める上での体験学習の有効性や、研究フィールドを学生の実践の場とする上での産学官連携の重要性などの指摘がなされた。

現代社会学部の特徴のひとつとして、多領域の専門性を有する教員から構成され、多分野にわたる学びが展開されていることがあげられる。研修で取り上げられた授業科目(開講学科名 GS は社会システム学科、GK は現代こども学科)についても、2024 年度は GK「音楽科指導法」、GS「専門基礎演習」、GK「応用演習 I」、GS「政治学概論」、GK「教育方法と技術」などの科目であり、それらの教育の基盤となる研究の領域は、ジェンダー社会学、特別支援教育・保育、外国語教育学、観光社会学など広範にわたる。上記の FD 活動を通して科目間の課題の共通性が示された。多様な興味関心を持つ学部学生の教育の方向性を

見つけていくためにも、現代社会学部では「チョコっと FD」を今後も継続し、学部の多様性を力に変えてさらなる教育の充実に役立てたいと考えている。

## ◆学部 FD◆

薬学部 FD 報告：薬学教育における医療プロフェッショナリズムを考える

薬学部長 芝田 信人

「アカデミックスキル演習」を導入して

令和4年度改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラム（以下、令和4年度コアカリ）が実施され、2024年度入学生から、このカリキュラムの適用となった、令和4年度コアカリのコンセプトは、薬剤師として求められる基本的な資質・能力を生涯にわたって研鑽し獲得することにある。すなわち、薬剤師としての専門性を生涯にわたって発揮できるよう、常に新しい科学技術を学修し、患者や生活者を援助する姿勢が薬学部教育において培われなくてはならないということである。

一方で、大学受験人口の減少に伴い、年々学力（あるいは処世術のスキル）が低下してきていると言われる現状の中で、学び続ける姿勢はいかにして培われるかということがとても大事であることが考えられた。そこで、薬学部ではカリキュラム改正を契機に、「アカデミックスキル演習」を1年次の講義科目として導入し、大学生として6年間を過ごすための総合的な羅針盤とした。

講義の内容は、表のとおりである。情報社会の中で、SNS に対する考え方や個人情報を尊重した正しい発信を行うための「情報リテラシー」、相互理解を行いながら円滑なコミュニケーションを築くための「アサーティブコミュニケーション」、学習や対人関係でストレスを回避するための「ヘルスリテラシー」、大学生としてあるいは社会人としてメールや文章を書くための「ライティングスキル」、薬学部での学習では基礎となる、生物系、化学系および物理系科目の主体的な学習方法について講義した。さらに、これらの要素を統合的にコントロールするための「薬学の学びとメタ認知力」について解説し、メタ認知力の向上は、大学あるいは社会生活におけるストレスの回避や円滑なコミュニケーション、および学修能力の向上につながることを力説し、メタ認知力を高めるためにはどうすればよいかについても学生達に考えていただいた。

講義終了後に講義全体の内容についてアンケート（感想）を取った結果、図のワードクラウドに示したように、最も学生の記憶にとどまったのは「メタ認知力」であった。学生の感想には、「メタ認知力が学習や対人関係、ストレスの回避に役立つとは知らなかった」、「自分のメタ認知力を知れてよかった」、「メタ認知力を高めるよう大学生活を送りたい」、「メタ認知力のこともっと早く教えてほしかった」などという前向きな感想が多くみられた。今年度からの「アカデミックスキル演習」の導入は、薬学部の教員にとっては試行錯誤であったが、アンケート結果に認められるように、学生の前向きな気持ちやモチベーションを支える科目として役割を果たしたのではないかと考えている。



第 11 回目	化学系科目の学び方 (2)	① 目標の設定と明確な計画 ② 自己評価とフィードバック ③ 主体的な学習
第 12 回目	物理系科目の学び方 (1)	① 目標の設定と明確な計画 ② 自己評価とフィードバック ③ 主体的な学習
第 13 回目	物理系科目の学び方 (2)	① 目標の設定と明確な計画 ② 自己評価とフィードバック ③ 主体的な学習
第 14 回目	物理系科目の学び方 (3)	① 目標の設定と明確な計画 ② 自己評価とフィードバック ③ 主体的な学習
第 15 回目	まとめ	確認テスト

## ◆学部 FD◆

## 看護学部FD報告

看護学部 高城 智圭

2021年度より学生が合理的配慮を表明する場合、同志社女子大学スチューデントサポートセンター（以下、SSC）の支援を受けて、要配慮文書が科目担当教員に配布され、各担当教員が合理的配慮を行いながら授業を進めてきた。2022年度からは、実習科目についてもSSCと看護学部で情報を共有し、実習指導に活かしてきた経緯がある。この経緯を踏まえ、2023年度のFD研修では、これまでの対応実績、意見交換を通して、日頃の学生対応について教員間で情報共有を行った。その中で、発達障がい等を有し合理的配慮を要する学生の臨地実習での指導に、多くの教員が困難感や戸惑いを有していることが明らかとなった。そこで、今年度は「発達障がいを有する学生への臨地実習における支援のあり方」をテーマに、発達障がいを有し合理的配慮を要する学生の臨地実習指導に焦点を当て、対応の実際を理解し、今後の学生指導に活用することをねらいとしたFD研修を実施した。

対象教員33名、PSCインストラクター4名、SSCコーディネーター1名の計38名を対象とし、オンライン開催と1週間のオンデマンド配信を併用した。

当日のオンラインは27名参加、オンデマンドは10名の参加（参加率97.4%）があり、受講後のアンケートの回答は32名（回収率86.5%）であった。テーマ設定は「良かった」「まあ良かった」が31名（96.9%）であり、ニーズに応じたテーマであったことが推測された。また、オンラインでの開催方法については27名（84.4%）が「良かった」と回答しており、参加しやすい方法であったことが伺えた。自由記載では、「単位が取れるように配慮することは、教員が大変な思いをするだけでなく、結果的に学生に不利になるという理解をした」「合理的配慮をどこまですべきか、いつも悩んでいるが、今回の講義を受けて、『本人の困り感』が一つのキーワードになると思った。困り感を自覚していない学生には、失敗することも、人生を考えると間違いでないのご指摘はとても勇気をもらえた」「どんな対応をするにしても、学生の人権を擁護することを忘れずにいなければと思った」「実際に発達障がいの疑いがある学生を担当したが、学生本人に対する理解が不十分な点があったのではないかと振り返る機会となった」「障がいを治すのではなく適応方法を一緒に考えたいと思った」「具体的な事例からも学ぶことができ本人が困難を訴えられるように支援したいと思った」等の意見があった。また、「配慮は必要だが、本人が特性を理解し、周りに配慮を求められるようになるためにどうするか、という落としどころが難しいと思った」「今回のテーマで、質疑応答の時間を多くするなど、もう少し具体的な関わり方を共有できればと思った」等、本テーマでの継続した研修を求める声もあった。

今回は講義だけでなく、実際の具体的な困難な状況とその対応についてもご助言いただき、教員間で考える機会となった。合理的配慮を要する学生は増加傾向にあるだけでなく、その臨地実習指導は複雑化の傾向にあり、教員により一層の困難感、疲弊を生じさせてい

る。次年度以降も引き続き、臨地実習指導における発達障がい等の合理的配慮を要する学生への支援について検討、共有する機会をもつことが課題である。

## ◆学部 FD◆

## 表象文化学部 FD 報告

表象文化学部長 鈴木 健司

表象文化学部では、英語英文学科と日本語日本文学科のそれぞれがより魅力的な教育内容を実現すべく、自学科の教育のあり方を点検して各教員が授業の改善につなげるための取り組みを継続的に行っている。

英語英文学科では、ディプロマ・ポリシーの達成度に関するアンケート調査を、学科の全学生を対象として 2023 年度より実施している。これを受けて本年度も、春学期末（7 月 12 日～31 日）および秋学期末（1 月 9 日～24 日）の授業内（各学年のアドバイザークラスなど）で同調査を実施した。

調査は「英語英文学科の学び」と題して、全 28 問からなる。まず、20 項目からなる英語英文学科の DP のそれぞれについて学生自身の達成度を「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「全然そう思わない」の 6 段階で回答するとともに、Part A【知識・理解】、Part B【関心・意欲・態度】、Part C【表現・技能・能力】のそれぞれを総括して 10 から 1 の 10 段階で回答することを求める設問から構成されている。さらに、Part D【まとめ】として、「これまでの英語英文学科での学び全体」および「入学当初に達成しようと思っていた初志」の達成度を 10 から 1 の 10 段階で回答することを求める設問を置き、最後に自由記述として、当該学期で特にできるようになったこと、学科または教員に対する要望、学科として取り組むことのできる新しいことの提案について記述を求めている。

分析は学科内の「将来構想ワーキンググループ」（座長：若本夏美教授）が担当し、数値は学年別に集計された。結果（数値および自由記述）は、学科教職員で共有するとともに、学生にも授業内で結果（数値）を示すことにより、あらためて DP を周知するとともに目標達成の重要性を促した。

英語英文学科は 2024 年度より新カリキュラムを開始し、それに伴って DP も変更されているが、今年度の調査においては、前年度との比較をしたいという意図から、旧 DP を使用して実施した。この点について、新カリキュラムが年次進行する次年度以降にどのようにするかは、検討の必要がある。

日本語日本文学科では、今年度は文学作品の取り扱いをテーマに、本学を卒業した現職教員を交え、2024 年 6 月 29 日、「定番教材のポテンシャル～『山月記』が悲しいのはなぜか～」というタイトルで、高橋幸平准教授による講演をもとに FD 活動を実施した。

『山月記』には古めかしい言い回しや難解な語彙が多いこと、舞台となる唐代の文化や官僚制度、中島敦の生涯と言った作者の背景について学生に十分な知識がないことなどを踏まえ、いかに理解を深め作品のテーマにアプローチすればいいのか、「悲しみ」という

観点から『山月記』の文学作品としての取り上げ方と学生教育への留意点について議論、検討した。

また国語教育の観点からは、高校の現行カリキュラムや指導要領（国語総合、現代文、古典）との関係を踏まえ、教員が抱える課題ならびニーズ、文部科学省の教育改革の動向をもとに、それへの対応方法や大学における国語の教員養成、リカレント教育についても検討し、研鑽を深めた。

以上、英語英文学科と日本語日本文学科のそれぞれが独自に実施する FD に加え、表象文化学部全体としては、学期中の毎月 1 回ランチタイムに楽真館ラーニング・コモンズで開催する「表象文化 café」が、2024 年度で 4 年目を迎えた。その時々における自らの関心事（必ずしも専門の研究分野に限定されない）について、聴衆だけでなくその場にたまたま居合わせた人々を前に約 20 分話すという時間は、教員にとって授業や講演とは異なるユニークな経験を与えている。順調に進んでおり、今後も継続、発展させていきたい。

## ◆学部 FD◆

生活科学部 FD 報告：

生活科学部合同特別セミナー「サステナブルな衣食住を考える」を開催

人間生活学科主任 藤本純子

食物栄養科学科主任 杉浦 実

2015 年、国連サミットは「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」を採択した。そこでは、「誰ひとり取り残さない」という原則の下、開発途上国だけでなく先進国をも対象として、世界中の国が解決せねばならない経済・社会・環境の共通課題が示された。近年、包括的で持続可能な社会の構築を目指す観点から、経営戦略に SDGs を取り入れる企業が急増している。SDGs は大学においても無縁ではない。本学生生活科学部は衣・食・住を中心とした「人の生活」とそれを取り巻く幅広い分野を教育・研究対象とする。人間生活学科と食物栄養科学科、どちらに所属する教員も「誰もが心身ともに豊かに暮らし続けられる社会の実現」を意識して教育することが望まれる。また、卒業生は幅広い業界・職種に就職するので、互いの学びを共有し、視野を広げることは学生のキャリア形成上、重要である。

そこで 2024 年度、SDGs に実践的に取り組む企業団体の専門家をお招きし、SDGs の基本的な考えとともに、国内外での最新事例を含む企業の取組事例を学ぶための公開セミナーを両学科合同で計 4 回（各約 90 分）開催した。各セミナーでの講演者とテーマは以下の通りであった。

- I. SDGs を実現するための農業と食品産業（2024/05/22）  
（株式会社 アグリーンキューバーター 代表取締役社長 藤井滋生氏）
- II. 入居者と「希望ある団地暮らし」を共に育てる（2024/07/10）  
（独立行政法人 都市再生機構 西日本支社 技術監理部 片岡有吾氏）
- III. イオンのサステナブル経営 ～企業市民の一員としての責任～（2024/11/06）  
（イオンリテール株式会社 MD 改革本部 商品戦略部 部長 横田大輔氏）
- IV. フェアトレード ～お買い物とはどんな社会に一票を投じるかということ～  
ファッションと女性や子どもの人権の視点から（2024/11/27）  
（有限会社 シサム工房 取締役 人見とも子氏）

人間生活学科の学生の多くは、住居とそれを取り囲む空間や魅力的な装い、あるいは人と人が共に暮らし共に生きるための繋がり等の分野に関心を持って入学する。一方、食物栄養科学科には、京都の食文化に触れることへの期待や食品の開発志向を持つ学生、また栄養を通じて人の健康と福祉に貢献したいと思いをもち学生が多い。これら生活科学部がカバーする領域は広く、両学科・専攻の学生はそれぞれの課程に設置された専門的な科目を通して学びを深めているが、学部横断的なキーワードでお互いの学びに触れられる機会は限られている。

計 4 回の講演会にはいずれも多くの方の来場者があり、参加した学生達も普段、大学の講義では聞けない、実社会での SDGs に関する国内外での事例について学ぶ良い機会となり、学生達からも多くの質問があった。また講演会では、通常、教員が司会役を務めるが、今回のセミナーではいずれも、講演後にフリートークセッションを設け、講演者と担当教員、学生が講演テーマについて意見を交わしながら、参加者からの質問が出やすい雰囲気作りに配慮した。その結果、非常にアクティブなトークセッションとなり、良い取り組みであったと感じられた。

本学では、リベラル・アーツの教育理念の下、幅広い学習を通して広い視野を拓くことが求められる。今後の国際社会を生き抜く上で、本学部卒業生が進むいずれの分野においても SDGs に対する取り組みは避けて通れない。本セミナーを通じ、教員および学生が視野を広げ、本学部で学ぶ知識や技術、考え方が、国際社会においても重要であることに気づいて欲しい。さらに、そのことが、専門科目に対する学修姿勢の向上と、納得いく自分の将来像を描けるようになることに寄与することを期待する。

## ◆大学院研究科 FD◆

大学院文学研究科 FD 報告

文学研究科長 椎名 亮輔

今年度の大学院文学研究科に関する FD 活動については、各専攻からそれぞれの活動についての報告をしてもらったので、それを以下に紹介したい。

まず日本語日本文化専攻からの報告は、以下のようなものであった。

日本語日本文化専攻の近年の課題としては、大学院生相互のコミュニケーションが不活発であることであった。コロナ禍の影響もあるのか、学年を超えたつながりはもちろん、院生相互の情報交換もあまり行われない状況であり、その結果、研究活動における基本的な知識が伝達されにくく、2年間の研究生活の見通しが立てにくい様子を見てとることができた。このことを解決するため、2024年4月26日（金）に、初の試みとして、教員側から働き掛け、大学院生、大学院担当教員全員による懇談会を行った。院生相互が互いを知る機会となっただけでなく、大学院担当教員の中でも、指導の学生以外の研究テーマ等を知る機会となり、専攻全体で学生に接する雰囲気醸成された。また、改めて2年間の研究スケジュールを共有する機会ともなった。この会を受けて、秋学期開始時には、院生が自ら第二回懇談会を開くこととなり、本来の姿である、院生間の自主的な交流の文化が促進されるきっかけとなったと考えられる。

次に英語英文学専攻からは「Colloquium（コロキウム）という FD」というタイトルで以下のような報告を受けた。

3名の教員が共同して1つの授業を作り上げる。この取り組み自体は特に新しいものではないが、英語英文学専攻（博士課程(前期)）の授業『Colloquium』（言語・コミュニケーション）を通じて行っているFD活動について報告する。

この授業は、トロント大学大学院 OISE (Ontario Institute for Studies in Education) のコースをモデルに、2009年に構築されたものである。

本コロキウムの最大の特徴は、3名全員の教員が毎回授業に参加する点である。1名がメインでレクチャーを担当し、残りの2名も積極的に質問や議論に加わる。事前の打ち合わせは行わないため、授業中には予測不可能な質問が飛び交い、教員間で緊張感のあるやり取りが展開される。このような環境は、教員が自身の学識や授業方法を再考する良い機会となるとともに、学生にとってもその過程を学ぶ貴重な場となっている。

授業内容は、修士論文執筆に必要なスキルを幅広くカバーしている。具体的には、文献検索、Research Question の設定、APA スタイルの詳細などを英語で指導する。こうした

緊張感あふれる場合は、教員にとって刺激的な研修の機会となり、FD 活動として有意義である。

一方で、教員のスケジュール調整は課題である。授業は夕方以降に設定されることが多く、身体的な負担が大きい。しかし、2009 年度以降、大学院生が 2 年で修了する成果が出ている点を考えると、この取り組みが教育と研修の両面で確かな効果を上げていることがわかる。

今後も、授業を通じた FD 活動という趣旨を維持し、このコロキウムが教員と学生の双方にとって意義ある内容となるよう、さらなる発展を目指したい。

最後に情報文化専攻からは以下のような報告を受けた。

情報文化専攻では、昨年度に引き続き Forms でアンケートを行い、以下の要望が寄せられた。

最も多くの要望があったのは、研究活動補助の拡充についてである。本専攻では、フィールドワーク、学会、展覧会における研究活動について補助を行っているが、映像制作を中心とする研究等、分野によっては利用しにくい現状がある。研究分野が多岐にわたる点を踏まえ、現行制度の再検討も視野に入れたい。

また、履修登録方法についても、秋学期の登録修正を認めて欲しいと要望があった。昨年度の同アンケートにおいても、研究の進捗状況によって、履修登録科目の再検討を行いたいと意見が挙がっていたため、関係部署との調整を図りたい。

以上、主な要望を記載したが、今年度も様々な問題点について把握することができた。専攻科内で改善可能な部分については、早急に取り組みたい。

以上、大学院文学研究科は三つの特徴ある専攻から成り立っているが、それぞれに独自の FD の取り組みを行い、少しずつ成果を挙げてきているのを見て取ることができる。そしてまた、それぞれに改善点を適切に把握しながら、その方策に取り組んでいることも明らかである。このような取り組みを今後とも続けていき、またそれを可能にするような環境を少しずつでも整えていきたいと思っている。

## ◆大学院研究科 FD◆

大学院国際社会システム研究科 FD 報告：国際社会システム研究科の FD 活動

国際社会システム研究科長 日下 菜穂子

国際社会システム研究科では、国際社会および国際交流に関する知識、現代社会の諸領域における宗教学的、社会的、心理学的、教育学的知見を深め、国際問題や現代社会の課題に対する理解力と解決力を養うことを目的としている。これにより、国際的かつ多様な分野で活躍できる高度な専門性を備えた人物の育成に力を注いでいる。

こうした人物を育成するうえで、本研究科が重視するのは、国や文化を越えた共生社会の構築に資する知見を探求することである。このため、「国際協力と国際交流」（文化・経済・環境政策面での国際協力と国際交流）、「現代社会と文化」（各国・各地域の文化的多様性と社会の調和）、「現代社会と子ども」（教育的な視点から現代社会と子どもの関係を考察）の 3 つの分野を設定し、これらを横断的に学びながら研究を進展させることで、高度な職業的専門人を育成している。

この教育目的を達成するために、2019 年度より研究科委員会の会議後に春と秋の年 2 回、FD 研修会を実施している。2024 年度は、大学院生の研究指導の質の向上をめざし、各大学院生の履修状況や研究課題、進捗状況について、指導教員と全教員が情報を共有する機会を設けた。これにより、全教員が大学院生の現状を的確に把握し、統合的な指導に反映する体制を整えた。

なお、2024 年度は修士論文中間発表会は行わなかったが、研究科での修士論文指導および講義において各大学院生の研究進捗状況を確認し合う場を設けた。この場では、各大学院生の進捗に対する教員からの助言が行われるとともに、大学院生間での意見交換も活発に行われ、建設的な議論が展開された。

また、研究の進捗状況をより詳細に把握するため、2020 年度より毎年 1 月に「研究進捗状況報告書」を大学院生が提出することとなった。この報告書をもとに、全教員が各院生の研究内容を把握し、教育の質の向上に役立てている。

今後の課題としては、指導教員の専門分野が多岐にわたるため、修士論文提出時の研究科共通の形式を整備することが挙げられる。国際社会システム研究科としては、引き続き FD 研修会を継続し、研究進捗状況報告書を有効活用するとともに、教員間の連携を一層強化し、学生のニーズや状況に応じたきめ細かな指導を行っていく方針である。

## ◆大学院研究科 FD◆

大学院薬学研究科 FD 報告：大学院 FD・大学院教育への取り組み・研究室紹介  
病態分子制御学研究室

薬学研究科長 芝田信人

大学院薬学研究科医療薬学専攻（4年制課程）は2012年に開設され、高度化した薬物治療における医療と創薬科学をつなぐ医療薬学の研究・実践によって、難病の克服や医薬品の安全使用などの社会的要請に応え、大学・研究所、医療機関、民間企業や地方自治体で医療薬学の充実や指導者として社会に貢献できる人材の育成を目的としています。現時点で、9名の博士（薬学）を育成してきましたが、2024年度時点での大学院生在学数は6名で、2025年度には、新たに1名（2025年1月14日現在）を迎える予定です。

今回の研究室紹介は、尾崎恵一教授主宰の病態分子制御学研究室です。

尾崎恵一教授の研究室では、シグナル伝達異常や老化に関連する難治性疾患の治療を目指し、「がん分子標的薬」を用いた分子薬理学的基礎研究を行っています。がん治療薬の主流となった「がん分子標的薬」を活用し、がん治療の新たな可能性を探求しておられます。具体的には、老化との関連が指摘されている細胞の自食作用（オートファジー）にも着目し、がんのみならず、肥満や炎症性疾患、アルツハイマー病などの神経変性疾患の治療も視野に入れた研究や、ヒストンのアセチル化やDNAのメチル化などの修飾によるエピジェネティクス（DNA配列によらない遺伝子発現制御機構）を制御する研究などを展開されておられます。現在、先生の研究室では、1名の大学院生が在籍しています。

尾崎恵一教授は、がん分子標的薬がまだ国内で承認されていなかった2000年、長崎大学在職時に、キナーゼ阻害剤であるMEK阻害剤やエピジェネティクス制御薬として注目されるヒストン脱アセチル化酵素(HDAC)阻害剤に着目し、それらの併用療法による新たながん治療戦略を提唱されました。この研究の先駆的な成果は、がん分子標的併用療法の有効性を実証するものであり、2006年には日本薬学会九州支部学術奨励賞を受賞されています。さらに、長崎大学、科研費（2003-2020）、武田科学振興財団、内藤記念科学振興財団、公益信託富岳基金、同志社女子大学などから獲得した多くの研究助成を活用し、HDAC阻害を基盤とした革新的ながん分子標的療法の開発を推進して来られました。現在では、HDAC阻害剤のもつオートファジー誘導活性に注目し、新しいがん治療法の可能性を追求されておられます。また、2016年、メラノーマ治療薬であるMEK阻害剤を糖尿病治療に転用するという先生のドラッグリポジショニングの先駆的研究（Am. J. Physiol. Endocrinol. Metab. 2016, 310:E643-51）が、アメリカ生理学会からAPS Select（2016）に選ばれ、高く評価されました。さらに、2018年、siRNAの新規デリバリー法を開発した研究（J.

Drug Deliv. Sci. Tec. 2018, 48:235-44) が、“Best Paper Award 2018”を受賞し、革新的な成果として注目を集めています。

このように、尾崎恵一教授が率いる病態分子制御学研究室は、基礎研究から応用研究に至るまでの幅広い領域において、がん治療をはじめとする医療分野での多岐にわたる新規治療法の開発に大きく貢献しています。同研究室は、未来の医療を切り拓く先進的な研究拠点として、本学の薬学部生や大学院生に新たな挑戦の場を提供しており、革新的な成果を次々と生み出している点が特徴と言えるでしょう。こうした研究活動の基盤には、尾崎恵一教授が掲げる「難治性疾患の新たな治療法の開発に貢献する」という明確なテーマと、学生を中心としたきめ細やかな指導が存在するのではないかと考えられます。

その成果の一例として、2020年の教授着任時に初めて配属された学部3年次生の外村奈々さんの成長が挙げられます。外村さんは、日本薬学会や日本がん分子標的治療学会で研究成果を発表するなど、数多くの実績を積み重ねた結果、大学院博士課程への進学を果たしました。その後、本学特任助手として採用され、薬学研究および薬学教育の道を志すまでに至っています。これらの事例は、尾崎恵一教授の指導が単なる研究成果の創出に留まらず、次世代の医療を担う人材育成にも多大な貢献を果たしていることを物語っています。

それでは、尾崎恵一教授が日々実践している大学院生への研究指導の具体的な内容について、お話を伺いたいと思います。

#### Q1. 病態分子制御学研究室でのモットー（研究信条）は何ですか。

分子レベルで病態の本質を探求し、その知見を新たな治療法や薬剤の開発に応用することは、未来の医療を切り拓くための重要な使命です。病の仕組みを深く理解し、科学的探究心を持って課題に挑戦することで、病気を制御する分子の可能性を見出し、新たな治療法の創出に貢献することが求められています。特に、多様性や独自の視点を活かしながら、分子レベルで病態の謎を解明し、新しい治療の可能性を切り拓くことは、研究者としての大きな挑戦であり意義深い取り組みです。また、女性科学者としての感性と知性を駆使して病気の分子メカニズムを探求し、柔軟な発想と確かな科学に基づくアプローチで病態分子の制御を通じた医療革新を目指すことが期待されています。

さらに、研究室の一員として、挨拶や報連相（報告・連絡・相談）の徹底を心がけるとともに、自他共栄・共楽の精神を持ち、周囲と協力しながら研究に取り組むことが重要です。大学院生はこれらのモットーを胸に、未来の医療に貢献する研究者としての道を切り拓いてほしいと考えています。

**Q2. 大学院生の研究テーマの決定はどのように行われていますか。**

大学院生の研究テーマは、学部学生が研究室に配属される段階からのプロセスを通じて決定しています。配属時には、がん、肥満性炎症疾患、神経変性疾患、自己免疫疾患などの難治性疾患に対する学生の興味や関心を丁寧に聞き取り、それに基づいて卒業研究のテーマを設定します。この取り組みにより、学生一人ひとりの関心を尊重した研究活動が可能となり、主体的な学びの基盤が築かれると考えています。

大学院への進学時には、卒業研究で取り組んだテーマの延長や関連性のあるテーマ、あるいはその発展型のテーマが選ばれることが多く、研究の継続性と深まりが確保されています。また、進学に際しては、学生本人との綿密な打ち合わせを通じて、研究テーマや計画を具体的に決定します。この際、学生の興味や将来のキャリア目標が十分に考慮されるよう努めています。

**Q3. 大学院生との研究に関するディスカッションはどのように行われていますか。**

大学院生との研究に関するディスカッションは、日々の実験結果の共有から体系的なセミナー形式の議論まで、多層的に行っています。基本的には毎朝、前日までの実験結果をもとに考察を深め、その日および今後の実験計画について話し合います。この日常的なディスカッションにより、研究の進捗を着実に確認しながら計画を柔軟に調整しています。また、月に一度程度の頻度で、大学院生にこれまでの実験結果をパワーポイントにまとめてもらい、セミナー形式でプレゼンテーションを実施します。この場では、成果を共有するだけでなく、研究内容を多角的に議論し、課題の整理や次のステップへの方向性を明確にしています。

さらに、隔週で実施している論文紹介セミナーでは、私と学生が交代で関連研究の論文を紹介し合います。このセミナーを通じて、他の研究と比較しながら自分の研究テーマや成果を再評価する機会を設け、幅広い視点から議論を深めています。

**Q4. 大学院生は、学部生より能動的に研究活動を行うことが必要となりますが、そのためにはどのような指導が必要とお考えでしょうか。**

大学院生の指導においては、学生が考えた仮説や得られたデータについて具体的な質問を投げかけ、自分の言葉で説明させることで理解を深めるよう努めています。また、批判的な姿勢ではなく建設的なフィードバックを与え、議論を常にポジティブに保つことを重視しています。特に、女性特有の視点や柔軟性は科学において大きな強みであるため、その重要性を認識し、個々の意見を尊重しています。さらに、次の実験や論文執筆、学会発表といった具体的な目標を設定することで、ディスカッションを学生のモチベーション向

上に結びつける工夫をしています。また、研究に集中できる環境を整えることも重要視しており、過度なプレッシャーを避けつつ、必要に応じて適切なアドバイスを提供しています。加えて、研究者としての成功だけでなく、キャリア形成や将来の選択肢についても積極的に議論を行い、学生が長期的な視野を持てるようサポートしています。その一環として、学部生を日々指導する機会を設け、リーダーとしての姿勢を示す訓練も実施しています。

#### Q5. その他、先生のお考えの大学院教育についてお聞かせください。

薬剤師は「臨床における薬の専門家」であり、かつ「研究者」として多様な役割を担い、医療と薬学の進展に寄与できる存在であるべきです。したがって、薬剤師を対象とした大学院教育の理想は、薬学の専門知識と実践力を深めるだけでなく、研究者やリーダーとしての能力を育成し、社会に貢献する人材を輩出することです。

そのためには、最先端の薬学研究を見据えた研究テーマを設定し、新しい治療薬の研究開発に貢献できる専門家を育成したいと考えています。さらに、臨床と基礎研究の融合を目指して、患者データを活用した薬効評価や副作用の解析研究に取り組むことができれば理想的です。また、疾患治療のための新規分子の探索を通じて、具体的な疾病や医療の課題に対して創造的なアプローチを取る能力（実践的な課題解決能力）を養いたいと考えています。

加えて、学生が独自の研究テーマを設定し、遂行する力を育むことを心がけています。学生自身が科学的な疑問を持ち、それを解決するプロジェクトを設計し実行できる力を育成することが目標です。そして、常に学び続ける姿勢、すなわち科学の進歩に対応し、継続的に自己研鑽する習慣を確立することが重要と考えます。このような教育を実現することが、私の理想とする大学院教育です。最終的には、本学薬学部出身の専任教員が誕生することを願っています。

#### あとがき：

尾崎恵一教授の研究室は、学部生の段階から研究計画を立て、実行する過程を重視することを特徴としています。大学院に進むと、研究者としての独立性や問題解決能力を育む環境が整えられ、医療分野で革新的な貢献を果たす人材の育成に力を入れておられます。先生は、学際的な視点を大切にして学生の興味や関心を丁寧に聞き取り、それに基づいて研究を進展させることを重視されており、学生一人ひとりの関心を尊重した研究活動を展開されておられます。そのために大学院生がプレゼンテーションや学会発表のスキルを磨くための環境作りと機会提供に努めておられます。尾崎恵一教授のアプローチは、単に知識や技術の習得にとどまらず、創造力や批判的思考、そして優れたコミュニケーション能

力を養うことも重視されておられます。このような理想的な研究室運営により、医療と薬学の発展に貢献する次世代のリーダーが育成されていることに、私は深い感銘を受けた次第です。

尾崎恵一教授、今回のインタビューにご対応頂きましてありがとうございました。

## ◆大学院研究科 FD◆

大学院看護学研究科 FD 報告

看護学部看護学科主任 小松光代

大学院看護学研究科は7年目を迎え、今年度の在籍者は大学院博士課程(前期)11名、博士課程(後期)7名の計18名となった。看護学研究科のFDは、教員の研究能力に重きをおいて企画するとともに、看護学研究科に在籍する大学院生にも開放している。

本研修は、昨年度より、一般社団法人日本私立看護系大学協会の研修動画を活用し、オンデマンド形式により受講する方法で実施している。

今年度のテーマは「スコーピングレビュー」とし、ねらいは、「看護学の発展に寄与する研究課題を焦点化するためのスコーピングレビューの歴史や手順等について理解し、今後の研究活動や指導にいかすことができる」とした。

対象教員33名中、受講アンケートの回答は14名(42.4%)と半数に満たなかったが、テーマ設定は「良い」13名(92.9%)、オンデマンド配信方法が「良い」13名(92.9%)であった。視聴期間の設定は「改善の必要なし」12名(85.7%)、「どちらとも」2名(14.3%)であり、「どちらとも」の理由は、自由な視聴が現実的である一方で、時間を設定できないことを疑問視する意見であった。講義内容は、「よく理解」5名(35.7%)、「概ね理解」9名(64.3%)と例年より「よく理解」の割合が低下した。今後の研究への活用は、5名(35.7%)が「活用できそう」、7名(50%)が「まあ活用できそう」、2名(14.3%)が「どちらとも」であった。自由記載には、「書籍だけではわかりにくい内容を理解でき、レビューの歴史も知ることができた。」や「手順を丁寧に説明していただき、わかりやすく、システムティックレビューの前段階として使用できると思った。」「研究方法も日々進化していくことを実感し、改めて常に勉強し続けなければならないと感じた。」などの記載があった。

今回のテーマや内容、開催方法は概ね良好な反応が得られた。アンケート回収率の向上と受講確認は次年度の課題である。オンデマンド形式は、自由度があり希望する声も多いため、引き続き「研究能力」の向上に寄与できるテーマでの開催を検討していきたい。

## ◆大学院研究科 FD◆

大学院生活科学研究科 FD 報告：2024 年「生活科学部・生活科学研究科 FD 研修」

生活科学研究科長 山本 寿

本学は、2021 年度に受審した認証評価において「FD 活動において、研究活動や社会貢献についての活性化や資質向上を図るための取り組みがなされておらず、改善が求められる」との指摘を受けた。確かに、生活科学部・生活科学研究科の教員は全学的な FD 活動に参加しているが、その内容は主に「教育」的で、「研究・社会活動」面ではゼミ生や院生の発表を通じた間接的な交流が主であった。教員自らが自己の研究活動や社会貢献活動を紹介し、他の教員と共有を図る機会は個人的・散発的なもので、学部・研究科で組織的に運営されたものは存在しなかった。

そこで 2022 年度、この状況を改善することを目指し、2023 年度以降、年 2 回程度、教員会議の中に「生活科学部・生活科学研究科 FD 研修」の時間を設け、教員個々が研究活動や社会貢献の一端を他の教員に紹介し、学部教員全員で共有する機会とする。こういった試みを提案し、承認された。そこでは、例えば、自己の研究に関わるアイデアや方法論を紹介する、発表論文や学会活動や地域での社会活動の内容を他の教員にわかりやすく説明する。こういった教員同士の学習や共有化の場を定期的に持つことで、それぞれが他分野の研究・社会活動の手法を学び、刺激を受けることが期待される。

2023 年 9 月、最初の学部・研究科 FD 研修として、筆者（食物栄養科学科所属）が話題提供者（プレゼンター）を務めた。2024 年には、第 2 回（2024 年 3 月）として人間生活学科の齋藤朱未教授が、続いて第 3 回（2024 年 9 月）では食物栄養科学科の鈴木拓史准教授がそれぞれプレゼンターを務め、自身の遍歴を含む研究活動や社会貢献活動を紹介した。以下、2024 年に実施された第 2 回と第 3 回の研修内容の概要を記す。

齋藤教授（第 2 回）は、「これまでと現在の研究内容」と題し、まず、自分の研究のルーツと農村計画学分野に関する概観を提示した。次に、東日本大震災の復興において実施し、現在も継続中の住民調査の内容を紹介した。具体的には 2023 年 8 月に学会で報告した内容を基に、福島県における中長期間避難自治体の帰還に関する様々なデータ分析の結果を提示し、そこから見えてくる住民の帰還の決め手や帰還しない理由などを探るというものであった。内容的に、現実の地域に密着した社会貢献度の高い研究活動であった。

鈴木准教授（第 3 回）は、「栄養学を基盤とした教育・研究の理念」と題し、最初にこれまでの自己遍歴として、大学教員になるまでの経緯から教員になったあとの変遷を紹介した。続いて栄養学の教育・研究を通して、「自身ができることを模索し続けること」の大切さと、学生のためになる教育・研究の理念を述べた。最後に、栄養素の消化・吸収を担う小腸を標的とした現在の研究活動を紹介し、新たな先端手法を取り入れて研究を発展させていくビジョンを提示した。

◆2024年度春学期 授業に関するアンケート総評◆

# 2024年度 春学期 授業に関するアンケート総評

同志社女子大学 教育開発支援センター長 奥田 紫乃

1

## はじめに

- 「授業に関するアンケート」は、授業の改善を目的として実施されているものであり、その回答は個々の授業に対応した結果である
- この総括は、これらのデータを全学的、または学科・科目区分別に概観することにより、全学的な傾向や各学科の特性を把握し、カリキュラム内容の確認や学生の満足度の向上、教員のFDに役立てるものである

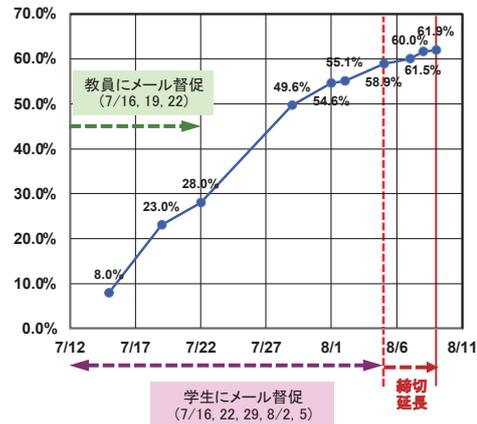
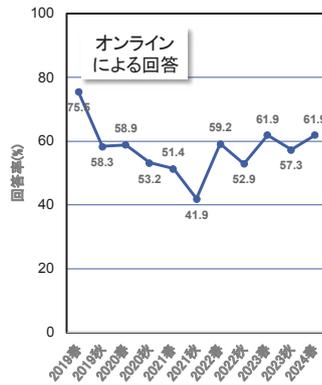
### アンケート概要

- 実施期間：2024年7月9日～7月29日（第13～15週目）
- 標準的な実施モデルとして第14週目（7月16日～22日）の授業冒頭での実施を推奨
- マナビーを用いたオンライン方式

2

## アンケートの回答率

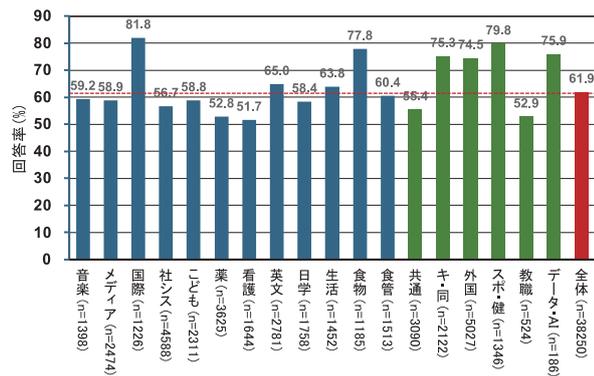
- 2024春のアンケート回答率は**61.9%**
- 2023秋と比較すると4.6% up
- 2023春と同値(±0)
- 授業最終日(7/29)での回答率は49.6%
- 授業終了後の学生への督促メールにより約10%余上昇



3

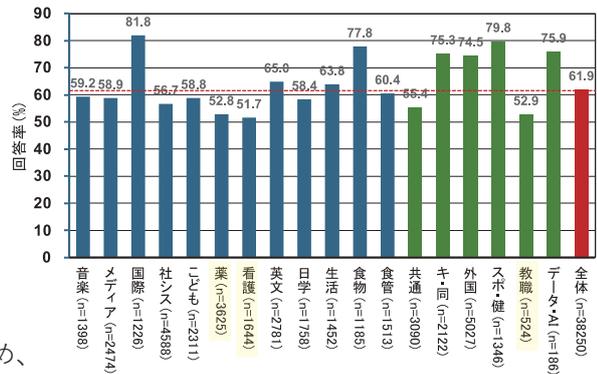
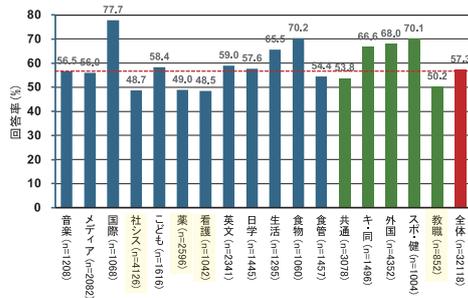
## アンケートの回答率

- 学科別では、国際教養学科(81.8%)、食物栄養科学科(77.8%)の回答率が高い
- 科目区分別では、スポーツ健康科目(79.8%)、データ・AI科目(75.9%)、キリスト・同志社科目(75.3%)、外国語科目(74.5%)



4

# アンケートの回答率



- 回答率の傾向が固定化されつつあるため、各学科・科目区分において、個別に対策を検討する必要あり

# アンケート項目

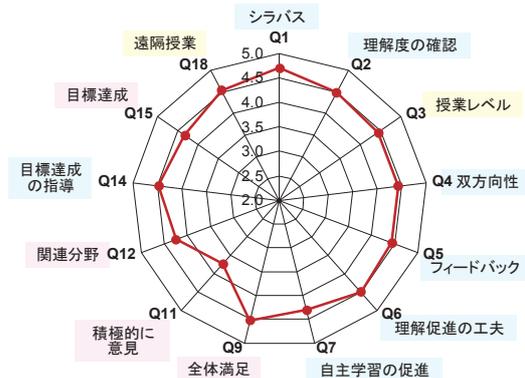
Q1	授業内容はシラバスに合っていましたか。 The course was conducted according to the syllabus.	Q10	この授業の予習、復習、自主学習(授業時間90分を除く)に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。 Indicate the average weekly time for preparation, review, and self-study (excluding 90 minutes of class time) for this class.
Q2	受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか。 The course was conducted in accordance with students' degree of understanding.	Q11	あなたはこの授業で積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか。 You participated actively in the form of questions and constructive comments.
Q3	授業レベルは自分に合っていましたか。 The course level was appropriate.	Q12	あなたはこの授業の分野または関連分野の学習をさらに深めたいですか。 You want to study deeper about this or related subjects.
Q4	教員からの一方的な授業ではなく、教員と受講生または受講生同士の双方方向性に工夫がされていましたか。 The instructor encouraged students' participation and interaction.	Q13	あなたがこの授業を履修した理由は何ですか(複数選択可)。 Choose the reasons for taking this course.
Q5	フィードバック(例 採点、添削、チェック後の返却、マナビーでのコメント、質問に対する回答など)は効果的におこなわれていましたか。 The instructor's feedback on course assignments was effective and helpful.	Q14	到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか。 The course was conducted in a way that allowed the course objectives to be easily achieved.
Q6	言葉による説明だけでなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか。 The instructor implemented or provided support not only by oral explanation but also in any other ways to help deepen your understanding.	Q15	あなたは到達目標を達成できたと思いますか。 You achieved the course objectives.
Q7	自主学習を促す工夫がなされていましたか。 The instructor encouraged students to conduct work outside of the class.	Q16	DWCLA10のうち、この授業の履修を通して向上したと感じられる力をすべて選んでください(複数選択可、なしも可)*16番と17番は1つの質問として回答してください。 Choose the abilities or skills from the DWCLA 10 which you have improved through the course study.
Q8	工夫してほしいと思ったことを選んでください(複数選択可、なしも可)。 Select anything that could be improved in the course, (Select as many or as little as necessary.)	Q17	(16番続き) DWCLA10のうち、この授業の履修を通して向上したと感じられる力をすべて選んでください(複数選択可、なしも可) (Continuation from #16) Choose the abilities or skills from the DWCLA 10 which you have improved through the course study.
Q9	この授業は全体として満足できる内容でしたか。 You were satisfied with taking this course.	Q18	通隔での授業は滞りなく行われましたか? ※通隔授業が行われた場合のみ回答してください。 You could take distance learning lessons without problem.

## 本学全体のアンケート結果の傾向

- Q11(積極的に意見)以外の項目において、平均4.0以上の評価
- Q2(理解度の確認)、Q6(理解促進の工夫)およびQ14(目標達成の指導)は全学平均4.5、全ての学科・科目区分4.3以上
- Q9(全体満足)は全学平均4.5、全ての学科・科目区分4.3以上



- 全学的に、教員は学生の理解促進・目標達成に尽力し、学生は授業に概ね満足している



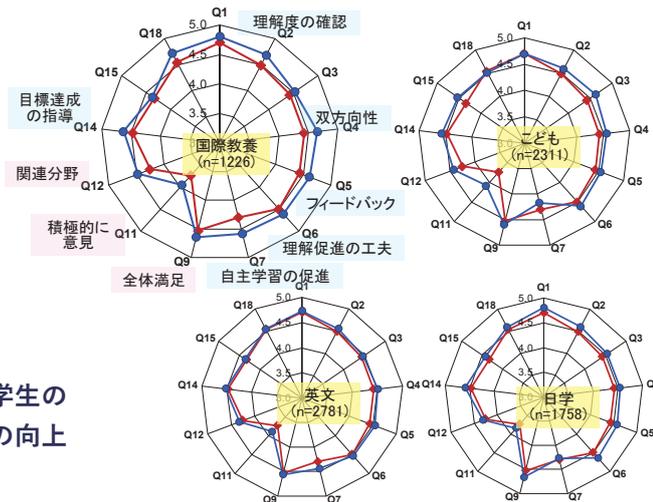
\* 各項目における全学回答者数のうち「その他」「未回答」を除いた回答数を母数として算術平均値を算出

## 学科別のアンケート結果の傾向

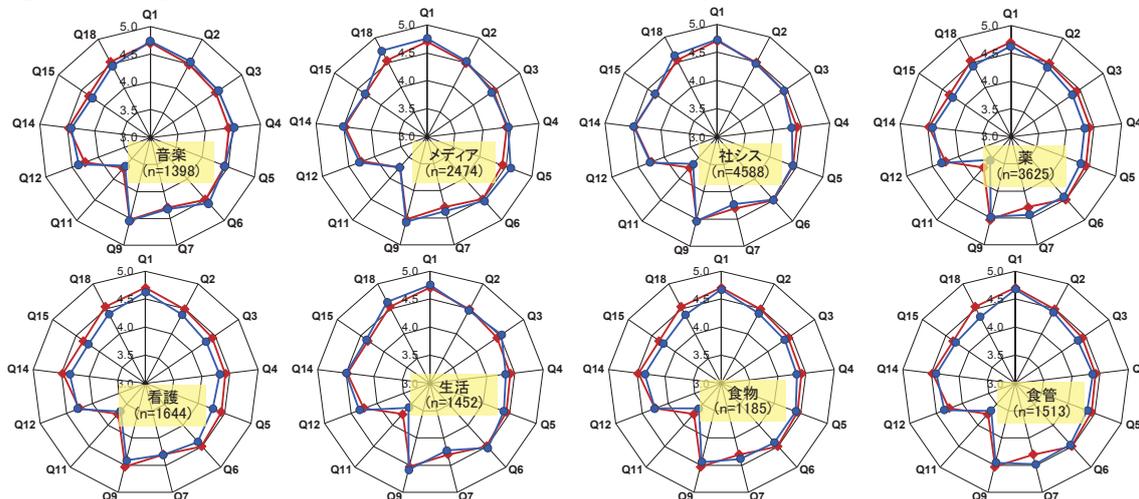
- 国際教養学科は、全ての項目において高評価
- 現代こども学科、英語英文学科、日本語日本文学科も評価が比較的高い
- Q11(積極的に意見)やQ4(双方向性)、Q2・Q6(理解度の確認・工夫)の評価が全学平均より高い



- 教員と学生、学生同士の双方向性や、学生の積極性を向上させることが授業評価の向上につながる

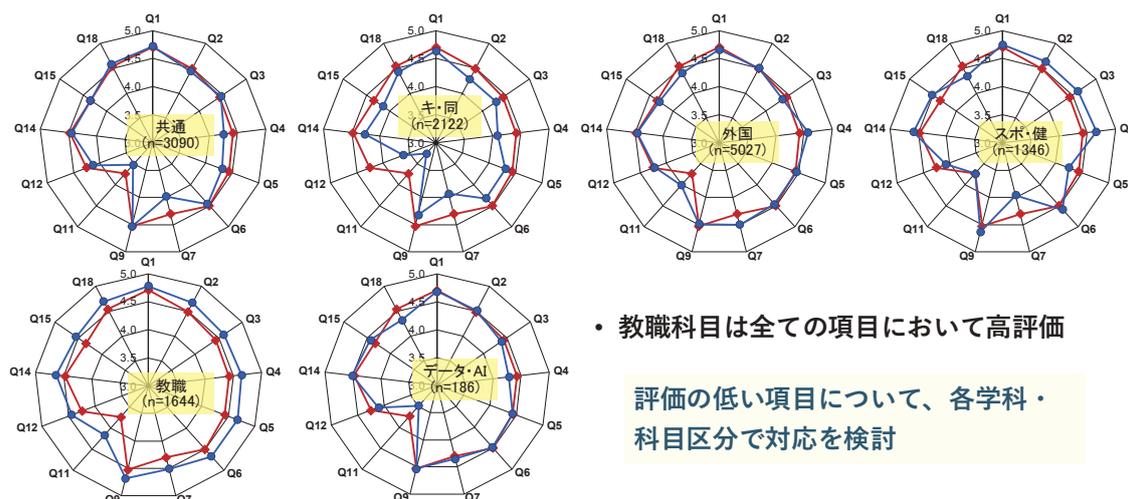


## 学科別アンケート結果の傾向



9

## 科目区分別アンケート結果の傾向

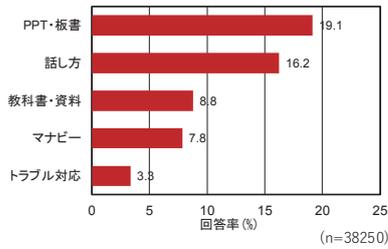


• 教職科目は全ての項目において高評価

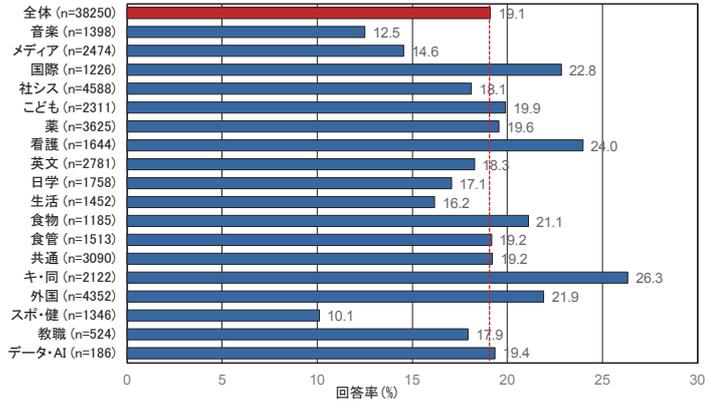
評価の低い項目について、各学科・科目区分で対応を検討

10

## 教員に求める工夫



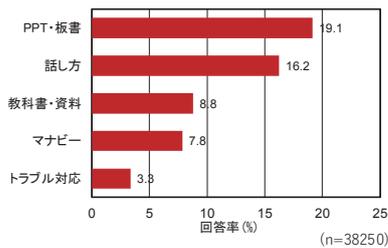
- 全学平均値では、**19%**の科目で「**わかりやすいスライド・板書**」に工夫が求められている



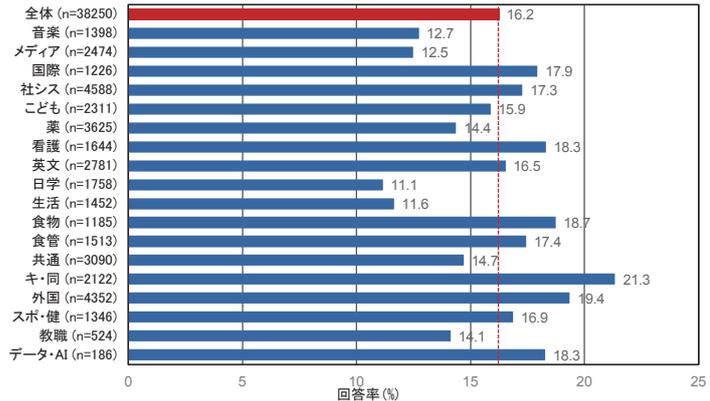
「わかりやすいPPT、板書」に工夫を求める回答率(学科・科目区分別)

11

## 教員に求める工夫



- 全学平均値では、**16%**の科目で「**聞き取りやすい話し方**」に工夫が求められている

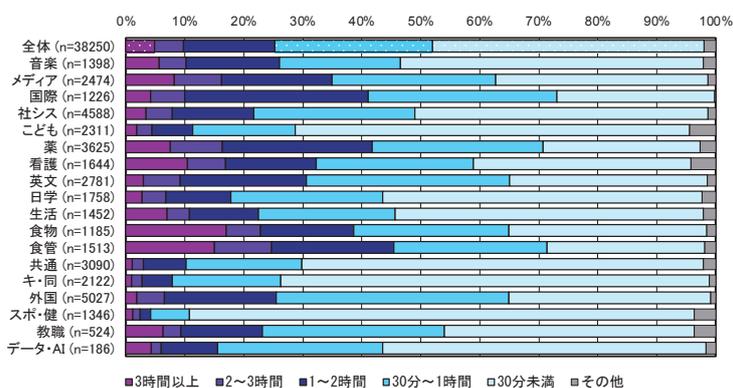


「聞き取りやすい話し方」に工夫を求める回答率(学科・科目区分別)

12

## 授業外学習時間について

- 全学の73%の科目で授業外学習時間が1時間未満
- 食物・食管で2時間以上の学習時間をもつ割合が高い
- 国際・薬・食管の40%以上、メディア・看護・英文・食物の30%以上の科目で1時間以上の学習時間

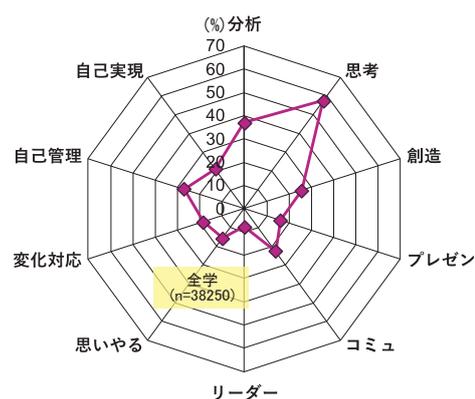


1週あたりの授業時間外学習時間 (学科・科目区分別)

13

## 授業で向上した力 (DWCLA10)

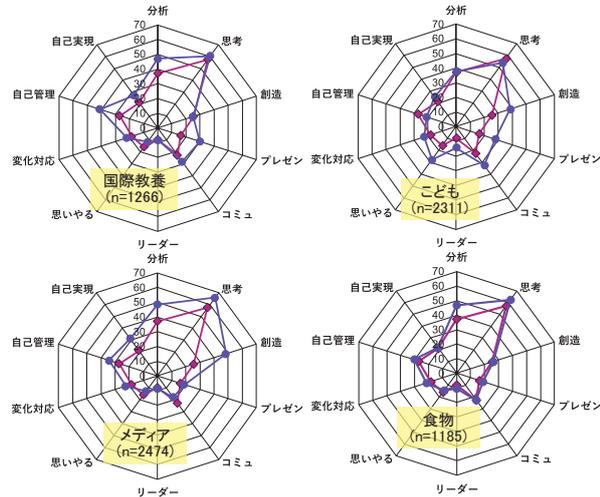
- 授業で伸びたと感じる力は**思考力**(57.3%)が最も多く、次に**分析力**(37.1%)が多い
  - 自己管理能力(27.1%)、創造力(25.6%)、コミュニケーション力(22.5%)、自己実現力(21.2%)がそれに続く
- ↓
- 各学科・科目区分の特性にもよるが、教員と学生、学生同士の双方向性や、学生の積極性を向上させることで、コミュニケーション力やプレゼン力、自己実現力の向上に繋がる可能性あり



14

## 授業で向上した力 (DWCLA10)

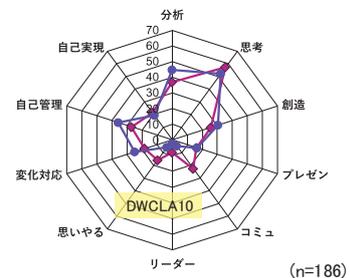
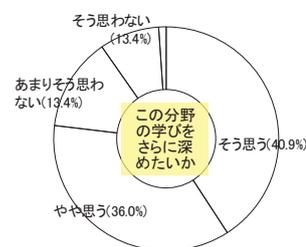
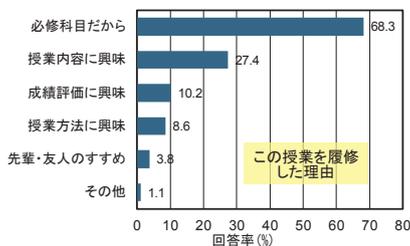
- 国際教養学科では、思考力(60.4%)のほか、分析力(47.1%)、自己管理能力(41.1%)も約4割以上
- 現代こども学科では、創造力(38.5%)、思いやる力(28.0%)、プレゼン力(27.8%)、メディア創造学科では創造力(48.3%)、食物科学専攻では分析力(48.5%)など、各学科の学びの特性がみられる
- 各学科の特性を考慮しながら4年間で全ての項目が獲得されることが望まれる



15

## データサイエンス・AI科目区分

- この授業を履修した理由において、「必修科目だから(68.3%)」のほか、「授業内容に興味があったため(27.4%)」の回答
- この分野の学びをさらに深めたいとの回答は76.9%であり、履修学生の3/4はさらに関連分野を学ぶ意欲あり
- 分析力(44.6%)、自己管理能力(36%)が向上したとの回答



16



## ◆ラーニング・コモンズ 利用報告◆

2023年度は日曜日を閉館していたが、2024年度より日曜日は開館した。

## 1. 2024年度 イベント実施状況

## ◇京田辺キャンパス 聡恵館ラーニング・コモンズ

月	イベント名
4月	新入生勧誘ブース出展（学生支援課）
	生化学実習 2024（薬学部）
	キャリア・資格取得支援講座 説明・相談会（キャリア支援部）
	Seminar in International Studies I（国際教養学科）
	新入生図書館オリエンテーション
	女性のヘルスケアカフェ（薬学部）
5月	朱ゼミ合同授業（社会システム学科）
	メディア創造学科講演会（メディア創造学科）
	女性と健康のポスター展示（サステイナブル研究会）
	新入生図書館オリエンテーション
	薬学・看護学部合同授業（看護学部）
	医療製剤学研究室セミナー（薬学部）
	LC staff 募集説明会（LCスタッフ）
	JLIC 留学生交流会（国際課）
	オープンキャンパス（高大連携課）
	医療製剤学研究室セミナー（薬学部）
6月	ギャラリー展示「Sky-High to a beautiful World 日本国際ポスター美術館所蔵 世界の女性ポスターデザイナー展 2024 at 同志社女子大学」（メディア創造学科）
	薬学研究Ⅲ論文発表会（薬学部）
	オープンキャンパス（高大連携課）
	フードライブ（サステイナブル研究会）
	医療製剤学研究室セミナー（薬学部）
	キャリアカフェ（キャリア支援部）

月	イベント名
7月	第一回展示発表会 (CUBE /デジタルコンテンツ研究部)
	医療製剤学研究室セミナー (薬学部)
	七夕祭り (学生会)
	セレクト上映 (ライブラリーサービス課)
	ギャラリー上映「アートシアター・銀河鉄道の夜」(ライブラリーサービス課)
	こどパ 19th リハーサル (現代こども学科)
	「プロジェクト演習」最終報告会 (キャリア支援部)
	ギャラリー展示「” #” みえる・つながる <sup>2</sup> メディア」(メディア創造学科)
	使用済み教科書回収 (国際教育支援研究会)
	Lucky★Market (学生会)
	「メディア創造基礎演習C」合同発表会 (メディア創造学科)
	オープンキャンパス (高大連携課)
	8月
ギャラリー展示「使い捨て楽園の酔い覚まし」	
日本薬学会 講演会 (薬学部)	
こどパ 19th リハーサル (現代こども学科)	
こどパ 19th (現代こども学科)	
9月	オープンキャンパス (高大連携課)
10月	キャリア・資格取得支援講座 説明・相談会 (キャリア支援部)
	6年次生ガイダンス (薬剤師国家試験対策室)
	Lucky★Market (学生会)
	ギャラリー展示 合同展示会「MONEO~わかって欲しかった。~」 (メディア創造学科)
	和太鼓演奏及び鑑賞 (国際課)
	医療製剤学研究室セミナー (薬学部)
	先輩のプレゼンを聞こう : Pechakucha とは何か (メディア創造学科)
	キャリアカフェ【日本製剤】(キャリア支援部)
	ブックトレードのための本の回収 (サステイナブル研究会)
	女性のヘルスケアカフェ (薬学部)
	メディア創造学科講演会「Entertainment and Technology」 (メディア創造学科)
	スポーツフェスティバル
	ハロウィンイベント (学生会)
	ギャラリー展示「メディア創造学科 有賀ゼミ卒業制作グループ展 unus」 (メディア創造学科)

月	イベント名
11月	ブックトレード（サステイナブル研究会）
	コンタクトレンズケース回収（サステイナブル研究会）
	「Overseas Study Preparation II/留学事前指導II」（国際教養学科）
	ギャラリー展示「中村信博ゼミ卒業制作展 Paradigm Shift -シン・メディア-」（メディア創造学科）
	「Overseas Study Preparation II/留学事前指導II」（国際教養学科）
	フードドライブ（サステイナブル研究会）
	ギャラリー展示「梅田ゼミ卒業制作展 バイバイバイ=VALUE」（メディア創造学科）
	女性のヘルスケアカフェ（薬学部）
	メディア創造学科講演会（メディア創造学科）
	Mechakucha 1（メディア創造学科）
	教職課程研究会（教職課程センター）
クリスマスツリー点灯式	
12月	Lunch Time Music ; Christmas Version presented by AV Library
	看護学部 4年次生 国際看護活動論 グループワーク授業（看護学部）
	第39回（2024年）異文化コミュニケーション学会年次大会
	「Overseas Study Preparation II/留学事前指導II」（国際教養学科）
	女性のヘルスケアカフェ（薬学部）
	ギャラリー展示「FROM NOW ON」
	2025年度A0方式入学者選抜合格者集合学習（入学課）
	フードドライブ（サステイナブル研究会）
	「Overseas Study Preparation II/留学事前指導II」（国際教養学科）
	ボランティア活動発表会（宗教部）
	オープンキャンパス（高大連携課）
学芸学部ジョイントプログラム「地球を守るあらかわし方 FROM NOW ON」	
1月	女性のヘルスケアカフェ（薬学部）
	Mechakucha 発表会：世界に一つだけの本（メディア創造学科）
	国際教育支援研究会 活動紹介
	Mechakucha 2（メディア創造学科）
	ギャラリー展示「Saving Our EARTH」
2月	2024年度 メディア創造学科 ポスターセッション（メディア創造学科）
	2024年度 メディア創造学科 進級制作展（メディア創造学科）
3月	オープンキャンパス（高大連携課）

## ◇今出川キャンパス 楽真館ラーニング・commons

月	イベント名
4月	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』（日本語日本文学科）
	入学式 動画配信（総務課）
	新入生オリエンテーション 英語英文学科 Expo（英語英文学科）
	『こむらさき』編集ワークショップ（日本語日本文学会）
	キャリア・資格取得支援講座 説明・相談会（キャリア支援部）
	「絵本研究」作品展示（日本語日本文学科）
	中・長期受入れ留学生 2024 年度春学期歓迎会（国際課）
	演舞の衣装展示（おどり・京炎そでふれ！花風姿）
	キャリアカフェ（起業セミナー）（キャリア支援部）
	サステナブル研究会 活動報告のためのポスター展示（サステナブル研究会）
	2023 年度秋学期セメスター語学留学 事後授業（国際課）
	部活・就活報告会（おどり・京炎そでふれ！花風姿）
	サステナブル研究会 説明会+茶話会（サステナブル研究会）
	表象文化 café「俳句結社の世界」（日本語日本文学科 生井 知子）
オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』（日本語日本文学科）	
5月	JLIC 留学生 歓迎会（国際課）
	言語交換パートナーマッチング交流会（国際課）
	おどり・京炎そでふれ！『花風姿』ミーティング （おどり・京炎そでふれ！花風姿）
	表象文化 café「1891 年に 20 代半ばでボストンから岡山に来た女性宣教師 Alice P. Adams と Doshisha の話」（日本語日本文学科 今井 由美子）
	オープンギャラリー展示『フードドライブ&レシピキャンペーン』 （サステナブル研究会）
	生活科学部特別講義（食物栄養科学科）
	オープンキャンパス（高大連携課）
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』（日本語日本文学科）
	Living Design Week（人間生活学科 居住空間研究室）
6月	JLIC 留学生 送別会（国際課）
	オープンキャンパス（高大連携課）
	サステナブル研究会 フードドライブ（サステナブル研究会）
	サステナブル研究会 レシピキャンペーン（サステナブル研究会）
	MBTI ワークショップ（英語英文学科）
	キャリアカフェ（キャリア支援部）
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』（日本語日本文学科）

月	イベント名
6月	表象文化 café「『ニューロダイバーシティ』を受け入れる：学生の理解と支援」 (日本語日本文学科 崎 ミチ・アン)
	同志社女子大学 日本語日本文学会 第39回総会・記念講演会 (日本語日本文学会)
7月	七夕イベント (LC STAFF)
	第58回生活科学学会大会 (総会・講演会) (生活科学会)
	生活科学部特別講義 (生活科学部)
	JLIC 留学生 送別会 (国際課)
	英語英文学科第22回ポスターセッション (英語英文学科)
	WHITE WORK 2024 (人間生活学科 被服造形研究室)
	表象文化 café「17世紀末の女性絵本作家・居初つなの書画—奈良絵本研究の楽しみ」 (日本語日本文学科 宮腰 直人)
	Public Speaking Poem Recital 発表会 (英語英文学科 崎 ミチ・アン)
	オープンキャンパス (高大連携課)
8月	オープンキャンパス (高大連携課)
	中・長期受入れ留学生 2024年度春学期 修了式 (国際課)
	大文字の送り火 観覧の会 (総務課)
9月	大学院 英語英文学専攻委員会 修論中間発表 (英語英文学科)
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』 (日本語日本文学科)
	エアライン業界対策セミナー (キャリア支援部)
	言語交換パートナー交流会 (国際課)
	国際課 留学生歓迎会 (国際課)
	オープンキャンパス (高大連携課)
	What Went Well With Eibun Students (英語英文学科 若本 夏美)
10月	キャリア・資格取得支援講座 説明・相談会 (キャリア支援部)
	キャリア支援部主催 キャリアカフェ～ざっくばらん～ (キャリア支援部)
	同志社女子大学 管理栄養士養成課程 創設55年記念シンポジウム (生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻)
	卒業論文 合同中間発表会 (居住環境研究室ユニバーサルデザイン研究室)
	英語英文学科 多文化共生ワークショップ (英語英文学科)
	2024年度 春学期 セメスター語学留学 事後授業 (留学報告会) (国際課)
	2024年度秋学期 新規スタッフ募集説明会 (LC STAFF)
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』 (日本語日本文学科)
	オープンギャラリー展示『ブックトレード 告知』 (サステナブル研究会)
	Lucky Market (EVE 実行委員会)

月	イベント名
10月	ブックトレード：本の回収（サステナブル研究会）
	AKP×DOJO MEET & GREET 同志社大学拠点に学ぶ留学生との交流会（英語英文学科）
	2024年度秋学期新規スタッフ募集説明会（LC STAFF）
	入試対策講座（高大連携課）
	Shakespeare Productionの宣伝（スクリーン投影）（英語英文学科）
	人間生活学科 地域計画研究室・都市計画研究室 合同卒論中間発表会（人間生活学科）
	部活動内での就職相談会（おどり・京炎そでふれ！花風姿）
	ホームカミングデー2024（広報課）
	表象文化 café「南米日系社会はどこまで日本なのか」（日本語日本文学科 中井 精一）
	人間生活学科村井先生ゼミ生からのキャンパス整備提案プレゼン（施設課）
11月	日本建築学会 光環境シンポジウム 空間を魅せる光と色 2024（日本語日本文学会 光と色の教育普及小委員会）
	EVE トークショーチケット配布（EVE 実行委員会）
	移動図書館（ライブラリーサービス課）
	サステナブル研究会イベント情報（サステナブル研究会）
	コンタクトレンズケース回収（サステナブル研究会）
	ブックトレード：本の回収（サステナブル研究会）
	生活科学部合同セミナー（食物栄養科学科）
	大津ゼミ「『源氏物語』のかさね色目」（日本語日本文学科 大津 直子）
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』（日本語日本文学科）
	学生会 前売り券配布（学生会）
	ポスターセッション（人間生活学科 小崎 眞）
	教職課程センター ミライティーチャーズコミュニティ 11月企画「教員採用試験の体験談を、先輩に聞いてみよう」（教職課程センター）
	居住空間研究室 授業での模型や作品の展示会（人間生活学科）
	Public Speaking II（AESA）発表会（英語英文学科 崎ミチ・アン）
	フードドライブ：食品回収（サステナブル研究会）
	ビビッと同女スタジオ ラジオ収録（高大連携課）
	オープンギャラリー展示『Digital Coloring』（生活科学部）
	EVE（学生支援課）
	生活科学部合同セミナー（食物栄養科学科）

月	イベント名
11月	表象文化 café「俳句を活けるー佐々木恵子×乙女ひととせ LINE 句会ー」 (日本語日本文学科 生井 知子)
	第19回日本給食経営管理学会学術総会 (食物栄養科学科)
12月	Line 句会葉書展示 (日本語日本文学科)
	Speaking Showcase (英語英文学科)
	クリスマスパーティー (国際課)
	Public Speaking II (AESA) 発表会 (英語英文学科 崎 ミチ・アン)
	2024年度 人間生活学科 講演会「フィンランドの暮らし」(人間生活学科)
	部活動内の管理栄養士専攻生による親睦会 (おどり・京炎そでふれ!花風姿)
	真綿のマフラー展 (人間生活学科 被服造形研究室)
	JSP 留学生 修了式 (国際課)
	Academic Skills 発表会 (英語英文学科)
	オープンギャラリー展示『LDK プランニング』(人間生活学科 奥田 紫乃)
	表象文化 café「イギリスで蘇る『古き良き中世』:ゴシックリバイバルの背景を探る」(日本語日本文学科 山本 由実、浮網 佳苗)
	オープンキャンパス (高大連携課)
	Speak! Share! Inspire! (英語英文学科)
1月	HIHUKU 展 (人間生活学科 被服造形研究室)
	表象文化 café「小津安二郎監督の台本には」(日本語日本文学科 宮本 明子)
	英語英文学科 卒業研究発表会 (英語英文学科)
	人間生活学科 居住空間研究室 卒業制作展示会 (人間生活学科 居住空間研究室)
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』(日本語日本文学科)
	若本ゼミ送別会 (英語英文学科 若本 夏美)
	卒業制作展 (人間生活学科 プロダクトデザイン研究室)
	授業内プレゼンテーション (追試) (英語英文学科 福島 祥一郎)
2月	卒業論文発表会 (人間生活学科 居住空間研究室)
	日学のつどい (卒論発表会・ポスターセッション等) (日本語日本文学科)
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』(日本語日本文学科)
3月	日本建築学会近畿支部住宅部会セミナー (人間生活学科 居住空間研究室)
	オープンギャラリー展示『表象文化 café テーマ展示』(日本語日本文学科)
	若の Wakka (全若本ゼミ同窓会) (英語英文学科 若本 夏美)
	オープンキャンパス (高大連携課)

## 2. 2024年度 月ごとの平均利用者数

ラーニング・commonsでは、1時間ごとに各エリアにいる利用者数を確認している。以下の表は、その利用者数の合計を月ごとに算出したものである。月ごとの利用者合計数を開館日数で割ることにより、各月の平均利用者数を算出した。

## ◇京田辺キャンパス 聡恵館ラーニング・commons

	2024年度			2023年度		
	開館日数	月利用者合計数	利用者数平均／日	開館日数	月利用者合計数	利用者数平均／日
4月	26	15,785	607.12	23	16,770	729.13
5月	22	18,580	844.55	22	18,301	831.86
6月	25	21,060	842.40	26	23,435	901.35
7月	27	29,468	1091.41	26	28,178	1083.77
8月	16	3,971	248.19	17	3,659	215.24
9月	20	3,698	184.90	21	6,603	314.43
10月	27	19,333	716.04	26	20,129	774.19
11月	23	20,015	870.22	22	19,849	902.23
12月	22	17,787	808.50	21	15,721	748.62
1月	18	17,051	947.28	18	20,880	1160.00



◇今出川キャンパス 楽真館ラーニング・commons

	2024年度			2023年度		
	開館 日数	月利用者 合計数	利用者数 平均/日	開館 日数	月利用者 合計数	利用者数 平均/日
4月	25	9,500	380.00	23	9,539	414.74
5月	22	10,137	460.77	22	9,411	427.77
6月	25	11,182	447.28	26	11,982	460.85
7月	27	16,906	626.15	26	15,389	591.88
8月	16	1,474	92.13	17	2,117	124.53
9月	20	2,261	113.05	21	3,107	147.95
10月	27	10,025	371.30	26	9,897	380.65
11月	23	11,119	483.43	22	9,768	444.00
12月	22	8,992	408.73	21	9,285	442.14
1月	22	8,882	403.73	22	11,391	517.77



## 2. 2024年度 ICT機器貸出件数集計

## ◇京田辺キャンパス 聡恵館ラーニング・commons

2024年度 ICT機器貸出集計 (月別集計)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
ノートPC	667	408	344	332	40	35	229	250	247	170
マウスセット	24	46	70	48	18	20	26	29	24	18
ヘッドホン	82	101	111	121	22	13	108	100	98	51
ヘッドセット	5	4	2	3			2	4	2	4
HDMIケーブル	2	1	9	15	2	5	6	8	7	12
HDMIアダプター	3	5	11	22	5	5	2	7	4	11
HyperDrive	1	1							1	
プロジェクター		1		4				1		
レーザーポインター			1	2	1					2
スクリーン(大)										
スクリーン(小)		1	1	1	1	1				
教材提示装置										
デジタル一眼レフカメラ										
microSD(カメラ用)										
ビデオカメラ				1						
microSD(ビデオカメラ用)										
ビデオカメラ用マイク										
SDカードリーダー			4	4						
三脚				6						
PC用DVDドライブ	1	5	2	4	1	3	2			1
Blu-ray Disc/DVDプレイヤー	1	1	1				1			
デジタルペーパー										
e-黒板セット										
ICレコーダー										
延長コード 2m									1	6
延長コード 5m	10	9	17	31	3	3	18	18	16	12
延長コード 10m	1		1	6						
VGAケーブル(D-sub)										
音声プラグ										

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
リモコン&タッチペンセット (BIG PAD用)										
・1階インフォメーション用 B・C・D・E	1	4	4	6	4	4	1			
・2階グループステイラム E		1	1	2	1	1				1
リモコン (プロジェクター用) 1階インフォメーション A・F								1		
その他		1			1	6				

## ◇今出川キャンパス 楽真館ラーニング・commons

2024年度 ICT 機器貸出集計 (月別集計)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
ノートPC	61	67	98	107	13	14	92	87	85	70
PC用マウス	36	15	46	50	1	6	44	40	35	22
ヘッドホン	9	17	13	11		1	10	8	5	5
ヘッドセット			1	1					1	1
レーザーポインター	1	1	1	1			1	1		
Blu-ray Disc/DVDプレイヤー	1	1	1	3	3	3			3	
教材提示装置										
延長コード		3	2	2	2	2	6		4	
インフォメーションキーホルダーセット (プロジェクター用)							1			
グループステイラムスケールセット (プロジェクター用)	2		1	9	2	3	2	2	1	2
プロジェクター (大) No. 1~4 ※SONY		1	1	1	1	1			1	
プロジェクター (小) No. 5~6 ※EPSON		2	2	2	2	2			3	1
スクリーン (100インチ) No. 1~3		2	2	2	2	2			2	
スクリーン (60インチ) No. 5		1	1	1	1	1			1	
スクリーン (50インチ) No. 4		1	1	1	1	1			1	
ビデオカメラ								1	1	
ビデオカメラ用マイク(コンデンサーステレオマイク)								1	1	
ICレコーダー										
デジタル一眼レフカメラ										
三脚									1	
PC用ドライブ		1			1					1
ポインター (クリッカー) Canon		1	1	2		1	1			
デジタルペン										

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
HDMI ケーブル		1	1	1	1	1			1	
SD カード / microSD カード								1	1	
舞台スカート (大)					1				1	
舞台スカート (小)										
カメラシューマウント								1	1	
マイクホルダー				2	1	2				
マイクスタンドネジ変換アダプター										
Mac 変換アダプター										
iPad/iPhone 変換アダプタ	1		1							1
android 変換アダプタ (type-C 変換アダプタ)	1			3				1	2	
メモリーリーダーライター								1		
e-黒板 (電子黒板用キット)										
■ (特例) デジタルサイネージ										
■ (特例) PC 電源コード	1	7	7	7	7	7	4		7	

## ◆ F D 活動報告（2024 年度） ◆

## 1. 本学 F D 関連事業

月	内 容
4 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度春学期授業に関するアンケート実施案内</li> <li>・ 2024 年度 FD Session mini 動画公開</li> <li>・ 2024 年度 FD Session Optional 動画公開</li> </ul>
6 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2023 年度秋学期成績統計資料配布</li> <li>・ 2023 年度秋学期 授業振り返りシート まとめ資料 科目代表者送付</li> </ul>
7 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度春学期（授業期間内開講科目）授業に関するアンケート実施 【実施期間：2024 年 7 月 9 日（火）～ 8 月 5 日（月）】</li> <li>・ 第 4 回 FD 講習会 開催 [教員 79 名、職員 3 名 参加]</li> </ul>
8 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度春学期（夏期集中講義科目）授業に関するアンケート実施 【実施期間：2024 年 8 月 19 日（月）～ 9 月 8 日（日）】</li> <li>・ 2024 年度春学期授業に関するアンケート実施結果個票配付・公開</li> </ul>
9 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度春学期授業振り返りシートの提出</li> </ul>
10 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度秋学期授業に関するアンケート実施案内</li> <li>・ 2024 年度春学期成績統計資料配布</li> </ul>
11 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度春学期 授業振り返りシート まとめ資料 科目代表者送付</li> </ul>
1 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度秋学期授業に関するアンケート実施 【実施期間：2025 年 1 月 6 日（月）～2 月 12 日（水）】</li> </ul>
2 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度 FD Session 開催 [教員 108 名、職員 3 名 参加]</li> <li>・ 2024 年度秋学期授業に関するアンケート実施結果配付</li> </ul>
3 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024 年度秋学期授業振り返りシートの提出</li> <li>・ 2024 年度 FD レポート第 18 号発行</li> <li>・ 2024 年度秋学期授業に関するアンケート総評 公開</li> </ul>

## 2. 学外におけるFD関連セミナー等案内及び参加者一覧

以下のとおり学外で開催されたFD関連セミナー等について教職員に向けて周知を行いました。

月(周知)	セミナー名・テーマ	主催	参加者
5月	FD推進ワークショップ	一般社団法人日本私立大学 連盟	—
	5月manaba オンライン講習会のご案内	株式会社朝日ネット	—
6月	6月manaba オンライン講習会のご案内	株式会社朝日ネット	—
7月	京都教育懇話会 72回例会	京都教育懇話会事務局	—
8月	2024年度IRフォーラム	大学コンソーシアム京都/株 式会社リアセック	—
9月	2024年度京都FD交流会	公益財団法人大学コンソー シアム京都	—
	佐賀大学FD講演会	国立大学法人佐賀大学	—
11月	2024年度manaba ユーザ会	株式会社朝日ネット	職員1名
12月	第30回FDフォーラム 「FD×SDで学生の学びと幸せを支える」	公益財団法人大学コンソー シアム京都主催	教員22名、 職員2名
1月	数理・データサイエンス・AI 教育教科拠点コンソーシアム	京都大学国際高等教育院附 属データ科学イノベーション 教育研究センター	—

F Dレポート 第 18 号

2025 年 3 月 発行

同志社女子大学 教務部 教育開発支援センター

〒610-0395 京都府京田辺市興戸

TEL (0774) 65-8413 FAX (0774) 65-8418

E-mail : kyoiku-t@dwc.doshisha.ac.jp

ホームページ : <https://www.dwc.doshisha.ac.jp/>



